

日本への回帰
(第五集)

大学教官有志協議会
国民文化研究会
編

日本への回帰

(第五集)

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編

は し が き

昨年八月三日、「大学運営臨時措置法案」は野党の執拗な抵抗を排除して強行可決された。その政治的効果は誠にめざましいものがあり、各大学は相ついで機動隊を導入して封鎖を解除して行った。一〇・二一の国際反戦デーや一一・一六の佐藤訪米阻止の街頭ゲリラは局所的には騒然たる内乱の様相さえ呈したが、おびただしい逮捕者を出して制圧された。急進的な学生組織は潰滅に瀕する状態にまで追いつめられた。十一月二十二日、日米共同声明によって沖繩施政権返還がきまり、七二年祖国復帰が確認された。この成果の上に立つて行われた解散、総選挙において自民党は圧勝し、社会党は四十以上の議席を失って空前の大敗北を喫した。七〇年代の幕明けは政府、与党のペースによつて開かれ、危機は一応回避されたかに見える。政治の次元においては確かに政府は「状況を先取りした」といえる。しかし問題はそれほど簡単ではない。異様な狂躁と明るさの底で、日ごとに病根は深まりつつあるからである。

封鎖が解除された建物に足を踏み入れた人々は、異口同音にその破壊のすさまじさに息を呑むという。その徹底的な破壊に費された膨大なエネルギーの源泉が何であるか理解に苦しむと

いう。生硬な政治的語彙とあらゆる春画の落書にとまどいを感じずるといふ。たしかに、そこにはかつての左翼理論を支えた「倫理」は影をひそめ、もつと原始的な、なまの衝動がうごめいている。それは貧困からの脱出、食うための最底線の確保という次元では把握できぬ問題を提出している。反逆する若者たちは、故意に「安定」と「豊かさ」に背をむけて、今の一瞬の生命の燃焼にわれを忘れようと欲するのである。「人間」であることを教えられなかつた彼らは原始的な「生き物」として自らの存在を確かめようとするのである。

全共闘の学生達が挑戦した対象は「学問の退廃」であつた。そしてその退廃の根源は「現体制」にあつた。体制下の一切の全否定という発想は、究極のところ自己そのものの否定に至り、際限のないニヒリズムの奈落にずり落ちてしまう。文化が人間の経験の累積であり、学問が持続的な知的活動の集積に外ならぬものならば、それらの一切を否定した精神の砂漠から一体何が生れるというのか。彼らの「純粹さ」は、現実を根づよく、不断に改革して行くという持続的意志を放棄したところに生ずる虚妄のまぼろしに過ぎない。彼らが「学問の退廃」に挑んだ、殆んど生命的な反撥は、彼らの内奥の生命が未だ枯死していないことを示すあかしであるが、その克服に示された彼らの思想と行動は言語道断である。進歩的文化人が自ら生み出した鬼子たちによつて、面罵され、「自己批判」を強要され、「平和と民主主義」という護符を泥靴で踏みにじられたのは、誠に皮肉な「歴史的必然」であつた。それは故意に歪曲された歴史

の痛烈な復讐であつたというべきである。

しからばこのような「反抗的人間」を作つたものは何であらうか。それは容赦なく個人を部品化して行く現代の機構への抗議であると説明することもできる。マルキストも実存主義者も現代の学匠たちはしたりげな口つきで「自己疎外」をいう。そしてそれは先進文明国の必然の現象だと解説する。問題を一般化することによつて、責任の焦点をぼかそうとする知識人共通のずるさがそこにある。たしかにそれもあらう。しかし日本の若者の反逆にはもつと作為的な原因がある。それはまさに戦後思想の原点ともいうべき「自我至上」の考え方である。「すべての人間は平等に創られている」というアメリカ独立宣言の受動態の表現には、まさしく「全能の神によつて」という言葉が自明の前提として省略されている。強烈な自己主張は共通の神への信によつてかろうじて均衡を得るのである。「神」を消去した機械的平等観はエゴとエゴの相剋を導き出すだけである。戦後の言論界の指導者たちは「自我」を超えた一切の価値を否認した。就中「国家」と「歴史」は憎悪の対象とされた。国家は悪である、日本の歴史は抑圧の歴史であるという風潮の中で、今の若者たちは育つた。かつて日教組は「道徳」の特設に反対を呼びかけたが、大阪教職員組合の自主カリキュラムは、幾つかの徳目の最後を「抵抗」でしめくくつていた。永い間、祖先がひたすら献身の対象として来た祖国日本を残酷に否定し、

抵抗こそ最高の美德と教えられた子供たちがどんな姿になるか、余りにも自明な結果が現われたらというべきであろう。破壊に費された尠大なエネルギーは、青年たちの内心において喪失されたものの逆証明である。日本の青年のエネルギーを、狂気に近い破壊の姿でしか現わし得なかつたというこの悲しい現実を噛みしめて見よう。「断絶」などという流行語で流してしまふには、痛ましすぎる現実ではないか。この問題を真に内的に解決できぬ限り、戦後はまだ終りはしないのである。

全共闘の闘争が遂に不毛の荒廃しか残し得なかつたのはなぜか。それは「体制」という言葉の呪縛があつたからである。そこに専門的な科学と、人間であることを学ぶ広義の学問との區別はあるにしろ、凡そ学問とは教える者と教えられる者との魂の接触、交流なくしてはあり得ない。「人格」の問題が欠落したところに学問論のなり立ち得る筈はない。魂ですら体制の所産というなら、自ら人間の主体性を放棄して、主体性の回復をいうのはナンセンスである。かつて松陰先生は師道の衰退を嘆いて次のように言われた。

公師みたらを取ること易く、師を撰ぶことつまびらか審ならず。故に師道軽し。故に師道を興さんとならば、妄みだりに人の師となるべからず、又妄に人を師とすべからず、必ず真に教ふべきことありて師となり、真に学ぶべきことありて師とすべし。〳〵

大学問題を一切の時務論から解き放つて、究極のところまで煮つめて行けば、こういう簡明なことばになつてしまふ。実に力強く、きびしく、美しいことばではないか。教育の「初心」であり「原型」であるものは、古来常にこの通りであつたし、将来もこの通りであらう。「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」という論語のことばは、「道を聞く」ことは生命を代償とするに価する喜びであつたという意味であらう。真に学問する者のみが、「行動コンプレックス」を克服できるし、行動すべき時に正確な行動ができるのである。ゲバルトを誘発する精神の空洞を、真に補填し得るものは、日本人の根源をみつめる地道な努力以外にはない。大言壮語と増幅された観念語が氾濫するなかで、われわれは終始自立した精神であらうとした。地すべりのような解体現象の中で一人一人の「志」がためされているからである。

今ここに合宿記録を出版するに当つて、講義要旨の掲載を許して頂いただけでなく、御多忙の中を、心のこもつた加筆をいただいた講師の先生方に改めて厚く御礼申し上げる次第である。

昭和四十五年二月一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき……………1

一、学問について

国家と大学……………鹿兒島大学教授 川井修治……………3

目に見える現実の社会……………明星大学教授 奥田克巳……………25

「文字の学者日用を知らず」……………修猷館高校教諭 小柳陽太郎……………37

学問と教育をそれ／＼の正しい軌道にのせるために

……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………57

二、和歌について

短歌入門——子規の歌を中心に——……………若松高校教諭 山田輝彦……………83

和歌は日本文化の精髓である……………亜細亜大学教授 夜久正雄……………105

三、講 義

これからの国造り——物心両面の理想は何か——

世界経済調査会理事長 木内信胤……………131

欧米は間違っている……………奈良女子大学名誉教授 岡 潔……………155

宮中見聞談……………元侍従次長 木下道雄……………179

年間活動報告

一年の歩み——霧島合宿より阿蘇合宿まで——

……………東京大学経済学部三年 石村善悟……………215

第十四回「合宿教室」のあらまし……………九州大学医学部三年 小柳左門……………243

歌 集…………………………273

あとがき…………………………294

—本書は昭和四十四年阿蘇において行われた

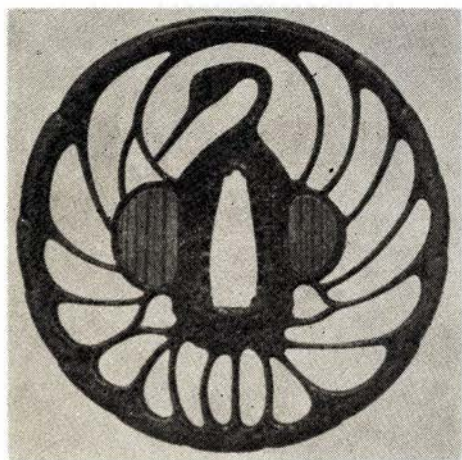
第十四回「学生・青年合宿教室」における

講義を中心として編集したものである—

■ 学問について

国
家
と
大
学

川
井
修
治



安 親 (銘 東 雨)

日本の中の大学

大学は国家の自由な批判者か？

現代日本の基本方向

破壊的革新勢力の批判

今後の大学問題

一、日本の中の大学

今日の大学紛争にはさまざまの原因や形態がある。例えば、学館・学寮の管理運営権の問題や会計の不正問題や学生処分の問題、或いはカリキュラム編成や学生参加の問題等々。けれどもこれらの問題は、言わば一般学生の関心を集めるきつかけとして取り上げられた口実に過ぎず、彼等暴力学生の終極の目標はこんなところにはしなない。問題の根本は思想問題、就中日本を革命に持ち込もうという体制変革の思想問題にある。このことは反日共系と称される学生集団の発表する文書が、はつきり証明している。だからして、暴力学生との対決に骨身を削ることは、それ自身必要なことでもあり、その努力に敬意を表するに吝やぶさかではないけれども、ここに視界を限定していたのでは、紛争の本質をつかむことはできないと思う。その意味では、先頃成立した大学立法も、なにかの効果はもつであらうが、思想問題としての大学紛争の根本的解決には、程遠いものと言わざるを得ない。そうではなくて、視界を拡大し、『日本の中の大学』、日本という母体の内部にある大学の存在意義に着目すること、換言すれば、破壊と変革の坩堝くわっほと化した今のような大学——しかもこれを更に街頭へ、政治へと拡大しようとしている——が、我々の祖国日本の運命とのかかわり合いにおいて何を意味するか、が今こそ問われなくてはならないと思う。

二、大学は国家の自由な批判者か？

こうした国家と大学とのつながりを考えようとする行き方を、冷然と嘲り笑うのが「大学は国家を超越して真理に直属する。それ故大学は常に国家（＝国権・国法）の批判者でなくてはならない」という考え方である。九大の井上正治氏は「自由な批判が大学の使命である」と大見得を切ったが、私の大学でもこの種の発想に立つ教官が案外多く、それに影響されてか学生の間にもそんな気分のものが多い。だがしかし、こういう考え方は果して妥当であろうか、私は次の点で疑問を感じざるを得ない。

『大学の自由』の濫用

いわゆる『大学の自由（アカデミッシュ・フライハイト）』は、一八一〇年創設されたベルリン大学の理念として、知られている（具体的には、(1)研究・教授の自由、(2)受講の自由、(3)転学の自由を含む）。そこで注意を要することは、第一に同大学の創設者フンボルト（当時文相）にしても学長フィヒテ以下の教授陣にしても、その理念にふさわしい学識と自信をもっていたことと、第二に入学した学生達も少数最高のエリートとして養成された、ということである。フィヒテは自分の学業を「神的理念の探求」と高言して憚らなかつたし、それ故に学生に対しても極めて厳格であつた。彼は大学が外部の権力（国家や教会）に対し毅然として独立を保つ

べきことを主張すると同時に、大学の中に常に「内部からの崩壊」の危険（＝教官や学生の怠惰や放縦）のあることを強調するのを忘れなかった。かくの如く、外に対して頑強であると共に、内に対しても極めて厳格であるという実質が、『大学の自由』を裏打ちしていたことを見落してはならない。この実質を見落して、口先だけで『大学の自由』を借用するのは、濫用も甚しいと言わねばならぬ。現在の日本の大学の教官や学生が、質において量において、その意識において実社会とのかかわりにおいて、百五十年前のベルリン大学創設時のそれと、同一の段で論じ得ないことは、誰しも認めるであろう。大学のあり方自体が変つて来たのであり、今にして古色蒼然たる『大学の自由』を得意げにふり廻しているのは、重ねて言うが、誤解であり濫用であるに過ぎない。

大学は独立のコンミュニオンではない

羽仁五郎氏あたりが『自由なコンミュニオン』などと言い出したものだから、流行語になつてしまつたが（『都市の論理』など時代的条件を無視したさかしらの言挙げに過ぎない）、大学は決して自由独立のコンミュニオンなどではない。独立と言うのであれば、自前で経営するのが本則であろうが、今の大学は法律的にも財政的にも国家によつて保護支援されており、その存立の大部分は国家に負うていふと言つても、過言ではない。それでいて、勝手気儘に存立の母体である国家を批判するのは、恰も道楽息子が自分の親の悪口を言うようなものではないか。し

かもその批判が度を超えて、国家の存立そのものを否定するような批判であるとすれば、廻り廻つて大学自身の存立の基礎をつきくずす結果になりはしないであろうか。まさに自殺的行為と称すべきであろう。

革命的批判と改革的批判

それでは、大学は唯々国家の方針に盲従し、一言半句の批判をしてはならないのかと言うと、そうではないと思う。大学が学問研究を主任務とする以上、或る程度現実から距離をとつて、大所高所から現実には批判を加えることは、当然許されてよいであろう。ただ問題はその批判の仕方である。仮にここで、革命的批判と改革的批判の二つを類別しておくが、前者は語義上から敵対的・破壊的な作用を及ぼすもの、後者はむしろ協同的・建設的なニュアンスをもつものと解してほしい。政府のやり方を、それではまづいからこのようにしては……と勧告するのは建設のための善意に発したもので、当然後者に属するものと言えるであろう（各種審議会などに学者が参加するのはこの形）。これに反して、政府の政策はおろか、国家そのものを否定するような批判は（マルクス主義に立脚すれば、当然こうなる）、革命的批判に属し、大学はそのような立場にいないと私は思うのである。更につけ加えたいことは、批判はあくまでも学問の基礎の上で行なわれねばならぬ、ということである。この所やたらに署名運動が流行しているが、専門の見識もないくせに安易に抗議文などに署名するのは、学者にもあるまじき軽卒な

行為である。

公務員としての大学人

最後に忘れてならないのは、大学人は国民全体の奉仕者として献身する義務をもった公務員である、ということである。公務員は手厚い身分上経済上の保護をうける代りに、きびしい行動上の制限のあることを自覚しなければならぬ。例えば「現憲法体制を暴力的に破壊しようとする運動に参加すること」は、人事院規則に明示された欠格条項に該当するもので、この規定を厳格に執行すれば、いわゆる造反教官など生じ得ないはずである。しかるに現在の大学の空気に、このような自覚・自制の風はほとんど見当らず、却って公務員であることが自由の制限であり拘束であるとするような気風がみなぎっているのは、まことに奇怪なことと言わねばならない。

これを要するに、「大学は国家の自由な批判者だ」などと言うのは、大学人の思い上りである。大学は、端的に言つて、国家からも手厚い庇護を受けている体制内の機関であり、それ故に国家の要請にこたえる義務を有するものである。この常識が通らない現在の大学は、全くもつて奇妙な存在というほかはない。私はここに現代思想の病根、国家無視・体制否定のひな型を見る思いがして、まことに慄然たらざるを得ぬ。一体、日本の現体制はそれ程悪いものなのか、是が非でも転覆しなければならぬ程悪いものなのか、一つ諸君自身の胸に問うてみてほ

しいと思う。

三、現代日本の基本方向

日本の現体制の大まかな指標を求めらば、(1)対外的には自由陣営の一環として国際的責任を果すこと、対内的には(2)議会主義に基づく自由民主主義、及び(3)経済的には修正資本主義の三つに集約されると思う。これが現憲法が拠つて立つところの基盤であることは、大学生ともあれば誰でも知つていよう。これがそれ程悪いものかどうかは、一つ反体制側の目ざす社会の指標、(1)共産陣営に属すること、(2)プロレタリア独裁という名の一党独裁、(3)全面的計画経済と比較した上で、判定してもらいたいものである。ここでは両者の優劣を詳説する余裕はないので、素朴でもかまわないから、諸君が今迄に得た知識と感覚に基づいて、いずれがより良いか判断を下してみてほしい。

無論私も、前記の三つの指標が示されておればそれで充分である、などとは思わない。それどころか現在の日本には、その三つの言わば方向づけを安固ならしむべき重要不可欠の基礎が著しく不安定であることを憂うものである。その不可欠の基礎とは何か？私をして言わしむれば、それは国民意識の確立である。当今の風潮では、国民意識などというものは戦前の産物で、戦後の世代には無用であるということになるかも知れないが、私はそうは思わない。考え

てみてほしい。自由陣營の一環としての国際的義務を果すと云うのはいいが、そのためには現実に共同防衛や対外協力が必要となってくる。その際、エコノミック・アニマルでは駄目なので、強固な国民意識に貫ぬかれた国家的行動でなくては役に立たないことは、中学生と雖も理解できる道理であろう。

自由民主主義を謳歌するもいいが、ここにも同様に国民意識が、つまり公共奉仕と融和互譲の精神が不可欠であることは、民主主義の歴史そのものが雄弁に実証している。古代民主主義の典型はアテネにあったと言われるが、そのアテネの民主主義の開花期が、実はベルシア戦争という国運を賭けた戦争の時期と重なっていることに、諸君は気づいているであろうか。挙国一致、身分や財産の差別をこえて全国民の間に国民意識が燃焼したことが、輝やく民主主義をもたらししたことを、時の指導者ペリクレスは告白している。そしてこの外患が去った時、アテネは悲しむべき衆愚政治に陥ってしまったことを、プラトンは嘆いたのである。類似の例は他にも多い。かのダンケルク敗退直後、イギリス国民の祖国防衛のための水際立った団結を回顧して、労働党の理論家クロスランドが「社会主義の理想の状態」と称したのも、同様の意味からである。要するに自由民主主義を有効に運用するには、各自が勝手気儘に自由を要求し平等を主張していたのでは駄目なのである。各自が自由な立場で等しく政治にも参加し、しかも全体として調和と統制のとれた状態を実現するためには、すべての成員の間に『公共の哲学』(リッ

ブマン）がなくてはならない。その公共の哲学の歴史的・心理的基礎が、ほかならない国民意識なのである。（修正資本主義についても同断）。

更に大切なことは、この国民意識を、理屈ではなく実感をもつて、心の中にたたえることである。国民意識というものは、単なる概念、例えばナショナリズムというような既成概念としての理解に止まっていたのでは、何にもならないのである。知的把握の範囲に止まらないで、心情の根底から理解されなければ、何にもならないのである。諸君は開会式の黙禱の折に、何を感じられたであろう。あれは、我々の祖国日本を支えるために、戦時平時をとわず生命を捧げられたすべての祖先達に対する憶念の黙禱であつたが、あのような折に、心の奥底から湧いて来た思いが、国民意識の源泉であるのではなからうか。そういう自然に湧き出た意識であるからこそ、日常の行動の中にもじみ出るものであり、それが志向や利害の相異なる各個人個人を結び合わせる接着剤として、絶妙の作用を発揮するものと言えるであろう。

現代の日本に、特に現代の若い世代に、根本的に欠けているのは、このような心情に根ざした国民意識であろうと思う。歴史の中に培われて来たもの、伝統の中に継承されて来たものへの冷やかな拒絶が、当今万能の風潮のようである。しかし、果してこのままでいいのであろうか？現代日本の三つの方向づけ、自由陣営・自由民主主義・修正資本主義が、革命勢力の主張する反対の方向づけと対比して、幾分なりともベターであることぐらいは、概ねの諸君には理

解してもらえと思う。けれども、この三つの指標が三つながら、下手をすると、つまり安固な国民意識を欠くがゆえに、絶間なく動揺と混乱にさらされ、はては破局に至らぬとは保証できない形勢にあることを、忘れないでいただきたい。

四、破壊的革命勢力の批判

日本の現体制を破局に陥れようとする動きは、もはや幻影ではなく、歴然と我々の眼の前に立ち現われている。その中で最も過激なのは、反日共系と称される一群の学生集団であるが、手段とタイミングの差こそあれ、同一の目的を追求するものとしては、日共・社会党・総評・ありとあらゆる左翼系市民運動等々、枚挙にいとまなしと言つてもよろしかろう。これら革命勢力の思想と行動に対する批判の論点は無数にあるが、とり敢えず重要と思われる二、三の点をあげておこう。

第一に彼等は、目的のためには手段を選ばぬ狂気じみた力の信者である。彼等の暴力行使の非道さについては、その一端を諸君は学園紛争の中で直接見聞しているであろうが、学園での暴力行使は、更に広汎な国家全体の暴力革命の一階梯であることが見過ごされてはならない。試みにここで、彼等反日共系の暴力闘争の指南書と言われる大田竜著『日本革命の根本問題』をとり上げてみると、彼等がいかに徹底した暴力心酔者であり、いかに狂熱的な暴力革命のコ

ースを想定しているかが理解されよう。この文書の開巻第一頁には「日本革命は武力革命である」とはつきり規定してある。つまり「我が国のプロレタリア革命は平和的に、議会を通じて実現することはできない。それは必ず武力をもつて議会の外で実現されるのである」と言い切っている（あれこれの実力行使に止まらず、殺傷兵器で武装して行なう革命だ、と断定している）。何故武力革命でなくてはならないのかと言えば、彼等をして言わしむれば、独占資本は今や完全に武装しており、帝国主義は核戦争の脅迫でもつて人民解放運動を抑圧しているからだ、と言う。つまり、「侵略的核世界戦争によつて全勤労人民の生存に直接の脅威を与えているとき、人民の蜂起で彼等に反逆し、彼等を武力で粉碎することは、人民の権利であり、且つ最高の義務である」という訳である。このような立脚地から彼等は、社会党・共産党など既成左翼の不甲斐なさを罵倒し、直ちに武装の準備・ゲリラ戦・武装デモとゼネストの結合による内乱の開始を絶叫するのである。何とも恐れ入った単細胞的頭脳の持主ではないのか!!

現在の日本の社会体制には多くの欠陥があり、いろいろな不自由や不満のあることは私も認めるけれども、これを武力を用いてまで徹底的に破壊しつくす以外に救済の方法はないかという、私はそうは思わない。曲りなりにも先進国なみの経済力と政治組織をととのえた今の日本が、それ程までに暗黒一色の体制下にあろうとは、私は思わない。たとえ個々の欠陥の克服には時間がかかろうとも、国民の連帯と努力の上に地道な改革をつみ上げて行くことにより、

歩一步是正の方向に進む可能性を蔵していると私は思うし、また国民の大多数もそのように考えている。一体、このように狂熱的に武力革命やゲリラ闘争を煽つてみても、肝心の国民大衆の支持のないところに、どうして成功の見込があり得ようか。例えば、彼等の偶像視するゲバラを見るがよい。ゲバラの三原則と言われるものは、①革命はつくり出すものであること、②広汎な市民を味方にする事、③ゲリラ戦により正規軍を駆逐すること、の三つであると伝えられるが、彼ゲバラはこの中の一項目をも実現し得なかつたではないか。彼は自分が革命をつくり出そうとした南米において、ついに広汎な市民を味方につけることが出来ず、揚句のはては優勢な正規軍の前にあつてなく敗れ去つてしまつたではないか。この事実の教訓に目を塞いで、同じ敗北の途を辿ろうとするのは、狂つた頭腦の持主としか言いようはなからう。因みに反日共系の学園暴力がいかに国民の間に人気がないかは、次の世論調査が明白に示してくれている。

学生運動に関する世論調査

(中央調査社 四十三年十二月)

問—大学の占拠・封鎖について

許せない

六二%

やむを得ない

九%

当然認めるべきだ

一%

一概に言えない

一一%

不明

一七%

問—大衆団交について

許せない

六八%

やむを得ない

六%

当然認めるべきだ

一%

一概に言えない

九%

不 明

一六%

問—街頭デモや暴力

許せない

八八%

やむを得ない

二%

当然認めるべきだ

一%

一概に言えない

四%

不 明

五%

問—警官導入について

当然やるべきだ

一二%

やむを得ない

四九%

絶対避けるべきだ

一六%

不 明

一三%

問—学生運動は一般の人に迷惑や不安を与えていると思えますか

思 う

七八%

思わない

五%

一概に言えない

九%

不 明

八%

問—学生運動と法秩序について

学生が正しいと思つて行なう行動であれば、法律に従う必要はない

二%

学生運動といえども、民主政治のルールに従うのが当然である

八〇%

どちらとも言えない

五%

不 明

一三%

第二に彼等は、これという説得力のある建設計画を持ち合わせていない。その実現過程において、多少の血の犠牲があるにしても、革命後に想定される社会形態が納得の行くものである場合には、ある程度の説得力を持ち得ると言うものであろう。ところが、前掲の『日本革命の根本問題』を見ると、彼等のいわゆる革命の青写真なるものが、いかに杜撰ぶざんな思いつきめいたものであるかに、一驚を禁じ得ない。この文書の第二部は「革命政府の果すべき課題」となっていて、革命をなしとげた後の状況が素描されているが、先ず第一の課題は「革命政府の実現」だとして、それを「プロレタリア独裁の最初の表現形態である……それはプロレタリアートの算術的全体の投票に支えられているものではない。それはプロレタリアートの最も戦闘的で勇敢な層が……直接行動の力によつて勝ちとつた権力である」と規定されている。つまり、言うところの革命政府とは、国民的合意の上に成り立つた政府でもなければ、労働者全体の支持による政府でもなく、街頭闘争→政権奪取に加わつた者達の政府であるという訳であるから、この者達の意のままに独裁権力（プロレタリア独裁という冠辞がつけてある）をふるつてよい立前になる。それに続いて、独裁的権力行使の条項がもり沢山に並べられてあるが、それらはいずれも権力奪奪の夢に陶醉した政治未熟児の作文としか言いようのないものであるけれども、証拠として幾つかを挙げてみよう。

国内政治については、次の条項を実施するという。すなわち、①天皇を皇居から追放、戦争

犯罪人として裁判にかける。②警部以上の幹部は追放、革命的労働者を中核とした革命警察の建設、③検察庁は完全解体、同じく労働者主体の革命的検察部（GPUのようなもの）の建設④裁判所を廃止し革命裁判所の設置、人民裁判の並用、⑤自衛隊は解散（幹部は人民の監視下におく）、労働者の民兵を中核とした人民解放軍の建設……。経済政策としては、①日銀・全経済官庁の高級官僚の追放、②外国為替の掌握、在日外国資産の凍結、③銀行資本の無償国有化、④百万円以上の個人預金の凍結、⑤株式取引所の閉鎖（株式証券類はただの紙片になる由）、⑥全企業の労働者管理、⑦不動産凍結、一人当り十坪以上の邸宅は無償没収・再配分……。外交政策としては、①米軍を追い出して沖縄奪還（最終的には沖縄全人民の武装ゲリラ闘争による）、②米第七艦隊に匹敵できる赤色海軍を中心とした革命的軍拡、③ソ・中・北鮮・北ベと友好同盟条約締結（台・韓・南ベとは国交断絶）、その間に共同参謀本部を設置して米帝に対し共同闘争、④貿易構造を全面的に中国に向け変える、⑤韓・台・南ベの人民の反米革命闘争の支援（義勇軍派遣を含む）、⑥キューバ・アルジェリアの革命援助、インド・インドネシアの農民革命促進……。といった具合である。常識ある諸君にとつては、この中のどの箇条をとつてみても、非常な混乱と苦痛と抵抗を生むことが容易に推察されるであらう。ところが彼等にはそのような考慮は皆無であるらしい。いや、考慮したにしても、プロレタリア独裁の名の下に弾圧につく弾圧をもって、抵抗をねじ伏せてしまふつもりらしい（文中到る処に、旧

支配階級の逮捕・追放・監視といった毒々しい用語が見られる)。もし日本が、こういう滅茶苦茶な荒手術を受けたと仮定して、その行きつく先はどうなるかというのと、それこそ破滅以外にはあり得ない(ロシア革命直後の戦時共産主義―そのやり口は驚くほど酷似している―が無惨な破局を招来したように……)。そして同時に、ソ連中共の衛星国として半永久的に『二十世紀の囚獄』と化することも、また疑い得ない。彼等はソ連にも中共にも不満らしく、独自の革命コースを進むと揚言しているが、国際政治の現実はそんなに甘いものではないのである。

第三に、以上のような暴力的破壊的志向をつき動かす衝動として、歪んだニヒリズムが根底に伏在する、ということである。これは反日共系分子に止まらず、一般学生の中の多くの『心情三派』にも共通する心的傾向であつて、その克服こそが思想問題としての学園正常化の中心課題であると思う。彼等は口を開けば『疎外』を云々する。疎外の要因としては、現実生活のありとあらゆるもの、マスプロ教育など大学制度(彼等は既存の大学制度から自分達がいじめられていると感じ、全面参加を強要する)から就職や給料やレジャーのこと、果ては公害問題やコンピュータから議会制度(これを形骸化した間接民主制と称する)に至るまで、すべてが彼等にとつては疎外感のタネなのである。現実の学生生活や社会生活の上で、自分の欲するままにならない事柄はすべて疎外の原因なのであつて、そこに暗い歪んだ被害者意識が生まれるのである。この被害者意識が昂じた果てに、一転して狂熱的な破壊衝動へと転化するのでは

る。すべてが反抗と否定の対象となり、それを制止するものは敵として対置され、攻撃の牙を向けられるのである——岡山大学で警官が死亡した事件があつたが、その直後構内のアジビラに「犬が一匹死んだだけなのだ、同情は無用である!!」と書かれていたそうである。その歪んだ心情に慄然たらざるを得ないのは、私一人ではないであろう——。要するに、彼等の心情は暗い疎外感と狂熱的な否定・破壊衝動との間の往復のくり返しにしか過ぎない。これぞ歪んだニヒリズムの所産でなくして何であろう。

何よりも、これに対して言いたいのは、素直に謙虚に自己の存在をふり返つてみよ、ということである。国家の庇護の下に大学生としての教育を受け、やがて一人前の社会人として世の中に出る自分が、いかに他者よりの思慮の中に生きているかに思い及ぶべきである、と言いたのである。仏教では四恩と言うが、何も四つに限らなくともよい。親の愛情、師友の恩情、そして更に同胞より受ける有形無形の恩恵や時代を超えた歴史の恩恵等々、己が身を謙虚にふり返つてみれば、それぞれに思い当ることがある筈である。そうした温いつながりの中に生きている自分に、先ず以て開眼すべきであろう。そうすれば、偏つた視角から現世を白眼視し、すべてに反逆と破壊を叫ぶことが、いかに空しい所業であるかに気づく筈である。

繰返し言うが、現在の社会に多くの欠陥のあることは否定しない。むしろ欠陥のあるのが人間の常でもあるのであろう。聖徳太子は千三百年も昔「共に是凡夫のみ」という貴重な教え

を垂示された。欠陥があるからこそ、お互に自省しつつ手をたずさえて協力一致し、一步一步の改革をつみ重ねて行く、ここに人間社会の基本的なあり方があるように思われる。このような人間観の根底において、そして日本の基本方向において、彼等の思想と行動にくみし得ずとする者は、今にして断乎防衛の意志を振りおこすべきである。そしてこれこそが学園正常化の第一歩であると思う。

五、今後の大学問題

さて懸案の大学立法が、四日前に曲りなりにも可決された。これによって、今後の大学紛争に一つの曲り角が到来するであろうことは明らかである。

正直言つて私は、今のような大学の乱脈状態が続く限り、何らかの法律的規制措置が必要である、とかねてから思つて来た。このような立場に立つ者は、現在の学内では無論極少数で、その為に幾度か苦しい破目に立たされたこともあった。けれども私は、自信をもって主張して来たし、今後もそうするつもりでいる。何故なら、立法反対派は口ではいろいろな理屈を言うけれども、紛争を解決（少くとも制止）する具体的な手段を何一つ持っていないからである。あの人達の一枚看板『大学の自治』は、今日ではも早内部から崩れ去っており、革命学生に対しては事実上無力であるからである。紛争の解決は、迎合的話し合いや小器用な改革案を披露

する程度では、とても期し難い。大学立法が可決された以上、実行は義務づけられる。これを機会に大学当局が非常の事態であることに目覚め、勇をふるって紛争防止に踏み出すことが、切に期待される。

勿論、反対の声もかまびすしくなることであろう。現に決議方法が不当であるから法律として認められない、などという反論がちらほら出かかっているようであるが、これはあまりにも牽強附会の弁にすぎない。第一、反対党は大学法案をまともに審議する意志があつたのか、議事妨害に終始して来た野党に今更民主的手続きを口にする資格があるのか……を考えれば、このような為にする口実が無意味であるのは自明である。それよりも、大学側が、一応法律として認めるけれども執行をさぼる、という慢性的抵抗が続く可能性は大いに考えられる。かくして下手をすると、大学立法反対を旗印に、大学が全共闘と共同戦線を組み、ことごとくに文部省——政府とごたごたを引きおこすことになりかねない。このような泥沼に陥ることを防止するためには、良識ある学生諸君の奮起を待望する以外に途はないと思う。

そのための若干の提案として、以下のことをあげておきたい。

一、大学当局に対して、立法に則つた措置を進めることを、強く要求すること。特に紛争校の指定を受けることは大学存亡の岐路になることを意味するから、それに至らぬ前に学内秩序回復のための有効な措置を要求することは、破壊を目的とする全共闘とは違い、立派に筋目の

立った要求である。

二、学生の代表制度（自治会や学友会）のあり方に総検討を加えること。いづこも同じと想像するが、セクト支配・イデオロギー固執・いい加減な決議方式・資金の用途……乱脈の限りの現状であろう。その総反省は当然学生自身の手で行なわれるべきであり、煩をいとわず力を傾注してほしい。

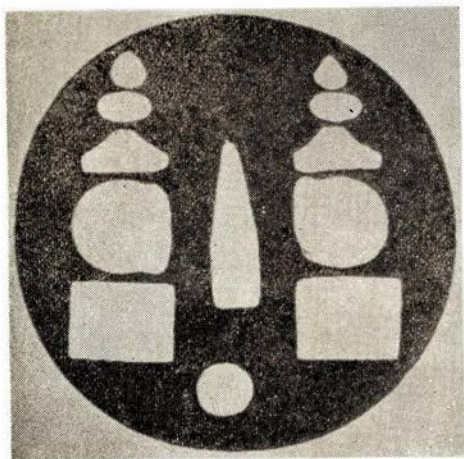
三、正常化を目ざす有志が他大学を通じて連繫協力を強化すること。学園紛争は単独孤立した大学の問題ではなく、全大学に共通している。既にそのための組織も抬頭中であるが、互に経験を交わし激励を交わし合いつつ、つながりを拡めて行ってほしい。

四、常に自己自身に立ちかえり、内発的な自覚の上に行動の力源をくみ出すこと。組織や宣伝活動にのみ追われて、自己自身を失ってしまい勝ちなのは、この種の運動につきまとう悲劇である。同信協力、たゆまぬ自己研鑽をこそ期待したい。

（鹿児島大学教授）

目に見える現実の社会

奥
田
克
巳



刀 匠 鋳

第一次産業革命

第二次産業革命

経済繁栄の原因

第一次産業革命

大変貴重な時間を拝借いたしましたして、所見を述べる機会を得ましたことを大変ありがたく思っております。

私の題は、ここに書いたようなことなのですが、実は、突然でありまして、あらかじめ準備してくる時間がなかつたので、常々考えておることを申しあげてみたいです。常々自分で頭の中で考えるときには、用語の詮索をする必要がないのですが、それを、ひとたび、こういう場でみなさんに聞いて貰うということになりますと、言葉を選ばなければならなくなります。私は大体技術屋だものですから、そういう言葉の扱い方はあまり得意ではありません。それで、いまからお話し申し上げますから、そういう言葉の扱い方はあまり得意ではありません。話を聞いて貰っているうちに、どういう意味で言っているのが自然に分つてこられるだろうと思ひ、お話ししてみることになりました。

われわれが、人間として考えなければならぬこと、また、学ばなければならぬことは何であるか、それを煎じ詰めてみますと二つのことになると思ひます。その一つは、人生態度の問題、つまりいかに生きるかという問題です。これは、精神的な問題、また、思想的な問題だと思ひますが、この合宿教室において皆さんが主として勉強しておられることも、この問題だ

と思うのです。もう一つの問題は、この私の表題にあるように「目に見える現実の社会」ということを知らなければいけない、ということなのです。

人間は、雲の上に住むわけにはいかないので、大地の上にくりひろげられている現実の社会の中に住んでいます。これは「事実」です。それで、人間の人生態度というものも、頭の中では基本的に分かっていることなのですが、さて、自分の足がついておるこの大地、この現実の社会がどうなっているのか、それが全然分からなくては、行動の方針を立てることも出来ないはずで、そういう意味で、さきほど申しました人生態度についてと同時に、現実の社会を、ありのままに見ることが出来なければいけないと思います。その意味のことを、私は、この表題に「この目に見える」と言つたのです。

「この目に見える」とは、形に現われておる、という意味で、人生態度の問題の方は、形の掴めない、目をつむつて考えるような問題なのです。

さて、人間の精神的な面は、千年二千年前と現在とでも、それほど進歩していかないのではないかと思います。そのためもあつて、古典を勉強したり、あるいは古人の人格をその和歌に偲ぶというようなことが、現実に入れわれの人生態度を定める上に非常に役立つわけなのでしょう。しかし「目に見える現実の社会」を見るということになりますと、昔の古典では間に合わないことになります。ところで、マルクスの言つたことで、たった一つだけ、これは間違つて

いかなかった、というのがあると思うのですが、それは、生産手段が変わると、社会の構造はそれにつれて変わるのだ、ということを行っています。このことはマルクスの言った通りだと思います。しかし、その生産手段というのは、素直にいまの言葉で言うなら、「技術」ということだと思います。技術が進歩すれば、それにしたがって、その社会の構造は変わって来るのだ、そういうことだと私は思います。さて、現実の社会を見るときに、一番眼目になるのは、やはり経済の問題でしょう。この経済の状態が変わっていく根源の役目をしてきたものは、私は技術だと思っています。

いまの日本では、技術革新の時代が来たとか、第二次産業革命の時代だなどとよく言います。が、第一次産業革命というのは、つい最近までは、第一次という言葉をつけずに、ただ単に産業革命と言っていただけでした。現代を第二次と言う必要上、前のを第一次と言う必要が生じてそうなったわけなのです。それで、この第一次産業革命というのは、マルクスがこの世に出てきた頃に始まっていたもので、「革命」と名づけるのはおかしいことで、本当は「革新」というべきものであったと思います。共産革命のように一晩でやつつけるというような革命ではなくて、何十年もかかって、じわじわと変わってくる革新なのです。それはともかくとして皆がそう名づけていますので、その言葉でお話しますと産業革命というものは、大体、いまから百年余り前から始まり、現在もまだ、第一次産業革命が完結しておらず、今日まで尾を引い

ておると私はみるのです。第一次産業革命がどういふ革命であつたかと言いますと、機械工業というものが出て来たために、機械技術によつて、それまでの労働は、すべてものを生産するには人間が手足を働かせ、人間の労働によつて生産していましたが、それが、機械を用いることによつて、つまり、人間の筋肉のエネルギーに替わるものとして、蒸気機関を使うとか、あるいは、水力電気を使うとか、要するに、機械に動力を与えて、機械に仕事をさせる、ということに変わったのです。これが第一次産業革命なので、そういう意味におきまして、これをエネルギー革命とも言つています。このエネルギー革命での一番代表的なものは、紡績ですが手工業時代には綿から糸を紡いだり、それを機に織つて布にしたりする仕事は、みな人間の手足の労働によつてやつておりました。それが紡績機械が出来たために、機械にやらせるようになってたのです。ところが、産業の分野によりましては、こうした産業革命がすぐに行なわれたところと、そうではなくて、かなり遅れたところとがあるわけです。たとえば、農業の如きは、かなり遅れたほうの部類です。石炭を掘る炭鉱も、ごく最近になつてスコップ、つるはしに代えて機械に掘らせるようになりつつあります。ですから、第一次産業革命をエネルギー革命として見れば、労働力の機械化ということは、いまなお進行しているのです。第一次産業革命は、百年経過してまだ本当は済んでいないのだ、ということになります。そこへ、現代の第二次産業革命というものが、もう始まつたわけです。

第二次産業革命

それでは、現在いう第二次産業革命というのは、どういう革命かと言いますと、これは、前のエネルギー革命に対しまして、今度は、頭脳の革命、頭の革命である、と言われているのです。ご承知のとおり、電子計算機という機械が出来まして、人間の脳髓の働きを拡大し、その機能までも拡大することが出来ることになりました。つまり、脳髓の記憶作用とか判断作用とか、そういった、脳髓の働きを、機械にやらせることによつて、人間が頭で、やるよりも、はるかに正確に、しかも迅速に、それをやり遂げることができるようになったのです。このことを頭脳の革命といえます。この頭脳の革命によつて、一体どういふことになるのかを、一つの例を挙げてお話ししてみましよう。ある国が敵のミサイルの攻撃を受けて、それを邀撃するため、バツヂシステムというのを利用します。このバツヂシステムというのは、敵がどういふふうに進撃して来たか、を観測し、それからそれに対して、味方の陣地はどういふふう活動を起こしたら一番いいか、というふうな作戦行動まで考えるのです。それを人間が頭で考えて決めるのでは時間がかかって仕方がないのでこれをすべて、計算機がやってくれる、電子頭脳がやってくれるわけです。そして自動的に最善の作戦にのつた行動までも、その機械が開始してくれる、それが、頭脳革命というものの、一つの特徴的なものだと言ってもいいのではないかと

思います。そして、すべての機械装置がオートメ化、あるいは無人化というやり方で、人がいなくても機械だけで勝手に勝手に作動してくれることになりました。

頭脳革命と申しても一番大切な点は、技術の研究開発が非常にスピードアップされたということ。これは非常に大切なところなので、例えば、月ロケットが月に到着したということ自体は、実はそれほど驚嘆すべきことではなくて、月に到達するということが、あんなに早く成功した、という所に驚嘆すべきポイントがあるのです。つまり、最初に人工衛星を打ち上げたときから、人間が月に到着するまでの間が、十二年しか経っていない。わずか十二年の間、それだけの技術の進歩があったという、このように技術が早く進歩する時代になっておるのだ、ということが、現代の特色なのです。そういう意味で物を見ていかなければいけないので、如何にそれが早く、目まぐるしく変わるものか、ということに対しての、実感が大切です。技術が進歩をする速度が早くなった、ということについて、もう一つ申しあげておきたいのは、レーザー光線というのが出て来たことです。このレーザー光線がある、ということが物理実験室で発見されてから、わずかに五、六年しか経たないのに、もうそれが実用されるようになっていきます。これは、実に驚くべき早さなのです。われわれが驚くのは、研究の速度の早さが、こんなに早くなった、ということなのです。

レーザー光線というのは、遠方にある鉄板にあてれば、その鉄板を溶かすことが出来るとい

う非常に強力な光線です。だからこれを殺人光線とも言います。それとともにこの光線は、指向性というのか、方向性が非常に強いことも特徴です。普通の光は光が進んでいく間はだんだん拡がってぼやけてくるのですが、このレーザー光線というのは、それが直線的にどこまでも進んでいくので、レーザー光線を、地球から月にあてますと、月の表面で半徑一メートルという小さなスポットであることができるほど、そのくらいシャープに直線的に進みます。こういう光線が実用化されますと、通信、とくに宇宙技術に関しては、非常に大きな威力を発揮することになります。アメリカのロケットが月に行つたときにも、このレーザー光線の反射鏡を月の表面に取り付けて帰つて来た、ということが新聞に載つておりました。最近の技術の研究がいかにテンポが早くなつたかということ、身に泌みて感じさせるものだと思うのです。人間というものは、とにかくこの変化ということ、忘れ勝ちなもので、現在の状態は前々からそうであつたように思い、将来もこのままの状態が当分続くように思い勝ちなものです。

経済繁栄の原因

時間がございませんで詳しくは申せませんが一つだけお話しておきたいと思ひます。それは戦後の日本の経済繁栄を支えている第一の原因は何かということ。それは、日本のおかれてある経済環境が戦前と戦後とですつかり変わつて来たことです。すなわち国土が狭いとか

天然資源が乏しいとかということは、今では重要な条件ではなくなつて、それに代わる新しい要素として技術革新が大きくクローズアップして来ているのであります。考えてみますと、領土が広いの狭いのといひましても、総面積を比較しただけでは意味のないことで、山間部と海岸地帯とでは土地利用価値に雲泥の差があり、地価を較べても千倍も万倍も違うのです。たとえば、米国をみても繁栄しているのは東西の海岸地帯だけで、中央の大砂漠地帯は徒らに東西交通を遮断しているだけで、利用価値はむしろ、マイナスであります。なぜそうなつたかといひますと、技術の進歩により、海上運賃が陸上に較べて格段に割安になつたからです。船舶の大型化だけを見ましても、五十万噸のタンカーと一万噸とでは大變な差であります。それに港湾施設の進歩や諸機械の自動化無人化による経費低減など、色々な技術の進歩が積み重なつたのです。そうなつてきますと、たとえば、鉄鉱石にしても、内地の山間部から鉄道で輸送するよりも、鉱石専用船で外国から輸入する方が安いということになり、天然資源の有無などは、もはや大して重大な問題ではなくなつたのです。それに加えて幸せなことは、日本の工場は、最初から期せずして海岸に出来たのであります。戦後コンビナートということが盛んにいわれるようになりましたが、これは各種の工場が軒を並べて隣接する海岸工場地帯のことで、工場から工場へ原料や製品の運搬が手軽にできることがその特徴なのですが、気が付いてみますと、日本で到る処に、そのコンビナートが期せずしてできていたのであります。否、見よう

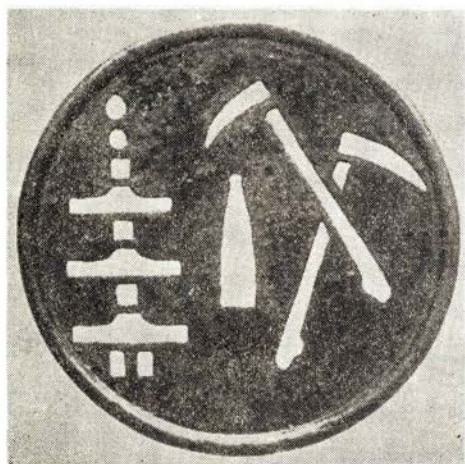
によりましては、日本全土が一大コンビナートであつたのであります。そのように見て来ますと、日本は領土の面積こそ狭いが海岸線は非常に長く、四面海に囲まれているという事は、最高の地理的条件に恵まれていたということになります。

わずかの時間でしたので、これで私のお話を終わりますが、どうか精神の問題とともにこの「目に見える現実の社会」をよく見ていって下さい。

（明星大学教授）

「文字の学者日用を知らず」

小柳陽太郎



無銘甲冑師作

山鹿素行

文字の学者

「武について」

人間の衰弱

山鹿素行

「文字の学者日用を知らず」という標題の言葉は、江戸時代の初期の儒学者、山鹿素行の「謫居童問」という書物に出てまいります。素行が生まれたのは一六二三年、江戸に幕府が開かれてから約二十年の後、戦国の余燼未だ消えやらず、民族的な緊張状態が持続していたころでした。安土桃山時代の、あの尨大なエネルギー、それが学問の世界に大きく花開いたのが、江戸時代の儒学であり、国学であると言われますが、私は山鹿素行の生涯に、まさにその典型を見るおもしろいがあります。

素行は会津若松に生まれ、六才の時江戸に移住、そのころすでに抜群の秀才の誉高く、九才の時、林羅山の門に入り、当時の官学の正統としての朱子学を学ぶのです。しかしその後朱子学に次第に疑問を抱いて三十七才の時、隠元禅師に会って問答をかわしたりするころには老荘の思想にひかれ、仏法、特に禅の世界に傾倒するのです。しかしこの世界にも学問の真実のあり方があるとは考えられず、最後に「聖学」に到達する。この間の事情について、素行はその著「配所残筆」の中に詳しく記しておりますので是非お読みいただきたいと思いますが、いよいよ最後に「聖学」に目覚めた時のことを素行は次のように述べております。

「寛文の初め、我れら存じ候は、漢・唐・宋・明の学者の書を見候故、合点参らず候哉(後

世の学者の著わした書物だけを読んでいたのでどうしても合点出来なかつたのではなからうか)、直ちに周公・孔子の書を見申候て、是れを手本に仕り候て、学問の筋を正し申すべしと存じ(直接に周公・孔子の書物を見てこれを手本にして学問の筋を正そうと思ひ)それより普通に後世の書物をば用ひず、聖人の書までを昼夜勘へ候て、初めて聖学の道筋分明に得心仕り候て、聖学ののりを定め候。(その後は後世の書物は読まず、昼も夜も聖人の書き残したものだけに接して、はじめて聖学の道筋が明らかになつた)」

この前後には、はじめて聖人の言葉に直接ふれることの出来たよろこびが、はずむような躍動のままに描かれていて感銘深い文章となつています。素行はこうして「聖学」にめざめ、寛文五年、四十四才の時「聖教要録」を著わしますが、この著述が罪にふれ、越えて寛文六年十月三日、赤穂に配流されることとなり、九日、江戸を発つのです。こうして延宝三年、五十四才の時まであしかけ十年間、播州赤穂における配流の生活が続きます。「謫居童問」という書物の「謫居」とはこの配流の生活をさします。そこで人々の質問に答えるという形式で書かれたのがこの「謫居童問」です。まず「学問とは何ぞや」という質問を第一に、道徳、政治、その他万般の人生問題、政治問題が提出され、それに素行が答えてゆくという形で、素行の人生観が完璧に表現された、卓抜した著述になつております。

文字の学者

問 当代の学文者、其の身の言行正しからず、古を引きて今をそしり高慢多し。是れに世事を尋ね、六ヶ敷むじかじきことを談合する時は、更に一事も通ぜず、学ばざるものよりおとれる類多し。其の失いづくにありや。

学者に高慢な言は多いが、彼らにはこの世に生きてゆく具体的な、複雑な問題を処理する力はない。かえつて学問をしない人よりも劣っていることが実に多いではないか。その間違いはどこから来たのか。この質問に素行は次のように答えます。

答 文学読書して実学なき輩と、世上になれ事物を学習して知恵ある人と、比くらぶるに及ばず。文字の学者日用を知るべからず。当時にならへる人は当用にくらからず。文字の学者は今を知らざるゆえに、時義に通ぜず、また古をも詳つまびらかにせず。

文章を学び書物を読んではいるが、具体的にこの世に生きていく学問、即ち「実学」のない人々と、この世に生きて、そこで学びとった、いわば「人生の知恵」を身につけた人々とは到底比べものにならない。「文字の学者」——言葉だけに頼り、観念だけを操って、人生そのも

のを自分の体験の中に統一出来ない人、そういう人は「日用を知るべからず」——日用の用と
いうのは「はたらき」です。日々にどう働いていいか、具体的な人生をどう判断して生きて行
ったらいかがわからないのだ。「当時にならへる人」——現在の生活の中からもなにか教訓を汲
みとつてゆく人は「当用にくらからず」——現在なにをしなければいけないかということがは
つきり見えてくる。「文字の学者」は、現在展開されている国民生活——それを素行は「今」
ということばで表現しているのですが、その「今」を知らないので「時義に通ぜず」——時義と
は現在何をなすべきかということですが、それがわからないし、現実を踏まえる力もない。こ
うして彼らは「古をも詳かにせず」——昔のこともわからないようになるのだということです。
次を読んでいきます。

凡そ実学にあらざれば文書却つて日用の害となる。其のゆえは古今相隔り風俗大いに違
ひ、大概百年に世間大變し、五十年・三十年に中變す。是れを考へず、数千歳以前のこと
を取つて、今日に合せんとすること、大なる誤なり。但し變ぜざることと變ずることと、
損益の道あること也。是れ実知きはまらざれば知るべからず。

真実の学問の道をふまえていなければ、書物は「日用の知恵」を働かせるのにはかえつて障

害となるというのです。そのわけは、書物に書いてあることは大概古えのことなのだが、世の中は絶えず流動してとどまることを知らない。その流動する現実の姿を無視して、数千年前の姿に現在のあり方を合わせようとするのは大きな誤りだ。ところが世の学者と称する者はいつもおとし穴に落ちるのだ。——そこまでは一応誰でも言いそうなことですが、素行は次の言葉をつけ加えるのです。「但し変ぜざることと変ずることと、損益の道あること也。是れ実知きわまらざれば知るべからず。」——世の中は変わる、だが今度はその考えにとりつかれてしまふと、もう世の中のことはわからない。世の中は変わる、だが言うまでもなく変らぬ面もあるはずだ。では何が変わり、何が変わらないのか、それが大切なのだ。さらにここで大切なことはわれわれはともすればその結論をすぐ他に聞きたがるのだが、それは許されないとということだ。われわれはその基準を自分で求めなければならぬ、「実知きわまらざれば知るべからず」——判断は結局一人々々の「実知」に委ねられるというのです。

次に文字の学者は異国を以て師とし、大唐と日本と同じく一天下なりといへども、国の大小有り、処・人品・万物の次第同じからず、必ず異国の風俗になさんことを云ひ、大唐を以て日本を評し、本朝に居て異国を願ふゆえ、日本の風俗に相応ずべからず。

「文字の学者」は今日を古に合わせようとする弊におちいることは前に述べた通りだが、それと心理的に全く同じ動機で「異国」、具体的には支那を師とし、日本の国の風俗を支那に合

わせようとし、この身を支那に置いて、そこから日本のあり方を批評しようとする。すなわち文字の学者がおちこむ世界、それは「古」であり「異国」である。だがその両者には共通したものがあつた。それは現実という手応えのない、抽象化され理想化された世界だということ。人々は、そこに自らの城を築き、そこに立つて現実の世界を裁こうとする。その城をもつていゝる者を人々は学者と呼び、インテリと呼ぶ。だがその人達の目に見えるのは、理想という幻影にすぎないので、日本という国の、この現実の国民生活は見えてこないのです。

(略)次に本朝のわざを知らざるゆえ、平生のこと、あしもとの小事、さらに不案内にして勤むること能はず。況や大義大事に及ぶといへども、実学あらざるゆえ、是れを取りてさしお指引することあたはず。忠孝・道徳・仁義と云ふも、かきつけてある文義字義にまかせて、思慮すること能はざるが故に、或は無欲にして財宝を手にとらず、口に云はず、人のぬすみとるをも考へず、主人より禄を得ても、あとより一銭の蓄へなくなり、朋友のたすけをうけても不日にまどしくなる類、これ無欲なる高潔なると心得、或は慈悲を仁と心得そこなひて、人に物をあたへとらせ、殺すべきも殺さず、戒むべきを戒めず、家に盗あれば我が仕置あしきゆえなりとて是れを赦し、人の無作法なるをば、我が徳のたらざるゆえなりとて改めざるの類、似て似ざる、まことの小人のいたすわざをよき言行と思ふ。是れ皆実の知らず、其の則のりを知らざるが故なり。

読んでいただけばわかりだと思いますが、なかでも「かきつけてある文義、字義にまかせて思慮すること能はず」という言葉は大切です。無欲にしても慈悲にしても、それぞれ大切な徳目でしょうが、人間生活のどの時点で欲を抑え、慈悲の心をかけてゆくか、その具体的な判断の下し方こそ、「実知」というものではないか。ただ徳目のままに、あらゆる場所で欲をすて、慈悲をかけてゆくことに満足するなら、そこには徳目という化物だけが生きていて、人間という血の通った存在は姿を消すのです。「殺すべきも殺さず、戒むべきも戒めず」という、その「べき」という言葉に注目していただきたい。人を殺すのがいいとか悪いとか言うのではない。どういう場合に殺すのがいいか、どういう場合に殺すのが悪いのか、その判断が大切だと言うのです。

「武」について

昭和二十年、戦争に敗れたあと、武力はいけない、力を用いることはいけないということになった。現在では誰一人そのことに疑問をいだかない。だが果してそうか。現在全共闘がたために暴力をふるっている。それに対して力を使うことはいけない。話し合いで解決しようと言っても彼等はそれに耳を傾けようとはしない。それどころか、暴力のどこがいけないかと聞きなおるのです。これに対して一体どう答えればいいのか。力を使うことはいけない——それ

だけでは答えにはならない、そのことに人々は気付きだしたのです。暴力がいけないということだけで押し通そうとするのは「文義、字義に任せて」、思慮を放棄した者の言ではないか。問題は力の是非ではない。その力の使い方の中に人間の生きた判断が輝くはずではないか。全共闘に責めらるべきは彼らが単に力を使うからではない。その力の使い方が下劣だから、すなわち「暴力」だからなのだ——この一点が何にもまして大切なのです。この問題について「謫居童問」の別のところで素行は次のように述べています。

問 兵を論ずるもの、多くは権謀を用ふ。然れども権謀を嫌はざるは兵の道なり。用ふべきか。

答 武は文の対にして、文武互に根ざすこと、陰陽五行の相待相生にことならず。文に武をはなたず、武に文をわすれざること、古の聖人皆然り。専文専武は共に行ふべからざるの道なり。

兵の道は権謀につながる。権とは正に対して仮りのもの、ふだんの人間関係では必ずしも好ましいものではない。その権謀につながる兵の道は矢張り廃すべきではあるまいか。それが質問です。それに対して素行は次のように答えます。文武は陰陽の原理と同じく人生にとつて欠かすことの出来ない両面である。文だけの生き方、武だけの生き方というのは許されない。武

力を一切排除した平和一本の生き方、平和な人間関係を無視して武の力だけで世の中をきりまわそうとする生き方、そのいずれも共に「行うべからざる道」である。

文にも仁義・権謀あり、武にも仁義・権謀あり、仁義・権謀は文武の用たり。用ふると用ひざるとの論、ここにおいて言ふべからざるなり。是れ又人にこころみ身に試み、天地に考へ、古に法のつとらば、言はずとも其の則、明らかなるべきなり。

武は権謀につながるという。しかし文もまた権謀につながるし、文が仁義に結びつくように武もまた仁義と結び得るのだ。仁義と権謀とは文の世界、武の世界それぞれにおけるはたらきを示したものにすぎない。いかなる場合に仁義の道を、いかなる場合に権謀の道を選ぶか、それは複雑な人生の、その場その場における判断にゆだねられる。その判断は、人にこころみ、身に試み、——すなわち具体的な生きた現実の中における経験の累積の生み出した知恵から生まれるというのです。

(略) 兵に王伯の差別あらず。王者之を用ふれば王者の兵となり、伯者之を用ふれば伯者の兵となるなり。(略) 只だ其の用ふる人に従つて其の用をなす、故に武に王伯の別なきなり。文も亦然り。堯舜も此の文を用ひ、桀紂も此の文を用ひて、興亡治乱は其の人に

あることなり。

伯は覇、王が道徳によるのに対して覇はここでは邪道を意味します。兵そのものには王もなければ伯もない。問題は武力を用いる人の生き方に従つて、武力は正ともなり邪ともなる。それは武だけには限らない。文もまた、それを用いる人に従つて正にも働けば邪にも働く。堯舜は文を用いて理想の政治を世に行い、桀紂もまた文を用いたが、彼らは世にも稀れな残酷な政治を行ったではないか。武を用いれば世は乱れ、文を用いれば世は治まる———そういう固定的な考えは用をなさぬ。興亡治乱、それは結局人間の問題に帰するといふのです。武の問題についてもう一つ引用します。

問 武を先にすとせば人心おだやかならず、人の風俗たけくして寛仁の体にあらざらんか。

答 武に品多し。武備とは、人のあらはれざる已前に、其の機を察して其の設けをなすを云ふ。其の設けある時は、事にのぞんでつまづくことあらず。故に文事行なはる時は武備を設け非常を制す。是れ天險地險の道更に離ることあらざる也。

武を先にすれば人の心が荒れ果てるのではあるまいかという、現在でもありそうな質問に対

して素行はこれを否定し、武の本質は人生における非常の事態に對して、あらかじめその動きを察知して、その準備をなすものであるとして、武の積極的な意味を説くのです。

若し兵を弄び武を驢けがせば武却つてやぶる。兵を弄び武を驢すといふは、合戦弓馬の事を宗として之を好み之を弄ぶことなり。たとへば劔刀は武器なり。能く制し、能くとのへて鞘にをさめ腰によこたへぬるに、其の道をきはめて而る後武備を正しくすと云ふなり。若し劔刀を好み、常に之を抜きもてあそび、鞘にをさめずして腰に帶せんとせば、自らあやまちをなし害をうくべし。是れを兵を弄ぶといふべし。

劔刀を鞘におさめないでいつも抜きもてあそぶ者ものはたしかに多い。だがそれは「武」の風上におけない生き方と言わなければならない。問題はこれをいかに「制する」かにあるのだ。

然ればこれ兵を好むに似て、実は武を魚略にいたし、これを尊ぶの道を失ふ。是れ武を驢すなり。兵はなほ火の如し、戢をまめざれば自ら焼くといへり。(略) 豈唯だ武のみ弄驢弄らうとくならんや、文も亦之を弄べば乃ち驢る。

「兵はなほ火の如し、戢めざれば自ら焼く」という言葉ははげしい。武器は自らの人生觀の

中で統一できなければ、自分を焼き亡ぼしてしまふような恐ろしいものだ、だからといってそれを捨てることは出来ない。それがなければ非常の際に身を処することは出来ないのだ。すなわち武を用いる人には武をリードするだけの精神力が絶対に要求される。その力が武の前提にならなければならぬというのです。その力がなければかえつて武を黷すことになつてしまふ。だが「弄べばこれを黷す」というのは武の場合だけではない。文の場合もまたこれを弄べば必ず黷れる。それは先の桀紂の場合を考えただけでも明らかです。問題は文がいいか、武がいいかではない。正しい文のあり方、武のあり方なのだ。武がいけないのではない、どこで刀を抜くかという、その判断をいつ下すか、それが問題だし、それにとりくむのが本当の学問だというのです。「実知」はこうして養われるのです。

われわれは沢山の書物で自分を鍛えなければいけない。だが、いよいよ最後の場合、一人々々がどう動くべきかということは万巻の書を読んでも書かれてはいないことを知らなければなりません。剣道の試合で刀を抜いて目と目を見合せたとき、相手の出方に対してこちらがどう判断するかそれは全く孤独な世界の中で自分だけが下さなければならぬものなのだ。ちよつと待つてくれ、本を見てくるからということとは許されない。人生はそういう刹那の積み重ねだというのです。

色と云ひ、利と云ひ、奢と云ひ、ともに天下の人々の好む処にして、聖人の道是れを禁ずるにあらず、是れ則ち公義也、公論也。されば色を好むべくして色をこのみ、財をこのむべくして財をこのみ、奢るべくして奢るは皆礼なり。若し好むべからざることをこのみ惑ふ所あらんにおいては聖人之を戒しむ。

ここで言おうとしていることも同じです。色とか利とかいうのは聖人君子の道に反するというのが通念ですが、これがいかに他愛ない図式にすぎないか、人生そのものに深く触れた素行にとつてはそのまやかしはあまりにも自明であつた。色を好むことそのものは善でもなければ悪でもない。色は好むべくして好めという。その「べく」にすべてがかけられているというのです。その「べく」の具体的な判断力を身につけることが学問であり、こうして得られた「実知」こそが人生にとつてかけがえのないものだ。素行はくりかえしその一点を説くのです。

人間の衰弱

再軍備は是か否か、資本主義か社会主義か、君主制か共和制か、右か左か——すべての人はそのように問題を提出し、その中で議論をたたかわせる。いまではそれが政治を論じ人生を論じるときの常識になつてしまつています。しかし素行のいう学問のあり方からすれば問題の本

質はその再軍備や、資本主義や社会主義や、そのような体制自体にあるのではなく、それらをどのように働かせるか、その働かせ方、心の動かし方にあるはずだ。

しかし人々には心や心を働かせることには何の興味も示さないようです。ただ一つの制度をもつてきさえすれば、あとは少しも心を労さなくても、そういう体制を渴望するだけだ。こうして右から左まで、さまざまの体制の見本や設計図が展示され、それをああでもないこうでもないと品評する。だがそんなことを続けているあいだに、人々の心がいかに無残に衰弱してしまっているか、人々はそのことに気付かない。気付いても、その人間の衰弱を現在の体制のせいにしてしまう。そのような滑稽ないたちごっこを繰り返しているのが現代の状況なのです。

私たちはこの合宿で唯物史観やマルキシズムをきびしく批判してきましたが、それは革命にすべてをかけ、すべての悪の根源を現在の体制のせいにするそれらの思想的な態度が、この現代の思想状況の典型であると考えられたからでした。だが心を労することを忘れ、制度にそのすべてをかける思想、それはマルキストに限らず、現代のあらゆるところに行きわたっている。それは左翼の人々だけでなく反共をとなえている人々にも、その他さまざまな立場で政治を論じている人々にも共通することなのです。たとえば革命に反対すると言って、日本の国体というものをふりかざして対立する人は多い。だがその人たちは国体を観念として説くだけで、日本がどのように生きてゆけばいいかという具体的な問題の中に身を没して、さまざまに

心をくだこうとはしない。すなわち素行の言葉をかければ、「身にこころみ、人にこころみ」ようとはしないのです。この点において、いわば「国体主義」というべきものは、マルキストと同罪といわなければなりません。私たちはマルキストと戦うと同時に、このような観念的国体論者とも戦わなければいけない。本当の学問につながるためには、左翼に対する反左翼というような次元は勿論、左右両翼に偏しない中正な道などということでも到底だめなので、そのような、どれかの枠の中に自分を位置づけようとする身の処し方自身を断ち切らなければいけない、いわば反「文字の学者」でなければなりません。とはいっても「文字の学者」におちいる危険性は生きているかぎり断えず私たちの前に迫っています。だがその危険を克服し、「文義字義」によって縛られない、瑞々しい心を常に持続しなければならぬ。それが私たちの「たたかい」なのです。この点についても一つ申し上げておきたいことがあります。

皆さまがこの合宿に友達を誘われたとき、その人は次のように言わなかったでしょうか。——君たちの言うことはよくわかるように思う。しかしそのような研究会に入って一つの考えに固まるのはいやだし、自分はまだ充分勉強が出来ていないから、もうしばらくいろいろの人の意見を聞いてからにしたい——一応もつものように聞えます。この世のすべての思想団体というものは何らかのスローガンをかかげ、その旗印のもとに人々を結集する。中心になる人はその特定の思想を会員に浸透せしめるためあらゆる手段を用いる。人々はその思想の洗礼を

うけて目を輝やかせ、そして行進をはじめ。これが思想団体の通念であれば、私たちの合宿に對する以上のような疑問もいわれのないことではないでしょう。しかしその疑問のなかに「いづれ人々は何かの思想体系を身につけなければいけないのだろうか、今は少し早すぎる」という考えがもしあるとすれば、これは許せない。そういう人の心の中にはさきほどの、制度さえ手にはいれば、あとは心を使うまいというのと同じ心理がある。制度の代りにここでは思想体系がもち出されたにすぎません。どんな思想を身にまとうのが一番いいか、人々は衣裳を求めるように思想を求める。その衣裳を手に入れるために人々は大学というデパートにはいつて行くのです。そこで最も魅力的な、ニューモードの衣裳を手に入れて大学の門を出る。その人たちにとってはこの合宿教室もその衣裳の一つにすぎないので。だが思想は、それを衣裳として身にまどつた時にすでに思想ではなくなる。これが山鹿素行が繰り返して説いてきた点ではなかつたか。

次に文学者人を教へ立つるも、子孫を警戒するも唯だ物読み文学ばかりにて、知者も学ばば愚者になり、勇者も是れにならへば怯者となるべし。況や民の長、侍の司となりて其の下を下知せんこと沙汰に及ばざることなり。

「知者も学ばば愚者になり」という言葉は痛烈です。学ぶことが衣裳を身にまとうことと同

義となれば、学べば学ぶほど人間の智慧はその衣裳の中で衰弱し、刹那における決断力にぶつてゆく。中学から高校にかけてもつていた潑刺とした精神が大学に入るとともに次第に失われてゆくのも自然でしょう。学べば学ぶほど精神は強く働き、本当の知者となり勇者となる。そういう学問のあり方は何か、私たちはこの問題と今こそ正面からとりくまなければなりません。

次に文書をひろく覚ゆるほど、自身の知うすくなりて思慮のいとまなく、何事も皆文書にありと心得るゆえ、実知必ず虚しくして、外より入る尅の学文の知ばかりになり、大道の実つひに得べからず。大概文字の学者此の失あるを以て、日用大いにくらし。世間を能く知り、そのわざを詳かにする人は時宜の学者なれば文字の学者何ぞこれに及ばんや。

引用してゆけばきりがありませんが、結局素行が「謫居童問」という分厚な一冊の書物で言おうとしたことは、頼るべきものは何もない、結論じみたものは何もない、ということですが、何かの杖にすがらなければ物を考えることができないというようなことではだめなので、その杖を捨てて自分の足で大地に立てということですが、理論を究めるのはいい、しかし理論という杖をぼんとはねられると身体全体がぐんと崩れてしまうような、そういう生き方は許されません。だが、ここで一寸注意しておきますが、すべての杖をすてよといえ、それはあらゆるも

のに距離をおいて他のものにまきこまれてはいけないという、インテリ好みの言葉だと考えられる人がいるかもしれない。しかし素行のいうところはそんなものとは似ても似つかない。むしろそれとは全く逆に、あらゆる問題の中にこの身を投げこみ、すべての思想にこの身をさらしつつ、あらゆる主義なり主張なりを、自分の力でこなし、そういう豊かな逞しい心情を養えということ。すべての杖を捨て去ったとき、その人がいかに人生ととりくんで生きてゆくか、それが人間がこの世に残す、ごまかしのきかない、最後の「あしあと」なのだ。素行はこの「謫居童問」という書物で、その覚悟を一人々々の胸に問いかけています。

(福岡県立修猷館高校教諭)

学問と教育をそれぞれの

正しい軌道にのせるために

小田村寅二郎



京透鴈

集団と個人

討論のあり方

○×式思考との訣別

言語魔術について

文化科学の誤り

「まごころ」

資本主義社会について

唯物史観について

「口さきの深さくらべ」

集団と個人

現在、日本の教育界は小学校から大学まで抜き差しならない段階に近づいているように思います。ことに大学においては崩壊寸前の状況が誰の目にも明らかになっていますが、高校以下の段階においても、それなりに手のつかないような状況が公然と広がっているようです。

では一体どうすればいいのか、まず身近かな問題から考えてまいりますと、第一に申し上げたいことは、集団に紛れこむことによつて、自分自身で反省することから逃避するような、劣弱で卑怯な生き方に訣別しなければいけないということです。われわれは或る集団の中で生きていますが、その実体を見ますと、自分だけが、その集団から離れることはまことに都合が悪いということです、いつのまにかズルズルと集団の一員になつていくというケースが非常に多い。こうしてその集団の一員としてものを考えて行くわけですが、自分自身で一人立ちしている人がものを考える場合には、四方八方いろいろな、身のおきどころもないような矛盾にぶつかる。ところが集団の中では、上からの指令に従い、上の人の考えに一応この身をよせておけば無難だということ、自分一人の胸の中で苦しみぬくということが比較的少なくなり、ある場合にはそういうことから逃げてしまうことも可能になつてくる。特に現代の集団は、日教組の倫理綱領がいみじくも示しているように、団結を大変厳しく要求していて、お互いにスク

ラムを組むことの中に倫理がある——「団結は最高の倫理」ということになっている。そのため左右の両方の人の手にぶら下って歩む人間の姿、そのような安易な生き方が何と日本中にびまんしてしまったことか。こうして集団によるデモンストレーションの威圧によって政治が動いてゆく。それが、あたり前になってしまつて、今日ではこのような集団と個人との関係についての真面目な反省が、日本全体から失われつつある。私はそのことを大変悲しむべきことだと思ふのです。

そもそも人間はこの地上に生きた生き甲斐を、その短い人生に賭けて死んでゆく。その限られた期間の中に人間は自らをみつめながら道を求めていく。私はその意欲と苦しみの中に人間の姿があると考えますが、このような集団の中に身を投じ、その流れのままに身を托している方々にはその苦しみもわからないし、それだけの意欲も感じられない。いわば無痛感の状態で人生が送られてゆく、私にはこれが実に歎かわしい事態だと思われるのです。こうして上からの指令であれば、或は集団全体の意向であれば、「ウソ」をつくことも平気になってしまう。九州の或る県の高専学校では、教頭さんが一方で管理職手当をもらいながら、一方では組合の会合に出てその座長をつとめている。こういうでたらめなことも集団の中に埋没してしまつた人には何一つ心の痛みにはならないのです。このように「ウソ」をつくことも、さらには相手を憎むことも、相手に「ゴマカサレル」ことも平気になつた。こうして失われて行く人間性を

どのようにして奪回してゆくか、それが現代に生きる一人々々に与えられた緊急な課題であると考えます。

討論のあり方

次に申し上げたいことは、討論を行う場合、又は討議を重ねてゆく場合における「概念整理の乱用」との訣別です。討論の場でよく経験することですが、一通りの発言が行われたあと、座長が「ただいまは大体においてこれこれの発言とこれこれの発言がありました」と整理する。そしてその整理の上に立って討議がつけられます。しかしそのような整理の仕方、一体何が残るのか。大切なことは発言する人の、声は小さくとも、話の内容が一見辻褃が合わないように見えても、その人の表情や態度に見えるもの、何かを訴えたいという切迫した気持ではないか。それらが積み重ねられ、そのような言葉に耳を傾けてはじめて、みのり豊かな討議がなされるはずですが、器用にものを言った人の意見だけをまとめて、「ただいまの発言は総じてこのようでした」という座長のふるまいは一体何か。一人一人の個性豊かな素晴らしい考えはすべて消え去って、論理的に整理された、格好のいいものだけが最後に残るだけではないか。この洋のようなものを残すために多大の時間と労力をかけて会議を重ねているのが現代の日本なのです。だが日本人本来がやってきたことはこれとは違う。

例えば人々は初対面のときにはキチンと正座をして、相手の顔をジーツと見つめて、そしておもむろに「われは武蔵国の住人、何の某」と名乗る。その一声だけで、その人の目と態度と動作だけで、相手を理解してきた。それが日本人の話の交わし方でした。だが現在はこのように一人一人の人間の発言を、その魂の現われとして、評価することをしなくなつて、知的、論理的に処理することが天下の流行になつてしまつたのです。そこでは人間の心と魂とが、第二義第三義にされ、「口さきの巧み」がすべてに優先してしまつている。だが大切なことは口さきが巧みであるか否かではなく、その人が自らの体験を語つたか否かにあるのです。例えば自然科学の世界で討論が行われる時などは、口さきの巧みさなど問題にならず、具体的な実験の結果だけがものをいう筈です。これと同じく人文科学の世界においても、もつと体験的な発言を重んずべきであり、その中から相手の全貌をくみとる力を養わなければならぬ。ここにも一人一人が人間性を奪回する緊急な必要性があると思ひます。

○×式思考との訣別

第三の問題として、人文科学の分野では○×式思考法を、⊗式思考法に改めることを申し上げたい。戦後を風靡したのは○×印の教育でした。勿論正しい字と間違つた字を二つ並べてどちらが○か×かというような単純なもの整理には○×式は有効でしょう。しかし文化科

学、精神科学、或は人生問題、政治外交問題の分野ではほとんどが、○と×で区別されるのではなく○と×とが何らかの形において、あるいは深く、あるいは浅くかみあっているのです。ところが実際は○でなければ×という考えがあらゆる分野に滲透している。例えばここに集まっているグループはマルクス経済学を批判する——ただそれだけのことで、このグループは左翼ではないから右翼だという。このような単純な思考がいかに世の中の純真な心を痛めつけているか。○×式テストの乱用の結果、一つの課題には二つの相反する答しかあり得ないという錯覚が、おそろしいほど人々の頭を支配してしまっているのです。

戦争と平和、その二つはたしかに概念としては対立している。そしてそれだけで比較すれば誰でも平和に○をつけるに違いない。しかし現実には隣接する国同士の利害の衝突もあるし、火花が散るような外交折衝もくりひろげられている。それが何かのはずみで干戈を交えなければいけない事態が何時くるかわからない。その危険に耐えながら平和が保たれている。それが現実ではないか。その実態の中に現われてくる戦争と平和のすがたは、○×式では到底答えられない筈です。「戦争絶対反対」という。しかし隣国が攻めてきた場合一体どうするのか。自分の愛する妻とか母親とか、武器一つもたない者がもしも敵軍に餌食にされようとするときにはどうするか、その時は誰しも戦わざるを得ないはずだ。ここでは○×式思考は絶対に通用しないのです。「平和なる事態」を維持しようとするために「戦争なる事態」が不幸にも発生す

る。それが現実の人生なのです。従つて戦争と平和の関係を○×で示せば実は⊗となるのです。平和○を守るために戦争×をするという現実の姿がここに示されている。だから「戦争絶対反対」ということは言葉としては全く意味をなさないのです。そのように抽象的に考えるのではなく、この日本を戦争をしないような国にするにはどうしたらいいかと考えるべきでしょう。そのためには外国の侮りをうけないため軍備を充実させることが必要なこともあるでしょうし、武器をもたなくても、侮りをうけない緊張した国民の団結で国を守ることもあるでしょう。ものごとはそのように現実的に考えてゆかなければなりません。

概念としては対立しているが、現実の体験としては一つにとけあうもの、論理的には矛盾しているが、人の心には一つのものとして味わわれるもの、それは例えば仏教でいう「煩惱即涅槃」もそうだし、もつと西洋的な、論理的な表現としての「絶対矛盾の自己同一」という西田哲学のことばもそれにはいるでしょう。万葉の昔、筑紫の防備のために、いとしい親や妻子に別れて西に下つてきた防人たちはその心の中にさまざまな矛盾を感じていた。だがその矛盾が緊張した防人たちの心境に統一されたとき、彼らはその心境をすばらしい歌として表現しました。

父母が頭かしらかきなでさくあれと言ひしけとばぜ忘れかねつる

私の頭をなでながら元氣で行ってくれよと言ってくれた父母の言葉が忘れられないという歌です。方言が多く使われておりますが、遠く離れば離れるほど父母が忘れられない。帰りたいという気持は溢れるほどに感じられる、だが命をうけて西に行かねばならぬ、その矛盾をこの青年は素直に受け止めている。そしてそれを歌によむのですが、その歌には全く矛盾を感じさせない。ということはその青年の心の中には緊密な統一感が成就されていたことを示しています。

唐衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母おもなしにして

残してきた子供には母親がない。その子供は戦に出てゆく自分の衣に取りついて泣くのです。実態は悲惨だし、作者は深刻な矛盾の中にいる。しかし歌の調べは高い。そこに矛盾の中に統一をかちえて生きている青年の姿が見られると思います。

現代の青年はちよつと不満があり、矛盾があればすぐストだ、デモだと行動に移す。しかしこの防人たちはいかに矛盾が重なつてもそれを自分で統一しようとして頑張りぬいてやがてこういう明るい歌にうたい上げるまでに辿りついている。この一人の無学の青年の、総合的な意志に心をとめていただきたい。○と×の二つにわけてものごとを整理するのではなく、その両者を総合する力を養うことの方がよほど大事だと思えます。

言語魔術について

次に申し上げたいことは「言語魔術」にひつかかってしまおうお互いの欠点に心をとめ、そのような低俗性から脱皮しなければならぬということです。例えば「大学の自治」は「国家権力」の介入を許さないという。そして「国家権力」を悪だと言いふらすインテリが少なくないので、国家権力とは国民の合意の上には認せられ合法的なものとして、国民がすでにいち早く率先して認めているものではないか。だからこそ国立大学の教官も国家権力から辞命をもらい、給料を与えられて、身分上も国家公務員たることを承諾して教官の地位についているはず。又国立大学の学生は国家権力の庇護をうけて、私大に比較すれば格安の授業料で勉強も出来るし、私大とは格段の差のある優秀な施設の中で勉強にいそむ機会が与えられているはずです。してみれば、国立大学の教官や学生が、かりそめにも「国家権力は悪だ」とか「警察は大学の敵だ」とか口にするのは、自己の存在の基盤である国家社会そのものを否定することであり、同時に自己否定にもなってしまう。勿論、だからと言って国家権力の行使や警察力の施行の度合が無制限であつていいと言うのではありません。権力というものはともすれば権力自体に物を言わせて事を運んでしまふ欠点がありますから、その行使に際しては十分の理性が伴わなくてはならないし、かりそめにも権力を誇示するような行使の仕方は、敵につつま

ければいけません。しかしそれと権力は悪だ、警察は敵だということとは本質的に違うので
す。

ともかく大学の自治と国家権力とは決して矛盾するものではない。それどころか大学の自治
というものは、これまで見てきた通りに、国家権力の庇護のもとにはじめて可能なのです。こ
の単純な事実をどうして人々は認めようとはしないのか。結局は「国家権力」を悪だと思いこ
ませてしまった言葉の魔術にみんながひつかかっているとしたか考えられません。（この項につい
ての詳細は、「国民同胞」九十三号を参照して下さい）

文化科学の誤り

同じく大学問題でよく使われる言葉に「大学は真理探究の場である」というのがあります。
これまで日本中の知識人のすべてが、この言葉を何の疑問もなしに使ってきました。だがそれ
は果して正しい言葉かどうか。

たしかに自然科学という学問は、実験を重ね、実証を重ねながら進歩する、従ってその分野
においては大学は「真理探究の場」と言ってもいいでしょう。（ここにおみえになっている明
星大学の奥田先生に伺ったところ、自然科学においても、「真理」の探究というより「真実」
の探究と言った方がより正確だそうです）

しかし、人間の心をその対象の中に入れなくては、どうしても成り立たない文化科学の分野では断じてそうではない筈です。人間というものは昔からいうように十人十色ですし、しかもその心の動きたるや一瞬も一つのところに静止してはいない。流転きまわりないのが人情の常なのです。それゆえに人の心の機微にふれるその瞬間、芸術が生まれ、宗教が生まれ、さらに人間社会を正しくまとめ、全体的な繁栄を目指すものとして、政治や経済や法制が営まれるのです。そこに文化科学が学問として成立してくる。従つてその学問は自然科学とは異つて、ここでは学説を立てる人の主観が常に決定的な要素になるのです。

マルクス主義がいかに科学的ということを表看板にしても（この科学的というのが、自然科学的だというのか、文化科学的だというのか、そこが曖昧ですが）社会について語る学説が自然科学において要求されるような客観に立つわけがありません。マルキシズムでは「唯物史観」を主張しますが、それも自然科学における真理とは全く性質を異にするので、結局は唯物史観をうち立てたマルクス自身の主観が産み出したものだということを銘記しなければなりません。唯物史観についてはまたあとでふれたいと思いますが、ともかくそれを客観的だと思つてゐるのは、その史観に立っている人々だけで、世の中のすべての人が、それを客観的なものだと思つて認めたわけではない。要するに人文科学の世界では、「真理」という言葉を、自然科学のような意味で使うことは許されない。もしも強いて「真理」という言葉を使いたいというのなら、私

はあえて次のように申し上げたいのです。

「大学とは不真理の累積を総合して、そこに窮極的にすべての学問が無視するわけにはいかないところの『人間の凡夫性』を探究する所である」——極言すれば「人文科学の分野では、大学は不真理の探究の場である」

「不真理」などというのは、まことに変な言葉ですが、私が申し上げたいのは次のようなこととです。人間の心というものは聖徳太子の十七条憲法の中の「共にこれ凡夫のみ」という言葉の通り、真理などというものとは凡そ反対な、各個バラバラの、しかも一瞬一瞬にゆれ動く拙ない存在にすぎない。そのありのままの人間の姿において人の心はつながるわけです。そこに「客観的」と言ってもいい世界がある。しかも人々は学問を深くすればするほど、自分のみじめさ、欠点だらけの自分に気付いてくるのです。すなわち学問を深めれば深めるほど、凡夫としての痛感も深められてくるわけで、そこに社会の問題、政治の問題をまとめてゆくのが、文化科学の世界だということです。「不真理の探究」という言葉はどうも不適切であるとは思いますが、今のところ他に適切な言葉も見つかりません。もし別の言葉でというなら、「まごころを探究する場」と言ってもいいのです。「まごころ」とは、人間の心における客観的世界です。文化科学の扱う問題は、先に述べた通り、その説を立てる人の人生体験を背景とし、全人生をもとにして出てくる主観によって形造られてゆく。とすれば、その主観の中で最も客観的

なもの、誰でも無条件にそれはいいことだと認めるもの、それは「まごころ」ではないか。「まごころを探求する場」それが大学だ——こう気付いてみれば、人間が人間のことを扱う学問をしていながら、「真理を探求している」などと自認して来たことが、とんでもない増上慢の仕業であつたと、私はこの年になっていまさらのように思うのです。このことに気付いてみると私はここに大学紛争の一つの大きな根源をつきとめたような気がします。

「まごころ」

そこが変わつてくれば学問がはじめて学問らしくなるのではないか、自然科学を扱うような扱い方で迷路に迷いこんでしまつていた文化科学が、本来の人間を対象として新しく出発し直すことが出来るのではなからうかと思うのです。さらに大学がそうなれば小、中、高校における教育目標の中にも、これと同じことが別の言い方で樹立されるはずです。すなわち「学校は青少年のまごころを育てるところである」という一条が加わることになるのです。このことは私が三十一年前、東大に学んだとき以来、私の心の奥深くいだきつづけた悲願ともいふべきものが具体化する糸口にもなるような気がするのです。私が東大にいたころの事については「日本への回帰」（第四集）に記しておりますのでお読みいただければ幸ですが、ともかくあの当時、日本の最高のレベルと言われる大学の講座には西洋の政治学原理だけが講義されてい

て、日本における政治のあり方には全くふれるところがなかった。こんな馬鹿なことではない。ここには根本的な誤りがあると思いました。

日本の政治について考える場合には、当然天皇のあり方が中心になってくるのですが、天皇のことを考えるときは、まず代々の天皇のお心を学ばなければならぬ、そのためには歴代の天皇は和歌を作っておられるので、その和歌を通してそのお心にふれてゆくことが是非とも必要である。そこに明らかになってゆくもの、それが日本における政治学、法学の根底に据えられるべきではないか。——私は東大で学びながらそのことを痛切に感じました。私はその時以来「日本の最高学府の最高学年の学科目に、歴代天皇の御歌を研究する講座を置く」ことを悲願としてもちつづけておりますが、そのねがいを具体化する糸口、それが「大学は人のまごころを探求する場だ」という考えの中につかめたような気がするのです。

天皇のまごころを学ぶことを怠つて一体何の政治学であろうか。天皇の御存在を学問として扱うこと、それは日本の政治学にとつては不可欠の条件だと思えますが、東大や京大などの主流大学の学風はそれを拒否してきたのです。こうして遂に人々は天皇を権力の傘としてしかとらえることが出来なくなつた。そのため、戦後に生まれた学生や青年は天皇などというものはない方がいいのではないかと考え、天皇否定の方向に走らざるを得なくなつた。結局、問題は学問の誤りであり、人の「まごころ」というものをおろそかにした結果なのです。罪は若い人

々にはない、罪深きはいまの学生、青年の一昔前の人々であり、その最たるものは、東大や京大の学者たちなのです。

しかしながら、このように明治百年の学問の誤りが明らかにされていくにつれ、必ずや正しいもの、真実なものは再び蘇る筈です。私はそこに日本人の聡明さを信じたいと思います。

資本主義社会について

次に「いまの日本は資本主義社会である」という一般化された考えについてお話しておきたいと思います。いまの日本は資本主義社会である——或は修正資本主義とも言いますが、ともかくこのことは誰一人疑わない。それはそれでいいと思いますが、ここにも「言語魔術の手」は拡がってくる。——というのはそのあとに次のような言葉がくつついてくるのです。

「であるから、いまの日本の社会の仕組みは、一切が資本主義の所産である」だがそんな馬鹿げた言い方がどうして許されるでしょう。資本主義というのがこの世界に言われ出してからせいぜい二〇〇年ぐらしか経過していかない。だが日本人の住んでいる社会は千年も、二千年も続いているではないか。その中にはどんなに世の中が変わろうと全く変わらないで続いているものが沢山ある。宗教的情操も、倫理的な感情も一貫して変らない。例えば神社がどうして資本主義と結びつくか。親を大切にする日本人の気風でも、まさかソロバンづくの勘定から生れた

ものではありませんまい。

その、昔から続いてきた日本の社会のあり方の中に商業の自由というものが、時に制限されたこともあつたが、原則としては公然と肯定されてきたということが言えるのです。この社会の中に西洋の資本主義という思想と、構想と、実態がはいつてきた。ところが日本人は元來人間の自由を本然的に大切に考えてきたし、外国で生まれたもの、未知のものはことごとくこれを取り入れてきた。その点世界人類の中では、人後におちないほどの進取の気象に富んでいるのです。この日本人が何で資本主義を受け入れないわけがありません。日本人の勤勉さと聡明さは忽ちのうちに日本の経済力をぐんぐん前進させていった。だが、その進展が急であり、世界の先進国に一日も早く追いつかなければという急ぎすぎのために、まずいことがいろいろおこつてきたのは事実です。女工哀史といわれるものがその一つであり、東北農村の悲惨な生活もその一つだつたと言つてもいいでしょう。もつともそれらすべてが資本主義のもたらした悲劇であつたとは言えないのですが、ともかくそのような事が起きた。しかしそれに気づいたとき日本人はそれをどしどし改めて行つた。それを改めるのに躊躇するほど、日本人の階級意識は生硬ではなかつたのです。

ここで皆さんと一緒に考えてみたいことは、もしかりに資本主義という外国仕立てのものを日本に移し植えて、それが欠点をもちすぎていると知つたとき、本来の日本人としての心情を

もち合わせている者は、果して資本主義が悪いから世の中が悪くなったと言うだろうかと言うことです。日本人はそのように外国から来たものに責任をかぶせるようなことはしなかった。そのような責任転嫁をするのではなく、もし資本主義がはいつてきて日本が悪くなったというのなら、その取り入れ方が悪かったのだ、選択が悪かったのだと反省し、その不消化なものを消化して、それが自分の血肉となるように力を注いできたはずです。それが本来の日本人の生き方でした。資本主義が悪かったと他を責めるような、人間としていやしい生き方はしなかった筈です。

日本に資本主義がはいる前は、日本には「士、農、工、商」という階級があった。しかし階級があることがまずいとわかつたので、明治天皇は維新に際して、「四民平等」を宣言され、すべての国民を平等にするという大原則を立てられたのです。だが、それはそれとして「商行為」とか「利潤追求」とかいうものは、そのような階級の立て方でもわかるように、元来卑しいものと考えられていたのですが、そこに資本主義が輸入されて、逆に「商行為」や「利潤追求」が一世を風靡することになってしまった。だがここで大切なことは、江戸時代は商行為に對して、それが人としての道義的な生き方の中で行われることを要求しており、その人たるべき心得というのが、利潤追求に対する中和剤、あるいは緩和剂的な役目を国民生活全体の中で果していたということです。ところが資本主義がはいつてきた時に、それらの道義的なものが

中和剤としての機能を果さず、「利潤追求」一本槍になつてしまつたのです。そのことはたしかに悪かつた。だがそれはあくまで日本人の急ぎすぎであり、心が至らなかつた、努力が足りなかつたという日本人の怠りから生れたものであつて、資本主義そのものが生み出した弊害というようなものでは絶対にない、そこに深く心をとめていただきたいのです。

そもそも資本主義の本場西欧でも、あくなき利潤追求と、資本家が懐をこやすだけで資本主義が発達してきたのではなかつたのです。ヨーロッパにも、アメリカにもそれなりの開拓精神もあり、公共心も発達してきた。それらがキリスト教の信仰とともに、利潤追求の心に対する中和剤をなして、数多くの欠点を徐々に直していこうとする精神活動がそれに平行しつつ資本主義は発達してきたのです。だから資本主義とは利潤のあくなき追求と搾取という風に規定しますが、そのような定義にそっくりあうような資本主義の実体は、この世のどこにも存在しない。資本主義は、その欠点をカバーしようとする努力と常に平行して姿を見せるのです。

日本のマルキストたちが資本主義を打倒して社会主義に仕組みをかえたいばかりに、現在の日本の社会の一切をあげて資本主義の所産のように言い、義理人情も、天皇崇敬の念も義勇奉公の美風も、すべて資本主義に附随して生じたもののように言うのは、全く本末顛倒も甚しいと思います。そのような外的議論ではなく、若し社会主義を主張しようとするなら、資本主義経済と、社会主義経済、その二つをあくまで、経済の次元で比較すればいいのです。ど

ちらがより効率的であり、どちらがより人間の自由意欲を満足させるか、それを見ていけばいいのです。しかし「経済」に関する限りは、この二つの勝負はもうずっと前から実験済みであり、かつ学問上の論争も、もはやされなくなつてしまつてゐる。とすると、資本主義か社会主義かという論争が現在いたるところで行われていますが、それは、その本来あるべき土俵からはみ出して、別のところで取り組まれてゐると見なければならぬ。この「土俵のすりかえ」がいかに巧みに行われてゐるか、そこに実に重大な問題があると思ひます。

社会主義者にとつて「社会主義経済」と「資本主義経済」との相撲は駄目になつてしまつた。とすればこの「資本主義経済」を運営してゐる母体である日本の伝統と風習と、日本人の情操をぶちこわす以外に方法はない。さらに日本を共産化しようと思つてゐる人は日本人の「人生観」を破壊する作業にとりかかつた。こうして最初に述べたように、「いまの日本は資本主義社会である」だから「いまの日本の社会の仕組みは、一切資本主義の所産である」という論理が生まれ、こうして資本主義打倒と日本の一切を破壊することとが一つづきのものとして叫ばれることになつたのです。

唯物史観について

ここでもう一つ考えてみたいことがある。それは、唯物史観というものは一体どれほど人生

をまともに扱っているか、ということです。誰しも唯物史観は、人間の歴史に対する一つの見方だと思つてゐる。しかし人間の歴史は、精神的な努力とか葛藤とか、さまざまの人の心が渦巻いてゐる、その連続であるはずで、それと「唯物」ということと一体どういふ関係があるのか。その全く別の世界の概念で形造られたものを「歴史」とか「史観」とか、果して呼ぶことが可能か。唯物史観を、まともな歴史観のうちのひとつと考へてしまつたところに重大な誤りがあつたのではないでしょうか。歴史とか人生をまともに扱うことを避けたところはどうして、まともな歴史観や人生観が生れるでしょうか。われわれが生きてゐるこの人生は、一瞬たりとも心の定まることのない、緊張と弛緩との交錯する波瀾動揺のものではないか。その生きてゐる人生と正面からとりくもうとしないもの、それが唯物論であり唯物史観ではないか。それをまともな人生観の一種だと思つてしまつたところにとんでもない問題がありはしないか。たゞでしょうか。そもそも人間を物質に換算することの中に欺瞞の一切があつたはずで、たゞが世の學者たちはすべてその欺瞞のとりことなり、その學説に魅了し去られてしまつた。詮じつめればマルキストには日本の歴史を扱う資格も、天皇のことを論じる資格もない。天皇は國民の信望を集められ、天皇自身、まごころをもつて國民に対してこられたこの二千年の歴史、その中心の天皇のことが「唯物」論者の目にどうして映つてくるはずがありませんか。たゞがそういう人々が大つびらに政治を論じ、天皇を論じ、外交を論じ、沖繩を論じ、しかもそ

れを子供たちに教え、学生に教え、さらに学生を動かして、造反教官となつて一緒に暴れまわる。これが一体教育者なのか、学者なのか。そういうことが全くわからなくなつてしまつてゐるのが日本の現実なのです。

「口さきの深さくらべ」

江戸時代の終り頃、「万葉集古義」というすぐれた書物を著わした鹿持雅澄かもちまさずみ、この人は有名な武市半平太の伯父にあたり、土佐における勤皇思想の源流をなした人ですが、その鹿持雅澄が古今集の「あかずして別るる袖の白玉は君が形見とつみみてぞゆく」という歌の表現が誇張に満ちた、真実味のないことを指摘し、古今集時代の歌人が涙によつて川水がまさるとか、涙にこの身が流れるなど、いかに悲しみが多いかを強調するその仕方を「口さきの深さくらべ」と言つております。それは万葉集の「ますらをとおもへるあれもきたへの衣の袖は通りて沾ぬれぬ」という人麿の歌についての感想の中で述べられていますが、この万葉の歌と古今の歌をくらべて見ると、卒直な心の溢れた万葉の歌に対して、古今の歌がいかにつまらぬ技巧に満ちているか、それを「口さきの深さくらべ」という実に心理的な微妙な言葉で表現しているのに頭が下がります。

今の日本では、教育界にせよ、心の深さそのものは問題にならないで、ただ「口さきの深さ」だけが競いあわされている。このお話の最初に申し上げた討論のあり方から、唯物論の横

行にいたるまで、すべてがこの「口さきの深さくらべ」によつて、心そのものを見失っている
それが日本の悲しむべき現実である、そのように思います。

(国民文化研究会理事長)

■ 和歌について

短歌入門

——子規の歌を中心に——

山田輝彦



透張尾銘無

現代の状況

作歌の注意

子規のうた

現代の状況

昨年一月、東大医学部登録医制反対に端を發した大学紛争は、この一年半の間にすさまじい勢いで全国に波及しました。一部学生生活動家の特殊用語であつた「ゲバルト」という言葉が日常語に定着し、正常な授業が行われている大学がむしろ例外であるという異常な事態になつてしまいました。私も一週に一度大学へ行つていますので、現在のキャンパスの空気は体で感じることができません。野間宏は旧軍隊のことを「真空地帯」と呼びましたが、その当否は別としてそれにならつていえば現在の大学はまさしく「異常気圧地帯」というべきではないでしょうか。そこには日常性の支配する世界とは全く違つた熱っぽい雰囲気があり、現世と断絶した幻想的な空間が存在しているという感じですが。キャンパスが荒れ果てているのは当然として、その中にある学生諸君の心がどうしてこのように荒廃してしまつたのか。その原因に遡つてゆくと、一番根本には生き甲斐のないむなしさ、何か深い空虚感があるように思います。流行語で言いますと精神の空洞化とか、戦後理念の風化とかいろいろ言われますが、何かやり場のない一種の虚無感のようなものがある。それが大学紛争の一番の根本であるという気がしてなりません。そのような空洞化はなぜ起つて来たのだろうかという問に対して、人々は大衆社会化現象に伴う必然的な自己疎外であるとか、世界共通のステューデント・パワーだとか言つて、当

面の責任を別のものにすりかえてしましますが、これはやはり間違いだと思うのです。

日本の大学に現在充満している一種の虚無感というものは、やはり人為的につくり出されたものだという気がしてならないのです。小林秀雄さんが「ドストエフスキーの生活」の序として書かれた「歴史について」という美しい評論があります。かなり難解な文章ですが、唯物史観に対する最も根源的な批判だと思います。その中で氏は、歴史的存在とか客観的事実とかいうことを、歴史家は自明のことのように言うけれども、物が存在するように、われわれの心の外に歴史というものが存在するだろうかという疑問を提出しておられます。私どもは歴史を構成する場合に史料というものを使いますが、その史料は古い瓦の破片にしても、文献にしても土の中から掘り起した土器にしても、そのものとしては物質に過ぎないじゃないか。その物質から歴史事実というものを創り出すものは何であるのか。歴史事実とは、史料をきつかけにして人間が心の中に「創る」ものである。人の心と離れて「存在する」ものではない。そういう意味で歴史は人間にとって内的事実であり、過ぎ去って二度と帰らない時への愛惜の情によって支えられるものである。歴史事実というものは、それが生起した瞬間にもう消滅してしまっている。人の心、特に過去への愛情がなければ本当の歴史はうまれない。僅かな遺品から死児のありし日の姿を思い描く母親の心がすぐれた歴史をうみ出す根本の力だと言っておられます。又別のところで、今その出典をつまびらかにしませんが、すべての歴史は結局は文学史で

あるという意味のことを言っておられました。これも非常に重要なことなのですが、祖先の残した言葉を味わうということを除いて歴史はありえないということでしょう。戦後はそういう内的事実としての歴史は全く教えられなかった。なるほど客観的な歴史とか、歴史事実の解釈とかいう歴史めいたものは教えられたが、われわれの心をゆり動かすようなもの、それによつて生き甲斐を感じさせる歴史の核というものは教えられなかった。日本の歴史はさまざま悪を背負った軽蔑の対象でしかなかったのです。日本の歴史は克服したり、否定したりする対象に過ぎないというように繰り返し繰り返し教えこまれた時、青年たちの心に空虚感というものが現われないのが不思議です。そして、その空虚を克服する何らかの行為が生れて来るのは当然です。ゲバルトの生起してくる根源はそこにあると断言してもいいのです。すべての民族は長い経験の蓄積を持っておりますから、一人一人の人間の心の中には、その人が意識すると否とにかかわらず民族的体験の累積というものがある。ユングという精神分析の学者は、人間の心には意識の奥に無意識の世界があり、更にその奥には集合意識の世界があるといっています。この集合意識の世界は、いわば民族的な経験が沈澱したようなところであり、いかにもドイツ人らしく「一切の象徴と理念の母である」というような言葉で言っています。つまり一つの民族にとつて、そこを除くとどうにもならないような一種の精神的根源のようなものがある。そういうものが抹殺されたり軽蔑されたりして来たところに現在の大学紛争の一番深い根

があるというように考えられてなりません。

最近書店で「大学ゲリラの唄」という新書版の本をめくって見ました。東大闘争をやっている諸君が、思想的な立場は違つても、どういふ情感を持ち、どういふ表現をしているだろうか。と興味をそそられたからです。しかし、残念ながらそこには僕らの心をゆさぶるような唄は全くありませんでした。必ずしも短歌でなくてもよいのです。あれだけ激しいたたかいはしているのだから、本当のたたかひのうたが一つくらいあつてもよいのでしようが、そこにあつたのは単なるスローガンか、自嘲や憎悪の歌か、擲揄の歌にしか過ぎなかつたのです。例えば歌謡曲というのは諸君の精神をかなりのウェイトで支配していると思ひますが、その歌謡曲の替え歌の「ゲバの季節」とか「駒場番外地」といふようなものしかないのです。精神の次元としては実に低俗です。本当に国民や民族の魂を震撼させるような歌が出て来ない運動は決して成功しないと、私は改めて確信させられたわけです。

そこで、そういう一種の空虚感を埋めるものは何だろうか。それはやはり先人の言葉を本当に味わうこと、先人の体験を追体験してみることにしかありません。現在の青年の空虚を埋めているものは、大江健三郎あたりの描く性や政治の世界、イデオロギーや暴力ではないのだろうか。しかしそれで本当に人間の心がみたまされるかどうかが問題です。今、青年の心にぽっかりあいてしまつた空洞が、外来の思想やイデオロギーだけで本当に充填されるとは思われませ

ん。だからわれわれがこの合宿で古典を読んだり歌を作ったりするということは、現代のわれわれが置かれている状況に対する一番根源的な主体性回復の試みだと私は考えます。

私どもの国は、一民族、一言語、一国家という世界でも全く特殊な構成を持っています。言語の年代を測る言語年代史という学問があるようですが、そういう学問によつても、日本語の起源は気の遠くなるほど遠いところにあるそうです。そしてその日本語の本質というものは、漢字の輸入というような重大な事件によつても全く変化を受けていない。漢字に呑みこまれて日本の言語表現が変つたのではなく、日本の言葉が漢字というものを同化してしまつた。このように一つの言語がその本質を変えないで一貫して現在まで伝えられて来たというのは全く稀有な事実であつて、一貫した言語の歴史を持たない国、多くの言語が併存している国とは全く異質な文化的現象だと思ひます。そして、そういう日本語のエッセンスが短歌という形式で残つているというように思ひます。

短歌はすでに六世紀の終りごろに成立して、千数百年という伝統を持っています。そして伝統的な文学が当然持つてゐるところの頽廢面も沢山かかえこんでいます。しかし一部の論者たちが言うように、五七調は「奴隸の韻律」だと簡単に片づけてよいものでしょうか。先人のうたに直接ふれて感動するという経験なしに、短歌的発想、短歌的意識を抹殺しなければ近代は来ないのだという断定を近代主義者も共産主義者もくりかえして来ました。けれ

ども果してそういうことで本当の日本の近代をつくり出すことができるのだらうか、むしろ逆なのではないかというように感じます。短歌は純粹な抒情詩ですから、その創作や鑑賞によつて精神生活における情の位置というものがよく分ると思ひます。感性を輕蔑することが現代の知識人の通弊ですが、明治の先覚者たちは決してそうではなかつた。夏目漱石が留學中に書きつけた「断片」の中で、自然科学は普遍的知性の産物だが文學は感受性の産物だ。感受性は民族によつて違つていておきかえることができない。だから外国文學を輸入するときには自分たちの感受性に絶対の確信をもつて取捨選択せよといつています。これは偏狹なのではない。異質文明の受容期におけるすばらしい卓見なのです。以上いくつかの指摘を致しましたのは、なぜ歌などつくらせるのかという問に対する私なりの解答を申し上げたわけです。

作歌の注意

短歌は原則として一首一文と言ひまして、情意が一本すつと通つていなければなりません。言いかえると焦点が一つでないといけないのです。五七五で切れるものは昔から腰折れと言つて輕蔑されたのです。これは俳句と比較して考えるとよく分ります。例えば源実朝の有名な歌に次のようなものがあります。

大海の磯もどろに寄する波われてくだけて裂けて散るかも

この歌の焦点は勿論「波」にあるわけです。怒濤の動きに焦点が合わされています。俳句ではどうでしょうか。

荒海や佐渡に横たふ天の河

芭蕉の有名な句で、前者と同じように海を詠んでいます。真中の「や」という切れ字をはさんで、荒海と天の河という二つの焦点があります。この二つのポイントの配置、案配に俳句の面白さがあります。どちらも短詩型の文学ですが、俳句の方が知的要素が多いのです。だから作歌の場合には焦点をきつちりと一つに絞ることが第一です。これから阿蘇山に登るわけですが、その雄大な自然の美を詠みたいと思う。途中で美しい娘さんに出会ったがあれも詠みたいというので、一首に概括して詠むと必ず分裂します。人物に焦点をあわせるならば、阿蘇は背景になるし、阿蘇に焦点をあわせるならば、人物は点景になるのです。何を焦点にするかという選択が第一です。

短歌入門 (山田)

次に自分の詠もうとする対象をよく見て下さい。正岡子規は作歌の根本に「写生」を置きましたが、写生というのは勿論目で見ることです。しかし必ずしも視覚に限定されるものではありません。もっと広く考えて、自分の体験に触れたことを詠むという態度です。子規は自分たちの立場を写生派とし、それに対する明星派の立場を理想派と言っています。この理想は「観

念」という意味なのです。つまり実感や体験を勝手につくりかえる態度を理想派と呼んで排撃したのです。「言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず」と子規は言っていますが、物をよむ時は勿論、自分の心を詠む時にも、オーバーに詠んではいけません。例えば国文研の合宿では国家ということが強調されるから、国家のために自分は尽瘁するのだという決意を詠めばいいのだと判断して、実感もないのに詠んだら、嘘ということがすぐに分ります。われわれはそういうものを要求しているわけではなく、本当に胸の中からこみ上げてくる情の表現がほしいのです。またいくら考えても歌ができない人は、歌のできない苦しさを詠めばいいのです。写生というと、外部の物を写すような感じがしますが、必ずしもそうとは限りません。子規の有名な句に「鶏頭の十四五本もありぬべし」というのがあります。これは晩秋の庭に真紅に咲いている鶏頭の野性的な生命を、全く主観を交えずにとらえた句ですが、子規の強烈な生命が、鶏頭の生命をしつかりとうけとめています。写生は決して生命力の衰弱した受身の態度ではありません。しかし子規は一方ではこんな歌も作っています。

真砂なす数なき星のその中にわれにむかひて光る星あり

「われにむかひて光る」というのは心に実感したことだから、写生になるのです。単なる主観と写生を分つものは実感の強弱、有無にあると言えます。自分の経験に忠実に、それを

誇張のない正確な言葉で詠めば、必ず人を感動させる歌ができます。心にもないことを詠むな虚偽を詠めば歌というものは恐ろしいほど正直に心の姿を現わします。これが第二の注意です。

それから歌に原因結果を詠みこむと非常に理屈っぽい歌になります。子規は感情を詠め、理屈を詠むなとくりかえしています。その理屈の一番典型的なものは、物理的法則のようなものです。そういうものを歌に詠んだら面白くもおかしくもないものができます。例えば東から風が吹けば草木が西へ靡くというような歌を詠んだとする。

東より風吹きければ草木みな西へ靡けり面白きかな

初歩の人はよくこんな歌を作るのですが、これは「犬が西向きや尾は東」というのと同じで余りに自明のことだから、発見や感動が全くないのです。これは極端な例ですが、因果関係や物理的法則を歌にもちこまぬような注意が肝要です。

さきほど一首の中に沢山のことを概括するな、焦点が二つも三つもあると統一感がなくなる
と申しましたが、それでは感動するものが二つも三つもあつた時にはどうすればよいかという
疑問が起りましょう。その時は連作という形式をとればよいのです。阿蘇山を詠む、人物を詠
むというようにして五首なら五首、十首なら十首が一つのまとまつた世界を構成するというよ

うにすれば、そこに時間的な心理の展開もできるし、空間的な広がりやの把握もできるといふわけです。

それから字余りということがあります。五音のところや六音になったり、七音が八音になったりすることがあります。実朝の歌など字余りによつてかえつてすばらしい迫力を生み出しているものもあります。しかしそれも限度があるのは当然です。ただ字足らずといふのは絶対にいけません。字足らずならまだしも句足らずといふのもたまに見うけます。五音のところや四句しかないといふのは短歌ではなく別の短詩になつてしまひます。

仮名づかいは原則として歴史的仮名づかいを使う方がよいと思ひます。しかし初歩の方は余りそればかりに注意が向いて、本質的なものの表現が拘束されるといけませんから、こだわらないで下さい。しかし、こういう機会に古典文法を正確に身につけることは、やがて古典を読む時の役にも立ちますから、努力してマスターして下さい。

以上が作歌上の実際的な注意なのですが、もう一つつけ加えて置きたいことがあります。歌は芸術であると一応言えるでしょう。もつとも、西洋人のいふ芸術とは特殊な人が作るもので特殊な技術を要するものだといふ観念がありますから、日本人と短歌の関連とは随分違ひます。しかし一応芸術と考へてよいでしょう。芸術は美の表現です。ところが「美」といふ字は羊といふ字と、大といふ字が重なつています。羊には「犠牲」といふ意味があります。論語の

「告朔の餼羊」というのは、天子がついたちの日に羊を屠つて、天帝の前に誓う儀式を意味しています。そこで美という言葉はどういう意味で犠牲という言葉と関連するのだろうかということになります。それには二つあると思います。一つは日常的な利害の世界とか、形式化した道徳律とかいうものを犠牲にすることによって、美の世界が始めて成立するということです。もう一つは犠牲の最大のものは自己犠牲でしょう。自己犠牲というものは倫理的に一番美しいものです。だから倫理的に高いものが美しいのだと言えると思います。漱石の晩年の「断片」の中に「倫理的にしてはじめて芸術的なり。真に芸術的なるものは必ず倫理的なり」という言葉があります。ここで倫理的というのは、自分の外面にある道徳律に忠実であるということではない。自分の内なる生命に忠実であるということです。それが本当の倫理的という言葉の意味だろうと思います。この合宿ではしばしば「まごころ」という言葉が出て来ますが、それを単に気分的な次元でとらえてはならない。それは自分のうちなるうながしに忠実であること、ある場合にはそれを貫徹するために生命の犠牲をさえ覚悟せねばならぬきびしいものです。従つて美という字の出来てくる造語意識の中では、倫理と美は不可分であつたのだと思います。

明治天皇のみうたの中に、

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

というみうたがあります。これは天皇が他者にむかつて教訓しておられるのではない。歌会始の詠進歌をお聞きの時には、一首一首の朗詠をじつと目をつぶって聞いておられた由ですが、そういう天皇ご自身の実感をよまれたものです。さきほどの子規の写生ということとも関連のあるみ歌であらうと思います。

子規のうた

子規は明治の一年前に生れて、明治三六年に亡くなりました。三十七歳の生涯です。特に晩年の約十年ばかりは、殆んど寝たきりの生活だった。脊髄カリエスという業病にとりつかれていた。その中で俳句の革新、短歌の革新という大事業をやりとげたのです。彼の隨筆に「病牀六尺」というのがありますが、病牀六尺というのが彼の肉体の置かれた天地であった。しかし彼は、そういう極度に制限された拘束を打ち破るような、自由奔放な生命に溢れていた。肉体は病んでいても生命は健康でありうるという実例を見事に示してくれた人です。この人には面白い逸話が沢山ありますが、例えば「野球」という言葉を一番始めに使い出したのは彼であるという伝説があります。子規は本名を升のぼるといったので、それをもじって野球のポールといったのですが、いかにもありそうな愛嬌のある逸話です。彼が大変な勉強家であったことを示す言葉があるのですが、人間の欲望を百斤とすると、その中の七〇斤は読書欲、一五斤が食欲、あと

の一五斤が雑欲だとも言っています。食欲のパーセントの大きいのは意外ですが、彼の丈夫な胃袋がなかったら、彼の死はもつと早かつたと思われれます。又有名な民権左派の指導者中江兆民が喉頭癌で咽喉に穴をあけ、余命一年半と宣告されて「一年有半」を書いた時、彼は「仰臥漫録」の中で「浅薄ナコトヲ書キ並べタリ」と批判し、「居士は咽喉に穴一ツあき候由、吾等は腹、背中、臀ともいはず蜂の如く穴あき申候」と書いています。この強靱な精神はセンチメンタリズムを極度にきらつたのです。彼の弟子の高浜虚子が、ある時、自分は小説家になりたいが、小説家で飯が食えるだろうかという弱氣の手紙を出したところ「目的物を手に入れるために費すべき最後の租税は生命なり」と答えています。何でも最後はいのちをかけなくては駄目だというわけです。こういう強い生命力を持った人の表現はどのような表現になるのだろうか資料によつて鑑賞してみることになります。

最初にとり上げたのは、明治三十一年のもので「徒然坊箱根より写真数葉を送りこしける返事に 八首」という詞書があります。その中の五首を抄録しました。徒然坊とはどういう人なのかよく分りません。

足たゝば箱根の七湯七夜寝て水海の月に舟うけましを

足たゝば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

足たゝば蝦夷の栗原くぬぎ原アイノが友と熊殺さましを

足たゝば新高山の山もとにいほり結びてバナナ植ゑましを

足たゝば黄河の水をかち渉り華山の蓮の花剪らましを

すべて「足たゝば」で始まり「ましを」で終わっています。「まし」は仮定を表わす言葉で、もし足が立つものなら……しようものをという意味になります。なにげなく読んでみると何かざれ歌のような気がしないでもありません。しかし子規は冗談を言っているのではないのです。彼の魂は病牀六尺の天地に拘束されることを拒否して、世界の涯まで飛翔しているのです。これらの歌がざれ歌でないというのは、それを支えているのが彼の生命力であるからです。足の立たないという宿命を前提としているのですが、そこには巧まざるユーモアもあるし明治人の気宇の広大さもある。しかも肩ひじ張った悲壮感がなく淡々と歌っています。何よりも嫉視羨望の影が微塵もありません。普通の人なら大言壮語になるのですが、それをまぬがれているのは、歌を支えている切実な実感があるからです。むしろこれらの歌に彼の深い悲しみをよみとるのが本当なのでしょうか。次に移ります。(以下歌の番号は説明の便宜のためです)

ガラス窓 十三首

- (1) いたづきの圍わのガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ

- (2) 病みこやる闇のガラスの窓の内に冬の日さしてさち草咲きぬ
- (3) 朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも
- (4) 冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ
- (5) ビードロのガラス戸すかし向ひ家の棟の薺の花咲ける見ゆ
- (6) 雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えずけり
- (7) 窓の外の虫さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし
- (8) 病みこもるガラスの窓の窓の外の物干竿に鴉なく見ゆ
- (9) 物干に来居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴くか
- (10) 常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし人よさちあれ
- (11) ビードロの駕をつくりて雪つもる白銀の野を行かんとぞ思ふ
- (12) ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ
- (13) 暁の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ

三十三年の作で連作形式です。彼は三十四年に「墨汁一滴」の中で「不平十ヶ条」というのを書いていきます。実に面白いのですが、第一番目は元老が死にそうで死なぬこと、二番目は、いくさの始まりそうが始まらぬこと、勿論日露戦争のことで、彼は国民感情の動きを敏感に感

じとつています。そして六番目に板ガラスの日本でできぬ不平と書いています。ガラス戸というものが当時いかに貴重なものであつたかがよく分ります。これらの連作の中には特別、詩的なことは何一つ書いてありません。ただ病人である自分が外の物がよく見えるように家人たちがガラス戸をはめてくれたことを子供のよう喜んでゐる。それをやさしい言葉で素直に表現している点に注目してほしいのです。若干の語釈その他の説明を加えて置きます。(1)の「いたづき」は病氣という意味、「闌」は寝ている部屋の意味です。(2)の「さち草」はいろいろ調べましたがよく分りません。福寿草のことではないかと思ひます。(5)の「薺」なづなはペンペン草のことです。(7)は窓の外の小さな虫の姿さえすかして見えるガラスの板を作つたのはまさに神の業であるという素朴な驚きの表現です。子規は当時三十四歳です。三十四歳の男が、ガラス戸の不思議さに感動している。あの強靱なりアリスト子規の心には、こんな素朴さが生きていたのです。(10)の「常伏」というのは、いつも寝ついたままとという意味です。いつも寝たきりの足なえの私のために、外の見えるガラス戸を張つてくれた人よ幸あれ、本当にありがとうという意味なのでしよう。人の好意というものをこのように全身心で喜ぶことができる魂というものは、彼の境涯と思ひ合せる時、誠に稀有なものと思われまます。

この連作を例に出したのは、連作というものの性格がよく出ていることと、物を見る喜びが溢れているからです。そして強い精神の底には必ず素朴さと純粹さがあるという証明にもなるか

らです。それはまさに僕らが志向する歌の根底とも一致するのです。

「しひて筆を取りて」という連作は、明治三十四年五月四日の作です。彼が亡くなつたのは三十五年九月十五日でしたから、死の約一年半くらい前で、彼はそのころから毎日を今日限りのいのちという気持で生きていたのです。だからこれは一種の辞世の歌と考へてもいいのです。彼はこの連作の最後に「心弱くとこそ人の見るらめ」と書きつけています。注意してほしいのは、ここに表現されている悲劇的精神はセンチメンタリズムとは全く無縁であるということです。

しひて筆を取りて

- (1) 佐保神の別れかなしも来む春にふたたび逢はむわれならなくに
- (2) いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす
- (3) 病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも
- (4) 世の中はつねなきものと我愛^{わがめ}づる山吹の花ちりにけるかも
- (5) 別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも
- (6) 夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我いのちかも
- (7) くれなるの薔薇ふふみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

(8) 薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみし昔おもほゆ

(9) 若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

(10) いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔まかしむ

簡単に語釈を施しておきます。(1)の「佐保神」は春の女神です。春との別れが悲しいなあ、来年の春に再び逢うことのできる私ではないからという意味です。(4)の「世の中はつねなきものと」というのは、世のすべての命あるものはうつろつてゆくことを示すようにという意味です。(6)の「秋まちがてぬ」の「がて」は「できる」という意味です。だから秋を待つことができないう私の命よという意味になります。(7)の「ふふむ」は蕾をつけるということ。私の病がいよいよ昂じてゆく凶兆のように、くれないの薔薇が蕾をつけたという意味です。(9)の「若松の芽だちの緑」という句は「長き」を引き出す序詞のような役目をしています。「長き」は勿論松の新芽の長さ、春の永日の長さの両方をかけていますが、それを意識させないほど自然です。最後の「いたづきの癒ゆる日知らに」の「に」は打消の「ず」と同じです。歌の美しさは相聞と挽歌にきまると申しますが、この連作はたしかに近代短歌の絶唱の一つだと思えます。有限の生を無限につなごうとする芸術の悲しさと美しさが見事に結晶しています。

私は思想には大きくわけて二つの型があるように思います。それを仮りに「正の思想」と「負の思想」と言っておきましょう。前者は自分のおかれた現実を全部引きうけてたじろがない。それと真正面から向き合つて、自分の命の限り生きてゆくという傾向です。そういう意味の思想というものを子規は本当に体现していた人だと思ふのです。子規は「志」を持った文学者だつたと思います。彼のおかれていた明治の国家というものの生命の動きを、自分の生命の脈動として敏感にキャッチすることができた人です。子規は人生の最も豊饒な時代を悲惨な病床に過しながら、自分の宿命を呪つたり、人を羨んだりすることをしなかつた。彼の作品には不思議に陰鬱なかげりがありません。

それと対照的なのは啄木です。啄木の歌にはいい歌がありますけれども、彼の歌の一番の主題は「甘え」があることです。二十七歳で死んだ啄木にそれを言うのは苛酷かも知れませんが、彼には自分は天才である、自分が報われないのは世の中の人々が不当であるという考えがあります。その甘えがやがて世に対する呪咀や憎悪になつてゆくのです。彼は非常に不幸な生涯を送り、大逆事件に大きな衝撃を受けて「時代閉塞の現状」という著名な論文を書きました。青年はすべからず国家権力、強権と対決せよと言つて、晩年はのめりこむようにアナキズムの世界へ入つて行つたのです。こういう啄木の生き方は子規とくらべると実に鮮かな対照を示します。私は啄木の場合のように、憎悪や怨念や嫉妬がエネルギーになつている思想を「負の

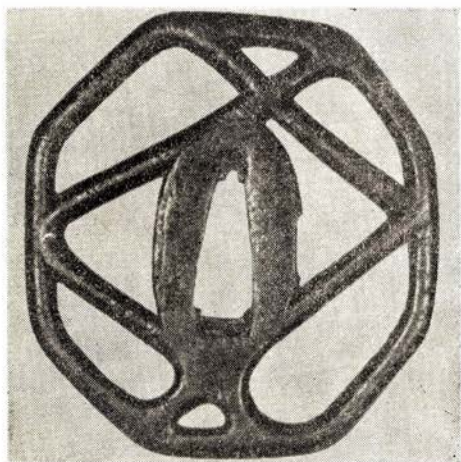
思想」と呼びたいのです。この二人の歌を対照して、少し緻密な勉強をされれば、そこに明治を生きた青年の二つの典型がはつきりとえられると思います。それは単に好悪の問題ではなく、思想形成と生き方の問題として皆さんに決断を迫ってくるでしょう。

いろいろな事を申し上げましたが、講義でもあり、解説でもあるというような性格上、大変不統一な話となりました。以上をもつて短歌の導入講義を終らせて頂きます。

(福岡県立若松高校教諭)

和歌は日本文化の精髓である

夜
久
正
雄



又七作竹透鐺

「感じること」の意味

歌の役割

歌人と忠誠心

明治天皇の御歌

「感じること」の意味

歌を詠む^よということが、われわれの精神生活の全体の中で、どのような意味をもっているか——このことについてお話しようと思います。私は前に歌を作る時の心の内容について、文章で説明したことがあります。なかなかうまく説明できません。そこで今日は、他の人の言葉にたよって説明してみます。

歌を作るといふことの内容を実に適確に説明して下さっていると思われる文章が、小林秀雄先生の書かれたものの中にありますので、それを読みながらお話したいと思います。

小林先生は、「美を求める心」というごく短い文章を書いておられます。それは次の歌に就いての文章です。

田児の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける

まず、この歌の解釈を概略申しますと、田児の浦というところを通つて——この田児の浦はこの時代は山陰^{やまかげ}の土地であったということ——田児の浦という山陰^{やまかげ}の土地をずっと通つて出てみたところが、（当時の田児の浦は現在の田児の浦よりは西寄りであったと沢瀉久孝先生が書いておられます。）はるか前方に富士の高嶺が真っ白に雪をかぶつていて、それが見えたというわけです。この歌はよく晴れた日の歌でしょう。遠く田児の浦あたりから富士の高嶺が

真つ白に見えるというのは、紺碧の空、紺碧の海を背景にして青い空に、まっ白な雪の富士山が美しくいさぎよく立ち聳えていたのを見た、その感動がこの一首の歌にあるわけです。しかし、歌というものは、いま私が言ったように説明してしまえば全然別ものになってしまう。すなわち「紺碧の海の浜べから見ると、紺碧の空に真つ白な富士が聳えていた」と言つてはこの歌とは違つたものになるのです。やはりこの歌はその言葉によつて自然にわれわれの心に浮んでくるイメージのつらなりと同時に、さわやかな、しつかりした清らかな調子というものがあつて、そしてその調子がわれわれの心を深く打つて来る、そこにこの歌の生命があると思ひます。

この歌を例にあげまして、小林先生はそれについての感想をわかり易いやさしい言葉で次のように書いておられます。

「悲しみの歌を作る詩人は、自分の悲しみを、よく見定める人です。悲しいといつてただ泣く人ではない。自分の悲しみに溺れず、負けず、これを見定め、これをはつきり感じ、これを言葉の姿に整へてみせる人です。……」

つまり、詩人とは自分が悲しいと感ずるその悲しみを見定め、——しつかり自分自身の心を見定めて、そしてその悲しみをはつきり感じてこれを言葉の姿に整えてみせる人である、と言われる。

「……悲しみの歌は、詩人が、心の目で見た悲しみの姿なのです。これを読んで、感動する人は、まるで、自分の悲しみを歌ってもらったような気持ちになるでせう。悲しい気持ちに誘はれるでせうが、もうその悲しみは、ふだんの生活のなかで悲しみ、心が乱れ、涙を流し、苦しい思ひをする、その悲しみとは違ふでせう。悲しみの安らかな、静かな姿を感じるでせう。そして、詩人は、どういふふうくに、悲しみに打ち勝つかを合点するでせう。……私は美の問題は、美とは何かといふ様な面倒な議論の問題ではなく、私達めいめいの、小さな、はつきりした美しさの経験が根本だと考へてゐるからです。」

美というものを、それぞれめいめいの心で、美しい、と感ずるといふその経験が根本なので、人が、お前はどうしてもそれを美しく思わなければいけないと言つたつて、別に美しく思えるわけではないのです。自分たちめいめいの心の中で、それを美しいと感じることが大切なので、本に書いてあることをそのまま暗記することでもなんでもないので。

「美しいと思ふことは、物の美しい姿を感じることで、美を求めるとは物の美しい姿を求めることです。」

この美しい姿というのは、まえの言葉にあるように、ただ目に写っているそのままを美しいと思つてもそれだけではだめなので、その感じを表現することによつてその姿が整えられてくる、それが大切なのです。すなわち自分の心のゆらぎというものは、それを言葉に現わすこと

によつてはじめて、はっきりとその姿が見出されてくるのです。ですから、美しいと感ずることが元ですが、それだけのことで仕方がないので、その美しいと感じたことを、言葉に現わすことによつて、はじめて美しいと感じた経験がはっきりする、こういうように言つておられるのです。

「……さういふ姿を感じる能力は誰にでも備はり、さういふ姿を求める心は誰にでもあるのです。ただ、この能力が、私達にとつて、どんなに貴重な能力であるか、また、この能力は養ひ育てようとしなければ衰弱してしまふ事を、知つてゐる人は、少ないのです。」

幼ない子どもが非常にあどけない、天真爛漫な心で物を感じとるような姿をわれわれは時々見ることができ、そしてまた、それにわれわれの心がひかれることがあるわけで、物の美しいということを感じずることは、これは誰にでも備わつてゐる。しかしそれは育てようとしなければ、結局衰弱してしまふものなのです。

「今日のやうに、知識や学問が普及し、尊重されるやうになると、人々は、物を感じずる能力の方を、知らず知らずのうちに、疎かにする様になるのです。物の性質を知らうとするやうになるのです。」

この辺から、この合宿でとくに問題にしている学問のゆき方、すなわちわれわれは学問をどういうふうを考え、どういうふうに学んでいったらいいかということについての根本問題が出

てくるのです。

ここで、「今日の知識や学問が」と書いてある学問というのは、生きる道を求める、心を磨きあげていくというような意味での学問ではないのです。ここは、むしろ知識や科学が、というふうには理解すべき言葉でしょう。

「物の性質を知ろうとする知識や学問の道は、物の姿をいはず壊す行き方をするからです。例へば、ある花の性質を知るとは、どんな形の花弁が何枚あるか、雄蕊はどんな構造をしているか、色素は何々か、といふやうに、物を部分に分け、要素に分けて行くやり方ですが、花の姿の美しさを感じる時には、私達は何時も花全体を一目で感ずるのです。だから感ずることなど易しい事だと思ひ込んでしまふのです。」

花が美しいと感ずるときに、たとえ八重桜を見て人々は「これは花びらがたくさんあるから美しい」というように感じるのではない。人々は花の美しさを全体の印象として感じるのです。花びらが沢山あるとかないかいいうことは、あとでかんがえるにすぎないのです。花びらの多少などということはすぐ反対のことが言えるので、花びらの少ない彼岸桜みたいなものだって美しいと感ずる。そうすると、今度は花びらが少ないから美しいということになります。花びらが多くても美しい、少なくとも美しいということになるから、結局花の美しさというものは花びらの多少によって決まることではない。

「……一輪の花の美しさをよくよく感ずるといふ事は難かしいことだ。仮にそれは易しい事だとしても、人間の美しさ、立派さを感ずることは易しい事ではありません。また知識がどんなにあつても、やさしい感情を持つとは、物事をよく感ずる心を持つている人ではありませんか。」

美しいと感ずることは誰にでもできる易しいことなのだ、と一般には考えて、そのことについて十分考えることがないので。しかし感ずるといふことには深さというものがあるわけですから、ものを感じるといふことは、非常に難かしいことなのです。ところがみんなちよつと感じたようなつもりになるから、それで易しいことだと考えてしまうのです。一首の歌でもそうでしょう。ちよつと読んでみて、大体意味が分かれば、それでもつてすべてが分つたと思つてしまう人には、その歌のもつている人の心を、ほんとうによく感ずることはできない。したがつて、感ずるといふことは、誰でもができることではないので、「深く」感ずることは、非常に難かしいのです。誰にもなかなかさういうふうにはできないことなのです。

「……ですから、感ずるといふことも学ばなければならぬものなのです。そして、立派な芸術といふものは、正しく、豊かに感ずることを、人々に何時も教へてゐるものなのです。」

ということをつけ加えて、この文章を終つておられます。この「感ずるといふことも学ばなければならぬのです」という言葉は深い意味を持っています。この文章によつて小林先生の

言っておられるのは、科学とか知識ということとは、物を分析して理解することだけれども、人生はそれよりも、もっと大事なことがある。それは「感ずる」ことを学ぶことだ、ということですよ。われわれは毎日の生活の中では何かを直観的に感じながらやっているわけですから、それをひとつひとつ見定めて、はつきり確かにして進んで行かなければならないのだということをおっしゃるのです。

さきほどの木下先生のお話を聞いておきますと、木下先生が、人生の出来事を実に正確に感じられて、それをひとつも変えることのできないような言葉でお話になっておられる、私たちはその言葉によって木下先生がその時を、本当に生きてをられると感ずるのです。そういう正確な言葉によって表現されるたしかな感動を伝えること、それが生きていくということなのです。

感ずるということがどんなに大切なことか、情操ということがどんなに大切なことか、そして感銘をもつて人生を送るといふことがどんなに大切なことか。現代の文明の方向は、情操や心の優しさというものを押し潰すような、破壊するような、そういう方に向かってきていますと思われまふ。そのことがどんなに危険なことか、小林先生や木下先生の言葉によつていまさらのように深く心にしるされるのです。岡先生が警告されるのもこの点であると思ひます。

歌の役割

さて、歌というのは、この感ずること、われわれの情操というものをしつかり確かめ、見定めるといふ、そういう働きをすることなのです。われわれは、歌に詠むには、まず感じなければいけません。感ずるといふことがなければ歌はできないのです。

歌をよもうとして自分の経験をふりかえつてみたとき、もしその人が自分の過去には歌によむような強い感動が無い、ということになると、十九才なり二十才なりの人生において、その人が生きてきたのは単なる動物的な人生となりはしませんか。

感ずるといふことを養い育てるには、小林先生も、「自分の悲しみを見定める」というように言っておられますけれども、歌を詠むことが助けになります。歌は、感じたことを、その感じた状態で、もう一度言葉に再現する、言葉に現わすことです。その際、強いて意識せずに、自然に、感じたことがそのまま歌になつて出てくるのが一番理想的ですが、しかしそういうことはなかなかわれわれにはできないので、そうなるためには、修業をする必要があります。たとえば古今のいい歌を読んでみて、その苦闘とか悲しみがその人を通して現われてくるその形、姿、そういうものを、読むことによつて、そういう心持にわれわれ自身を近付けていこうとするのです。歌を学ばなければ。また、自分で歌を作るときには、感じたことをそのままの

姿で言葉に現わそうと努力をします。それは自分の感じを確かめることになります。

歌を作るわれわれの心の働きは、いま、言ったように、自分の感じたことをありのままに現わそうとする努力なのです。そうすることによってわれわれの感ずる心がだんだん深くなつていくのです。したがって日本人は有史以来歌を作り続けてきたのですが、それは、そういう情操とか、感ずる心とかいうものを、深くすることを学びつづけて来たことになります。

日本人は千二百年ほど昔、「万葉集」という歌集を作り出したわけですが、その歌集には、あらゆる職業、あらゆる階層の人が、作者として残されています。知識だとか、財産だとか、身分だとか、そんなものによつて区別がつけられて、単に知識階級だけの歌が残されたというようなものではないのです。そういう意味では、万葉集のような国民的民衆的詩集は世界のどこにもないのではないのでしょうか。千何百年前の、東国の名もない人の心を、今日われわれがその歌によつて読み味わうことができる。これは大変なことではないでしょうか。このことはまた、われわれの今日残した一首の歌が、千何百年経つた後の世の人の心を打つこともありうるということでもあります。今日のわれわれの真心が千年ものちの日本人の心を打つことがありうるということ、——これは本当に大変なことです。これは時間的な点を言つたわけですが空間的に言つても、われわれは全く見ず知らずの、現在に生きている人の想いを、人の真実を詠み味わうことができる。同時に、またわれわれが詠んだ一首の歌によつて、誰かがその心持

ちを受けとつてくれるかもしれない。そのことは、われわれの歌が国民に通いうるということでもあります。われわれは国語世界という大海の中にあり、歴史的にも古代から未来に向かう無限の世界の中に在つて、そうして、その中の小さな一点だけでも、その中にともす火は無限の世界に通つていくのだ、ということ、現実に感ずることができなのです。そういう世界を日本人は、日本の文化の悠久の昔から伝えてきたのですが、それが言葉の姿として花開いたのが万葉集なのです。

柿本人麿という万葉集の代表的な歌人は、

敷島の日本の国は言霊の佑ささけふ国ぞま福さきくありこそ

と歌っています。作者の友人が外国へでも行くときでしょうか、その人に、「ま福くありこそ——恙つがなかれ、安やすらけくあれ」ということを祈つたわけでしょう。その時に人麿は日本を「言霊の佑ふ国」と呼んだ。日本という国は言葉にこもっている魂が盛んになる、魂が時空に通じて、その言葉にこもっている精神が実現せられる世界であるといふのです。「敷島の日本の国は言霊の佑ふ国」——言葉の花咲く国である——そのように、日本の国を自覚しているのです。

それから、万葉集の中のやはり有名な歌人の山上憶良という人の長歌の一節ですけれども、これにもそういうように書いてあります。

そらみつ 大和やまとの国は 皇神すめがみの 敵いづくしき国 言靈ことだまの 幸さきはふ国
この「皇神」は皇祖の神を中心にする祖先の神々をいうものと思いますが、神々の敵しき国である、同時にそれは言靈の幸はふ国なのだ、こういうふうにならば、日本の国を自覚したわけです。

この自覚は、日本の歴史をずっと貫いて来たのです。この「皇神の敵しき国、言靈の幸はふ国」ということの中には、天皇のお心持と国民の心とが通い合う、——天皇のお心持を歌われたその歌を国民が読んで感動をする、また、国民の詠んだ優れた歌を天皇がお読みになって、その心持をお汲みとりになるということがあると思います。歌については、天皇だからといって、とくに歌の形式が違うわけではありません。歌というものは形式においては天皇も国民も全く同じ形式だし、しかも、使う言葉も全く同じ国語によつて歌を作っていくわけですから、そこに天皇と国民の心持は本当に結び合うものをもっている。「皇神の敵しき国、言靈の幸はふ国」という言葉の中には、そういう日本の国柄と、歌を詠むこととが、一体のものであるという意味を持っているわけです。

歌人と忠誠心

そこで日本の歴史を見ますと、優れた歌人は忠臣であるという、——これは私どもが歌を学

び、人生についての思想を学んだ三井甲之先生という方が言っておられる言葉ですが、——まことの歌人は忠臣たるべく、また忠臣であつたという事実を歴史の中に見ることができません。忠臣というといまの若い人には耳遠い言葉でしょうが、しかし、いまそういうことを一々注釈する必要はないでしょう。木下先生のお話を伺えば自然にわかります。天皇のお心を感じとつて、その天皇のお心にしがたつて生きようとする心持の強い人を忠臣と言ふわけです。事実、忠臣と言われるような歴史上の人は、心の素直な歌の作者であるという例が沢山あります。それが日本の国の伝統でもあり国柄でもあるのです。国民全体が天皇を中心として心を通わせ合つて生きていくという、その心を通わせ合う道でもっとも普遍的なのが、短歌なのです。それ以外の表現形式としては俳句もありますし、現代では詩もあるしその他さまざまなものがあるわけですが、その中でもっとも歴史的に長い生命を持つて来ており、そして現在もそれが行なわれていて、おそらく将来も日本の国のあらん限り発展していくと思われのが、短歌なのです。ですから日本の国柄と、歌を詠む、読み味わうということとは切りはなすことができないのです。歌を詠むということの根本は、歌人になるということではないのです。感ずるということ、別の言葉で言えば真心を感ずる力をその中に蓄わえているのが歌ですから、そういう歌を学ぶということが、日本人としては生きる道を学ぶということになると思われます。

二、三の例をあげましょう。われわれの祖先が経験したさまざまな、苦しい混乱した時代に

天皇のお心によって国民の心が開かれていったという例が沢山あります。万葉集の歌人が天皇に対する忠義感情を歌っているのは、彼等の智識が低かったからだ、と考える人もあるかもしれませんが、例えばさき程お話しした山上憶良という人は、仏教についての知識も深く、漢文についても非常な文章家であったのですが、そういう人がその当時の外国の知識を吸収しながらしかも天皇に対する忠節の精神をうたっているということは、日本の天皇にそういうふうに入心した心を治められる、そういう真心が伝えられておるからなのだ、と私は思います。平安朝時代になっても、菅原道真というような人があらわれる。道真がまごころをもって天皇にお仕えしたことは皆様御存知の通りですが、この人は漢詩の方で非常に優れた人であるばかりでなく、歌もその当時の歌人の中におけば、まことにすぐれています。鎌倉時代以降、皇室の御力というものは一変して非常に衰えるわけですが、その境目に立ったのが、源実朝という人物です。この人の歌を読んでみます。

大君の勅をかしこみちちわくに心はわくとも人にいはめやも

ひむがしの国にわがをれば朝日さすはこやの山のかげとなりなき

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

これは言葉の解釈が少しむつかしい点がありますが、一番最後の歌はとくに有名ですからお分かりでしょう。忠節感情を詠んで調べ高い歌ですが、その歌は「太上天皇御書下預の

時の歌」という前書がついているのです。後鳥羽上皇からお手紙をいただいたときの歌なので、そのお手紙は今日残っておりませんので、どういふことがその中に書かれてあつたかは分かりませんけれども、そのお手紙による感動がこの歌となつたのでしよう。鎌倉時代にあつて、実朝という人は特別な人で、聖徳太子の十七条憲法を学ぶといふようなことで、心を日本の国柄に寄せる心の深かつた人でしたが、それにしてもこゝろ歌を鎌倉時代において残しているといふことは重大です。その実朝が死んでから二年で承久の乱になります。実朝が死ぬと当時の武士は、簡単に言えば、京都の天皇に反するようになつて、例の、上皇を、隠岐の島にお流しするとか、佐渡の島にもお流しするとか、日本の国柄の歴史のうへで最も悲しむべきことが行なわれることになりました。ですから、実朝の忠誠心といふものは、その当時の乱れゆく世を支えていたと思います。そしてこの人の忠誠心は、この歌のように、太上天皇の御書を頂いた感激に支えられていたかと思われまます。

次に豊臣秀吉です。秀吉は聚楽第にその当時の全国の大名を集めた、それから公家も集めました。そして天皇の行幸を仰いで、そこで全部のものに忠節を誓わせて、歌を詠ませたのです。いま、たとえば佐藤総理大臣が、天皇誕生日にでも、大臣並びに自衛隊の幹部を集めて、大学教授も総長ぐらいの人をみな集めて、全部歌を詠んで出せといふことになつたらどうでしょう。どういふことになるか、ちよつと想像もつきません。これは秀吉の時代だからできた

いってはいけないのです。秀吉は、そんなことをする必要がなかったのですから。けれども、そのことが持つところの意味、それを今日のわれわれが考えてみれば、秀吉がそういうことをやったということが、どれだけ大きな意味をもっていたか、想像できません。秀吉はそのあとめちやくちやな点がありますから残念なのですけれども、この聚楽第の行事には、日本歴史の真髓を秀吉が表現したと思います。それで戦国時代が治まったのです。そのときに秀吉は自分でも歌を作るし、家康や加藤清正などもみな自分で歌を作ったのだらうと思います。また、秀吉は、天皇がお帰りなつてから、歌を作つて天皇にさしあげたのです。秀吉のこの時の歌はあまりいい歌ではないのですが、天皇からお返しのお歌を頂いています。その秀吉の歌を上皇がまた御覧になつて、非常に優れたお歌をお与えになつている。秀吉がもし誰かからこういうことを学んだのだとしたら、これは日本の皇室の伝統から学んだのだ、秀吉の歌は、その当時の歌にあつては素直な歌ですから、やはり皇室の伝統の中に伝えられていた歌を秀吉は学んだのであろうというように私は想像します。この想像が間違つているかどうかということは、これは分りませんから、いまここで断言はできませんけれども、私はそういうふうに感ずるのです。戦国時代のあれだけばらばらに荒れ果てた国というものが、秀吉を中心にして、歌を作るといふ、これは歌を作るといふ事実そのものでなくて、歌を作るといふ心持ちによつて、平和を導き出すことができたのだ、国内の心が一つにまとまることが出来たのだということは、私ども

の心に銘しておくべきことだと思いません。

そのようにして日本の歴史の中では、とくに歌なんか作らなそうに見える秀吉だとか戦国武将だとかがすぐれた歌をよんでいる。上杉謙信の歌など非常にいい歌です。われわれの作る歌よりずっと立派な歌です。そのようなことで、明治時代初期までは、厳密に言えば憲法ができるまでは、三条実美とか岩倉具視などが明治天皇をお助けして政治を執っていたのですが、彼らには多くの歌が残されている。こうしてこの時代までは和歌というものが、日本人の感ずる心というものを、養なつてゆく一番の中心だったのです。また、日本人の、ものを感ずる心というものは、歌の中に詠み継がれ、歌い継がれ、また人々の心の中にそれが通い合つて来たというように、——実際の歴史をずっと見ますと、そういうようになっていっているのです。

ところが明治後半から以降、残念ながらこの歌というものは、ことにいま言つたような歌の道というものは、大学の教育の中から完全に排除されましたから、いま、全国の大学からこれだけ多くの学生諸君が集まつていますけれども、和歌が必修なんていう大学は一枚もないでしょう。かつて、国学院がそれに似たことをやつていたと聞きましたけれども、いまは違つてでしょう。文学部はそういうことをやるかもしれないけれども、政治家になるとか、実業に働らく人は、そんなことはもうやらなくていいのだ、だから一生の間歌一首見なくつたつて、大実業家にもなれる、大政治家にもなれるのです。それでは、なにか代つて他に心に深く感ずる力を

養ない育てることができたのでしょうか。それがないから、今日、先生方も、先輩方も非常な警告を発しておられるのでしよう。したがってわれわれは歌人になる必要はありませんけれども、いま言ったような歌を読み味わうということが、われわれの物を感じずる力を養なうという世界を、これから展開していきたいと思うわけです。

明治天皇の御歌

もつとも明治以来でも政治とか実業の衝に立つて同時に歌を詠んだ人がないわけではありません。もつともそうした人が、歌を学問の中心と考えて詠んだかどうかは分かりませんが、そのような中であつて真の学問として歌をお詠みになられたお方は明治天皇でいらつしやいます。そして今上天皇は明治天皇のお歌に学んで歌を詠むということについて御努力なさつたのです。私はそれが、天皇の教養とか宗教的情操とかいうものを中心にあると信じています。どうしてそう信ずるかという点、明治天皇、大正天皇、今上天皇のお歌そのものが、それを示しているからです。そこで明治天皇のお歌をみなさんと一緒に拝誦してみたいと思います。

明治天皇は、「歌」というものを、いわゆる芸術的な短歌というものでなくて、「敷島の道」という言葉で言っておられたり、「言の葉の道」というようにおっしゃっている。そして「歌」というものは真心を歌うことだというふうには、——概括していうとそういうことになつてしま

いますが、——そういうご感想をたくさんそのお歌に述べておられます。さきに私がお話したことから、ただ単なる芸術的一詩型としての短歌ではない、日本人の道としての短歌の意味と価値とを、十万首の作者である明治天皇の御歌に学びたいと思います。明治天皇の「歌」についての御歌を拝誦したいと思います。歌は考えるものではなく、感ずるものです。声を出して読み味わうものですから、一緒に読みあげて味わいましょう。

明治天皇御製

歌

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり（明治三七）

思ふことありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにして（三七）

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな（三七）

心

かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のこころは（三七）

歌

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにに心をなぐさめてまし（三九）

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき（三八）

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和ことの葉（三八）

戦のいとまある日はものものふも言葉の花をつむとこそきけ（三八）

誠

疾き遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり（三八）

をりにふれたる

ますらをも涙をのみて国のためたふれし人のものがたりしつ（三九）

歌

まごころを限りなき世にとどむるもやまと詞のいさをなりけり（三九）

すなほにてををしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり

神 祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり（四〇）

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけり（四〇）

歌

千万の民のことばを年年にすすめさせてもみるぞたのしき（四一）

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり（四一）

道

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道（三九）

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道（四〇）

寄道述懐

ふむことのなかたからむ早くより神のひらきし敷島の道（四二）

四十四年、四十五年の御製は明治天皇の最晩年の御製でございまして、そこには、明治の末年に深く国を憂えられたお心と、最後の歌にはどういうのか、私は不思議に思いますけれども、お亡くなりになることを予感せられておるような、人生に対する深い哀惜をこめての、ご遺言とも思われるような感情のお歌があるので、そういうふうに感じられるものの中から数首を、年代ということを考えながら、引用しておきましたので、あとでお読みいただきたいと思えます。

明治四十四年の御製から

虫声

さまざまの虫のこえにもしられけり生としいけるもののおもひは

川

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ

眺望

雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむらだち

をりにふれたる

教草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ

明治四十五年の御製から

春曉月

あけがたの霞のうちについてなく消えゆく月のかげのしづけさ

惜春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこちこそすれ

花

あかず見し山べのさくら春の日のくれてのちもおもかげにみゆ

雲

天のはらみわたすかぎりはれにけりいづこに雲のきえしなるらむ

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

述懐

思はざることのおこりて世のなかは心のやすむ時なかりけり

をりにふれたる

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも
若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

(亜細亜大学教授)



講

義

これからの国造り

―物心両面の理想は何か―

木内信胤



新出発の機は熟しつつある

日本は実力の再評価

日本国の二つの特徴

抜けているための危さ

新らしい日本の内容

私の言う新らしい宗教について

△質疑応答▽

新出発の機は熟しつつある

最初に、今日の演題のことをちよつと申しておきたいのですが、今度の題は、昨年の合宿でお話しした題と全く同じものです。今年またこちらへ伺うことになったので、話そうと思う演題を書いてお送りしましたが、そのあとレジュメを書くころになつて、昨年「日本への回帰」第四集をあけてみましたところ、そつくり同じ題がついているのです。だから、全く同じ題で二度お話しをすることになるのですが、内容は、今度は少し違う。というのは時勢が変つたからです。昨年お話ししたことを今度こそ本当にわかつてもらえるだろうし、同じことをぜひ言いたいと思うわけです。

レジュメの第一段には、「新出発の機は熟しつつある」という題をつけました。今年は明治維新からみて百一年目ですが、日本は新しい出発をしなくてはならない、その機は熟しつつある。だから今日こそは、そのお話をしたいと思うわけです。

機が熟しつつあるという理由は、米ソ両国のリーダーシップが失われつつあるのがその第一です。第二は日本自身が、自己の実力を再評価し始めたということです。この二つの事実によつて、新出発の機は熟しつつあるというのが私の考え方ですが、私はこの二つの事件を現在の世界における二つの超重要な事件だと考えています。どうしてそれが重要な意味をもつ

かということ、その事件の内容を知つていただければおのずからわかると思いますが、米ソのリーダーシップが失われつつあると、ひとまとめにしてありますが、これは二つに分けて考えたほうがいいのかもしれない。なぜなら、米ソ両国がリーダーシップを失いつつある理由が双方でまるで違うからです。

アメリカは何故リーダーシップを失いつつあるか、その理由を考えるには、三段構えぐらいに考えたほうがいいと思います。第一は、戦後アメリカがリーダーシップをとつて来たというのは、アメリカが好き好んでやつたというよりも、戦争を遂行してアメリカはいよいよ力をましたようなことになった。戦争がすんで眺めてみたら、全世界は実にあわれな状態にある。その上スターリンのソ連が暴れ出しましたから、何とかしないわけにはいかない。自分の実力は十分に自覚した。だから彼等はそのつもりでやり出した。そのアメリカは、幸いにして第一次大戦のときとは違って、非常に進歩した「戦後処理の理念」をもつていた。これは第一次大戦後の戦後処理が目茶苦茶だった経験から学んだものです。また一方アメリカは、第一次大戦後から第二次大戦の間に大恐慌というものを経ている。そのとき多くのアメリカ人は、これはいよいよわが国もマルクスの予言の通りになる、これで資本主義は滅びる、これが資本主義の最後の日か、と思つたほどのひどい恐慌だったのです。その処理をした経験から、とくに経済学の分野で非常に力をつけた。それらの新しい考え方に立つたものが戦後処理の理念でした。

これは大いに進歩した理念であつたから、処理は非常にうまくいった。しかし人生はつねに動いていきますから、戦後処理ばかりがいつまでも問題ではない。常に新しい問題が出てくる。物質が豊かになれば世の中はまるくおさまる、万事万端うまくいくという考えは、戦後処理の理念のひとつでもありませんが、その物質がいやが上にも豊かになつてきた現在、世の中はますます難しい世の中になつてきた。そういうような新しい問題の台頭に対して、現在は、それを処理すべき理念なしということなのです。これがアメリカのリーダーシップ喪失の第一段の理由です。

第二段の理由は何かと言へば、それは現代ヨーロッパ文明の行詰りといつてもいいでしょう。現代の文明は物質偏重の文明ですが、もつと深く言えば、現代は宗教を忘れた時代なのです。中世流のキリスト教ががちりと人の心を押えていたのをけとばしたのが近代ですから、その近代思想というものは宗教否定の要素をもっている。かれらの世界において、キリスト教は、いわばそのけとばされたままになつていのです。だからこれが何とかもう一度大宗教改革を行つて甦つてこない限りは、うまくいかない、何事もうまくおさまらないということでしょう。そういう基礎事情から出て来るものが、一ぺんに現われて来たのが現在のアメリカだと考えたらいいだらうと思うのです。そういう理由によつて、アメリカはいまリーダーシップを喪失してきたのですが、その中間に、いまの物質偏重の思想を支えて来た学問がケインズ経済

学であつたといつたようなこともある。元來ケインズの経済学は、世の中に失業があるのはおかしいといふところからスタートしたが、失業がなくなつてくるとあとは何が大事かといへばもともと物質的に豊かになれば万事OKだという思想が背後にあるから、経済が物量的に成長すればいいと考える。そういう一面的な考え方に立つ経済学に支えられて来た社会に起きつつある破綻だ、といつた考え方をしてもいい。これをいれると三段階になりますが、「破綻」というのは実はまずいのです。任務を完了したからさよならをすべきものが、まだ残っている、それがまずいのだといふふうに考えるほうがいい。いま急に過去の功労者を罰することをしないで、いままではそれでよかつた、しかし任務を終了した以上は、新しいものを出さなければいけない、それを出さないのが悪いのだ、と考へたほうが親切であり人間的でしょう。そのほうが正しいと思います。ここまでの話がアメリカです。

ではソ連のほうはどうかといひますと、これはまるで事情が違ふのです。ソ連という国は、一九一七年レーニンによつてマルクス主義共産革命が成就したことによつて出来た国です。そのレーニンはしかし間もなく死んで、スターリンの世の中になる。この時代はマルキシズムの信念は非常に強かつたから、あのような激しい政治となつたわけですが、そのソ連がいまリーダーシップを失いつつある理由がどこにあるかといふと、「イズムそのもの」にある。イズムそのものが誤りであるところに原因がある。当人達は、これはもう絶対の真理だと思つてい

るであろうが、間違いはやはり間違いだから、万事につけて末端において思うようにならないという事実がでてくる。それをスターリンはどうしたかという、信念は強いし、人間がああいう人間であつたから、うまく行かないのは邪魔をする人間があるからだといつてそれらを肅清する。それで何千万人を殺したというわけです。それで押し通してきたのがスターリンですが、彼の晩年は悲惨そのもの、氣違ひのようになって死ぬ。次がフルシチョフですが、三年ほどして彼の独裁になつた。このフルシチョフはまだマルキシズムを信じ切つていたでしょう。しかし、スターリン流に人を殺しながらやるということは彼の経験からいつてできないし、また人間もスターリンのような豪傑ではないからそれはやれない。彼は才氣は相当にあつたからうまく行かないことは末端でなせばいいというつもりで、末端に手を加えながら進むのです。ところがそうやっていくと、自然自然にイズムそのものに傷がついてくる。だから、フルシチョフ以後のソ連は、マルキシズムを無意識のうちに捨てつつあるのだと私はいう。

私がこのことに気がついたのは一九五六年のフルシチョフの演説の内容を知つてすぐですが、そのころから、あと二十年ばかりしたら、ソ連からマルキシズムはぬけ落ちてしまふだろう、ソ連は「普通の国になる」だろうと言つていのですが、これはまさにその通りになつてきたと思います。フルシチョフ流でいきますと、その結果ソ連はとめどなく自由化してしまふのです。もつとも最近、やや揺り返しがきている。最初にハンガリーとポーランドに内乱がお

こつたのは一九五六年ですが、この時はソ連は武力で弾圧してしまつた。弾圧はしたけれどもソ連自身も自由化してくるし、東ヨーロッパも自由化してくる。最近ではそのチャンピオンは、チェッコですが、ソ連はこれ何とか抑えつけた。現在のチャンピオンはルーマニアで、これもソ連は抑えようとしているけれども、肝心のソ連自体で、もはやマルキシズムとは何のことかわからなくなつてきている。だから、これからまだゴタゴタはするでしょうが、共産圏が昔のような信念をもつて団結して、非共産圏、資本主義の諸国にぶちあたつてくるということは、もはや到底できないと思ひます。それが彼らの状態なのです。

その中で面白いのは、中共はいま激しくソ連を罵倒しています。ソ連は、中共は第一その人口からいつて怖いし、またしやくにさわつて仕方がない。この間のウスリー江での衝突事件がソ連を憤激させているという話ですが、中国人というのはずいぶん残忍性を發揮する、それに猛烈に数がある。それが国境を接しているでしょう。中央アジアの方面などはつきりした境がなく、ずるずる入つてこられたらどうなるのだという大不安がソ連にあるのです。だからソ連人は、中共をいまのうちに叩かなくてはいかんということを真剣に考へているという話です。中ソの間の戦争は、あつて不思議はない。原理的に言つて、およそ共産主義なるものは、一枚岩でなければならぬ。それが分裂したという以上は、両者の間に戦争が起つても不思議ではない。そういうのが彼らの状況であつて、ソ連たるもの、リーダーシップを失わざるをえな

い。マルキシズムの当否に対する論争は、経済学的にはすでに終つていくということもありますが、それやこれやで、全然共産主義はこわいものとはみえてこない。その状況を指してソ連はリーダーシップを失つたというわけです。

こうして米ソ共にリーダーシップを失つた。これがこの先どこへいきつくか、それが実に興味ある問題なのです。かれらがリーダーシップを握つて築かれたのが戦後の世界ですから、彼らがリーダーシップを失つてくれば、かれら自身がどうなるかも問題ですが、世界がどうなるか、これが実に面白い問題なのです。だから私は、このアングルから世界をみるのでなければ、世界をみているとは言えない、という。また、この点に着目すれば、毎日、新聞に出る事件がすべていま提起した疑問に答えるべき材料ともなつて来るのです。ですからどうぞ、毎日の新聞は、この観点からご覧になるよう、そうすればいろいろのことがわかつてくるわけです。

日本は実力の再評価

次は日本人が自分を再評価し始めたという話です。これはいまお話した二つのことを束にして、ひとつと考えると、それに並ぶ大事件だと思ふのですが、いま日本に何が起つてきたかという、日本人もようやくいままで自己を過少評価してきたことに気がついて、おれはもつと偉いのかな、と思ひ始めたというのが、この自己再評価です。日本の経済成長率は過去

三年、一二%、一三%、一四%という数字を「実質」で出していますが、アメリカは六%ぐらいは成長したいというので、そうやってみたところがたちまちインフレになって、いま消費者物価の騰貴はアメリカのほうが日本よりも悪いのです。もつともごく最近の数字では、日本のほうがまだ少しばかりアメリカより悪いようにみえています。アメリカは消費者物価と卸売物価はほとんど一緒に上る。日本の卸売物価はまあ大体平らです。この頃はアメリカの影響で少し上りそうになっていきますけれども、卸売物価は上らず消費者物価だけが上るとというのが日本の特徴です。それは何故だということを、いまの普通の経済学者で説明しうる人は、まづいいと私は思います。日本の物価状態は決してよくはありません。物価が日本の大問題ではあります。アメリカはそれより悪い。金利も経済の大問題ですが、アメリカはこの頃少しよくなってきたけれども、異常な金利高で日本よりも高いのです。これは向うが駄目になったということでもありません。やはりおれは偉いのかということになるでしょう。これらのことがみな数字をもつて明確な事実として浮び上ってきたのですから、日本人もおれが偉いのかなと思いはじめた。いつからか、と申しますと、一部の人は別として、全国民的基盤においてそれが始つたのは、過去半年、せいぜい小一年、と言つたらいいでしょうか。しかし、次々と事実が指摘されて来るのですから、今はこの自己再評価は猛烈な勢いで進んでおります。また、こういうことになると実に勝負が早いのが日本人ですから、私は、再評価の完了はいつかと言わ

れば、あと小一年だろうと思つています。全体で二年のプロセスです。しかし、再評価にはまだもう一つの意味がある。それは内容の問題で、自分の位置づけを正しくみるばかりが再評価ではない。なぜ日本は偉いのか、というその「なぜ」がわかかって始めて本当の再評価といえる。それにもうひとつ。偉い日本がなぜ自分を過少評価してきたか。この第二の「なぜ」もわかるのを再評価の完了というとして、それをいれてもあと小一年で概ねいいところに来ると思う。どうかそうなつてほしいというのが私の見方、かつ願いです。

日本国の二つの特徴

日本人が何故偉いのか。これはいろいろあるのですが、天然自然に日本が恵まれているということはあまりない。国土は小さく資源はないからですが、別に、気候風土、世界のなかの地理的位置、それに山河の有様ということがある。これを入れて考えればそれこそが非常に大きな日本の資産なのであつて、それらが日本人の心をつくっている。元来日本人の心は、国土その儘だといつて一向に差支えない。だから、この国土の自然の美しさをこわすということは実に悪いことなのですが、日本人の偉さのわけをさぐりますとすべて心の問題になる。第一に頭が良くて回転もはやい。よく働らくこともそのひとつです。今の社会はよくオルガナイズされていませんから、働らくことがいやにもなるが、本来の人間というのは、働らくことの

ほうが面白いのです。働くほど面白いことはない。働けば遊ぶのも一層面白くなる。日本人はそういう精神を強くもっている。日本人の精神の特徴はまだまだ意外なところにある。明治の日本をご覧なさい。あれほど尊皇攘夷でかたまっていた日本が、いよいよ開国ということになると、あつと言うまにヨーロッパ文化取入れに変わる。今度の敗戦でもそうです。あれほどハッキリと一億総決死であつたものが、ガラリと変つてアメリカ一辺倒になつた。それをみて腑甲斐ないと感じた人もありましたけれども、よく考えてみれば、それが日本人の大長所なのです。捨てるときにはあつと捨てる。あの心境です。私はこれを、日本人の長い間の仏教的修行の結果だと思ふ。しかしその前に神道の考え方があつたからだとも思ふ。日本の国民性はこのにこだわらない神道の考え方をもととして、それに長い間仏教的鍛練を加えたものですが、それに明治以来の西欧化というものを加えたのが日本人なのであつて、その全体が一口にいつてワンダフルなのです。そのワンダフルな力をもっているのが日本人の偉さの根源だといふことに、探ぐれば必ずやるのです。それがわかることをこめて再評価の完了といたいと思ひますが、なぜそれが世界の大事件かといひますと、いま、米ソ共にリーダーシップを失つて、新しい世界はどんな世界かわからなくなつてきた。その中で一人日本人だけが自分というものを自覚して、その偉さはどこに在るかと思つたとなると、これはいろいろな意味で世界に対して新しい要素を提供することになるだらうから、これは大事件なのです。

しかし一方、日本人は抜けているところは馬鹿に抜けている。これは今の日本国の第二の大特徴です。日本人というのは、抜けている点はバカに抜けているから、実に実に危いので、国全体があつという間に大穴に落ちたようになることがありうる。その話は次のようです。

抜けているための危さ

この日本の危さについては、七つの問題を考えてみる必要がある。第一は沖繩の本土復帰です。沖繩が万一にも七二年に本土に復帰するという事にならないならば、たとえば韓国は、沖繩がすっかりしているという事に自国の運命がかかっているわけです。同じことが台湾、フィリピンみなあるのです。もしも沖繩の日本復帰の仕方が、彼等がもっている当然の期待権にそむくということになると、日本とアメリカとの関係も次第に悪くなってくる。これは外部的な事情ですが、沖繩に関する日米交渉がうまく行かなければ、日本国内には悪質な政変が起るでしょう。だから、場合によつては日本はあつという間に大穴に落ちたようなこととなるかもしれない。

第二は安保の自動継続の問題です。七〇年を安保の年といい、この年をもつて日本を騒乱の巷と化し、一挙に革命をやらうと思つている連中がいる。その意図はすでに暴露したから、あ

んなものを押えるのもうなんでもないとはい思ふけれども、ぼやぼやしていればそれで一挙に大穴です。

第三は中共の対日工作です。中共は日本の国論を分裂させようと思つてゐる。その工作は今日までのところは実に成功してゐる。かれの意図は、日本を完全な分裂にもつていき、それによつてアメリカと袂を分かたせておいて次の工作に移ろうというものである。今の中共の状況からみれば、これはもう恐れる必要のないものとなつて来たけれども、これもやはり、日本にとつて危いことのつたのです。

第四は大学問題です。これには二つの面があるのです。小学校から大学に至るまで、教育はなつてゐない。あなた方は全部その犠牲者です。だから憤慨するのは当り前です。日本の教育は、大学だけではなく全教育をなおさなければならぬ。今からあまり長い時がたたないうちに直してくれないと、三十年先、五十年先の日本は目茶苦茶になる。これは大学問題の本當の性質ですが、もう一つの面は目前の問題です。これはしかしもうすんでしまつたことになりました。もしも、大学問題で解散に追ひこまれたら、これで一挙に日本は穴に落ちると思つて私は心配した。あの時の解散はそれほどこわいものだったので。あれで解散したら公明党が二十数名ふえるでしょう。自民も社会もへるでしょう。民社、共産はどうあろうと、こうなつたら佐藤総理の統率力はなくなり、自民党は派閥抗争の場になるでしょう。そうなつたら、今う

まくいき出している安保問題の処理等、すべてうまくいかない。激しい場合には、一挙に穴に落ちる。ところがあの乱暴な採択によつて、大学法案を通した上で解散は絶対にしないということになつた。これを新聞は非難しているけれども、私はもう勝負はあつたと思つている。これで私は、目前の危機だといつた沖繩も安保も中共も全部すみのような気がします。あとは教育問題をちやんとやることです。

第五は議会制民主主義は何ともしなければならぬ、ということですが、これは実に難物です。これは日本ばかりの問題ではありませんが、とにかく今の日本の議会制民主主義ではああいう国会になるようにできています。最少限、国会法を直す。次に選挙の仕方を直す。国民にわからないことは聞かないようにしてほしいのです。多くの国政の大問題は、国民には実はわからない。社会が複雑になつたからです。だから、国民にわからせてから聞く選挙でなければ駄目なのです。この議会制民主主義をどう直すかは、これからの大課題です。

第六は過密過疎の問題です。いままでのところ日本人はぼやぼやしていたから、国造りの方針は全く立っていない。その結果として、表日本に人が集つて、裏日本と東北がお留守になるというのがこの問題です。過密の弊害は東京をご覧になればわかるでしょう。しかも十五年先には南関東の人口は今の東京の倍になるといふ話です。そうなつたらおしまい、日本は実はいやな国になる。それをどうやって防ぐか。今すぐに手をつけねばならぬ問題です。

最後に第七は、人手不足の問題です。これからの経済問題といえは、人手不足にどう対処するか、その対処の仕方だといつていい。よく考えてみれば、人手不足とは仕事が沢山あるという事です。それ自体は決して悪いことではない。しかし、それに対する態度が悪ければこれは本当に日本を壊すことになる。

大学問題の半分までが当面の問題、あとは長期的の問題ですが、いま日本国はそういう七つの問題を抱えていて、いつ大穴へ落ちるかもわからない。それが日本国の第二の特徴なのです。

新しい日本の内容

世界はどんどん動いていきますから、その中に生きている日本人もおのずから新しい国造りをはじめなくてはなりません。その国造りは当然物心両面にわたるのですが、第一に、眼に見えるところでは「人口の分散」です。私がこの点について言っていることは、仮りに二億になつても、今よりもずっと空いている感じで住めるように、国のレイアウトを変えようということです。

それは込み合うのがいやだからばかりではなく、そうしたほうが、経済生活、精神生活ともにならずと能率が良くなると思うからです。それと同時に、日本は経済実力があるのだから、公害を排除する。これはただではできません。しかし金をかければ必ずできます。今すぐにもできます。自分の実力を日本人が自覚すれば、いままでのようにただ競争々々とそればかり考

えてはいなくなるのです。国際競争には勝とうと思えばすぐに勝つ。だから、大事なことは、その力におごつて望むべからざることを望みさえしなければいいのです。普通の生活に必要な物量を日本中全部の人にあてがうのはなんでもないのです。しかし、一億の人間がぜいたくをするわけには、絶対にいかない。だからどんなに富み栄えても、足ることを知ることは依然として必要な道徳なのです。それが道徳だというのは、足ることを知らなければ、心の満足がないからです。こういう心構えを整えた上で、思い切りいろんなことをやればいい。それは人口の分散、公害の排除、自然美の回復、歴史、伝統の保全、それらを統括するものとして経済的、精神的に最高の能率が出るように、国全体のレイアウトを変える、ということをやればいいでしょう。

第二に眼に見えないところでは、まず物質の上に出ることです。いままでは物質偏重だからいけないのです。物はつくろうと思えばいくらでもつくれるのですから、いい加減にしておくことです。第三に西欧文明の上に出ること。今まで西欧文明を入れてきたから日本はよくはなつたが、聊か曲つたものになつたのです。急いで入れたためもある。しかし他人に従えば本来の自分が曲るのは当り前なのであつて、曲つた日本を決して悪いと思う必要はない。早くなおせばいいだけの話です。これはまたヨーロッパ文明が駄目になつたから言っている話でもないのです。ヨーロッパ文明は実にありがたいものであつたのですが、日本はこれからはその上

に出てもいい、そうせざるを得ないので。せざるを得ない所以は、心情の満足を追求するよ
うな日本にならなければ、日本自身、いわば身がもてないからです。だから、本当に日本人の
心を満足する日本の姿はなんだろうかということを考えてやっていくのが、新しい国造りな
のです。一口に言えば、これからの日本は、その個性を存分に発揮していくような国造りをす
ればいいのです。

そこでもう一つ。これは蛇足かもしれないのですが、そういう日本はどういう日本だろうかと
考えると、その答は、本当はわからない。今迄のべたような心持で国造りをすればいいとい
うところまではわかるのですが、それから先がどうなるかは、実はわからないのです。わから
ないということ正面にたてて、但し、ここまではわかるから、ともかくもこうやる、と考え
てやつて行く態度、これが正しい態度なのです。実はこの「先はわからない」ということが有
難いところなのであつて、だからこそ人生は楽しいのです。

次にそういう日本は、多分いわゆるリーダーシップは発揮しないだろうと思えます。日本は
日本の個性を發揮した日本国をつくるのがいい。各国それぞれ個性を發揮し、銘々の分に安ん
じるより他ないという悟りに立つた以上は、うかうかりリーダーシップの發揮などいう大それた
ことはやれないのです。これからの世界はこういう世界であつてほしい。勿論新しい日本の行
き方を見習うというものはでてくるでしょう。とくにアジア諸国は見習いたいと思うはずで

す。けれどもわれとわが方から、リーダーシップはとるべきではないと私は思っております。日本にしても、世界にしても、これからは物質面は大丈夫ですから、困るのは精神的墮落です。結論として多分日本人は遊惰には陥ることはあるまいとは思いますが、現象的にみれば実に危い、しかし、この危さを見て、青年が振り立たなければどうかしている。今なら民族意識同胞意識の結集はできる。だからあなた方は、あなた方銘々の場において、それをやらなければどうかしているのです。これからの日本は、そういう精神的な問題を抱えているのですが、それをうまくこなしていけるようだったら、それは一種の新しい意味の宗教的な日本が発展して来ることだと言えるだろうと思います。既存の各宗教は融合態勢になる。これは全部の宗教が自分の殻をすてて、他の宗教に対して少なくとも敬意を表するという格好になることです。それが本当にいいことかどうかは、実はちょっと疑問なのです。なぜならみんながひとの宗教も尊敬するようになる時は、自己主張が非常に弱くなるときで、それが宗教の滅亡だと言えは言えるかもしれないからですが、日本自身の精神問題がうまくいくとしたら、それは恐らく新しい宗教の抬頭を意味するものだろうと、私は考えている次第です。

私の言う新しい宗教について

最後に、余論として私のいう新しい宗教とはどんなものかについて少しばかりお話をしてお

きましよう。

第一に、私は宗教の話はなるべくしないことにしているのです。というのは、そういう話は言葉にのらないものが非常に多い。宗教の話というのは、話せばわかる、正確に書けば通じるというものではありません。たまにはよく通ずることもあるけれども、それは稀にみる非常にありがたい瞬間であつて、そうではない場合が普通です。だから私は、しゃべるのがいやなのです。しかし、言葉で言わなくても、毎日やっていることが宗教的な行動です。勿論わかつてくれる人には、言葉でいつて悪いわけじゃなし、少しは言葉にしておくほうがいいから、このごろ少しは宗教の話をするようにしているのです。何にしても普通人が宗教とは言わないような宗教が興隆することが望ましく、それしかないから、多分そうなるだろうというのが、私の宗教的な考えなのです。

さてその宗教の内容を言葉でいうのはいやだけれども、一言だけ申しておきますと、宗教を普通人の意識で捉らえれば、第一がその神秘性です。第二は儀礼的なものだということです。それからもう一つ。宗教とは何か厭世的なもので、この世のことは捨ててしまふ、という風に考えられている。宗教とは大体そういうものと思われていますけれども、これからでてくる宗教はそうではなからうと思うのです。思想内容として、一つだけ、これだけはどうしても欠くわけに行かないと思われのは、——意外に思いになるかもしれませんが——前世、後世

を肯定する考えです。仏教の本をご覧になれば、人間は何度も何度も生まれ変わって出てくるものということが随所に出ている。それを当り前と考えていたのが、ついこの間、明治も中頃までの日本人の考え方です。それをなぜ捨ててしまったかというところ、それが近代ヨーロッパ思想の、いわゆる自然科学的な考え方で、それによれば、証明できないものがこの世にあるとは考えない。来世があるということは証明できないから、それは考えない、と言っているうちにいつの間にか来世はないことになってしまった。私の意見は、ないということも証明出来ない、だからこれは五分五分なのだ、ところがあると考えるほうが、人生万事、具合がいい、ということ。しかし一方、あると決めてしまうと、これまた困るのだ。まず、あるとかないとかいうことを、哲学的に、認識論・實在論を考えてみることによって、少し鍛練してほしい。あるといい、ないといいますが、あなた方はそれをどう考えていますか。普通、物質的にあるといわれるものは、本当にあるのですか。そういうことを考える。これは實在論ですが、ものがわかるということ、これは認識論です。次にもう一つ、時の経過、時という要素を入れた事物の展開を考えてみることです。時の経過にのせて展開させるところに實在があるといつてもいい。少なくともその展開によって實在が認識されるわけですが、それらのことを少し考えてみることで。これらをどう解明するかは、仏教のなかでも極意中の極意に属することだと思えますが私はそういう哲学をひどく知っているわけではないが、ある程度は知っている。つまり、自

分の心の中においてくる小理屈を大体押えるだけの大理屈を少し知っているので、大体私は自分の知恵に満足しているのですが、そういう哲学によって陶冶された上において、前世はある、後世もあると考える。おわかりになりますか。わからなくても結構です。そういうのが私が考える宗教の内容です。

(世界経済調査会理事長)

質 疑 応 答

△問▽ 韓国の国防は日本の国防に非常に関係があるとおっしゃったのですが、それは暗に集団安全保障を認めていらつしやることを意味するのでしょうか。

△答▽ 韓国の国防はすなわち日本の国防だと言っているのです。そういう意識に日本ははやくならなければならない。国防はもちろん集団安全保障がよいのです。集団安全保障以外の国防の方法はないのです。集団安全保障のついでに悪いことは一つもない。ありうべきあらゆる可能性に対して、共同作戦で防衛することを考えるのがいいと思います。

△問▽ 現在危機に直面している議会制民主主義を再建するためには、制度上の改革が必要なのですか。

△答▽ 議会制民主主義が駄目だということは、今の政治が遺憾なく現わしているわけです。

これは国民が政治というものを自分の政治にしていけないからです。ですから、どうやったら国民の政治になるか、その方法を考えていかなくはならない。それには、銘々が自分相応のことをやっているのだと考えないと駄目です。いくら考えても、自分には大したことはできないと思うかもしれないけれども、自分を除外しては絶対になおらない。議会制民主主義というのはそういうタイプの問題ですから即効薬はない。しかしこの心構えが出来てくれば、具体案はいくらでもあります。

△問▽ 人手不足という問題が、これからやりようによつては非常に有利な条件になるとおっしゃいましたが、それはどういふことなのですか。

△答▽ それを短い言葉で言うのは非常に難しいのですが、一言だけいえば、人手不足は仕事が残っているという事です。やりたいことはたくさんあるが、人が足りない。その仕事は余っているという事は、いい事だ、と認めてやっていると、非常にいい世の中になります。人手不足だから人間が大事になる。そこから出発すると、本当に人間疎外のない世の中をつくれるようになるのです。これは若干のきわめて高級な社会哲学をお持ちにならないとわかりにならないと思います。その社会哲学を發展させれば、なるほど人手不足で助かったということになるのです。

△問▽ 安保以後の学生運動の動向についていかがお考えですか。

△答▽ いま学生が暴れているのは無理もないと思います。あばれることは悪いが、反体制自体が悪いとはいえない。但し反体制を暴力でやれば、その暴力に対して暴力たる警察力で制裁されても、文句は言えないだけの話です。ですから反体制のよしあしは、その内容による。今の反体制は、どういう日本をつくるのか一つも言わないのですから、これは反体制の中でも極めて低劣なものです。暴力に対して、警察力でこれを押えるのは当然ですが、今の学生運動は、ひどいところまでいかないで、済んでしまうとと思います。

欧米は間違っている

岡

潔



十九世紀のドイツの大哲学者にシュローペンハウエルという人があります。この人の主著が明治四十四年、姉崎正治先生によつて訳され、出版されています。三巻に分れ、二千頁ほどの大部なものです。標題は「意志と現識としての世界」と言います。「現識」の原語は *Vorstellung* ですが、これはギリシヤ人や西洋人の脳髓に写つた世界像という意味です。分り易く言えば「世界」ということで、世界をギリシヤ人や西洋人はどう見ていたかということ。シュローペンハウエルによれば世界像をかようにあらしめているのは、その背後に唯一絶対の意志があるからだということになります。それがなければ形而上学、哲学というものでなくなつてしまふということらしい。ところでこの克明に描写された世界像を見て「まあ何という穢ない世界だ。まるで泥沼の底のようだ」と思います。実際読んでいただけで息が詰りそうな気がします。欧米人が世界をどう見ているかということ、日本にいて想像するだけではとても分りません。私は三十くらいの時三年ほどパリにいました。なるほど日本で思つていたのと随分違う。彼等はこんなようだったのかと大分わかりました。しかし最近シュローペンハウエルを読んで大変驚きました。大抵の人はここまで克明に掘り下げないから、はつきり分らないのですが想像もつかないほどです。彼らは世界をこんなものと思つて一切やっている。そうとは知らず

何でも最初は基礎のところは欧米を模倣せずには何一つやれないのが今の日本人なのです。芭蕉の連句に「猿引きの猿と夜を渡る秋の月」というのがあります。今の日本人のしていることは、驚くべき滑稽なことです。「猿引きの猿」どころではない。どんな滑稽なお猿さんでもこんなにひどいのはいいと思います。これから実際そうであるかどうかを出来るだけ正確に見てみたいと思います。

欧米人の世界像はなぜそんな穢ない世界像になるのか。ショーペンハウエルは、かような意識は退け去るがよいと言っています。そうすれば世界はなくなってしまうが、彼はそれが一番道徳的だと結論しています。これは実に徹底した小乗仏教礼讃です。それと同じような哲学者がギリシャにもう一人います。プラトンがそうです。何千年かの歴史の中に、彼の目に写った人の世を照してみても、こんなものはなくすのが道徳の極致であると言っています。私は何となく、そんなはずはないと思う。どうしてこんなひどいことになってしまったのか、差し当ってそれが研究課題です。この問題を追求してみることにしましょう。

○

心理学が対象としている心を第一の心と呼ぶことにします。この第一の心は前頭葉に宿っていて、私というものを入れなければ一切動かない。私は喜ぶ、私は悲しむ、私は愛する、私は憎む、私は意欲するというように動くのです。もう一つの大きな特長は、この第一の心のわか

り方は意識を通してでない、と決してわからないということです。欧米人はこの心しか知らないので。だから心理学も大脳生理学もこれだけを対象としているわけです。しかし、果してそれでいいのだろうか。例えば秋風が吹く、そうするともの悲しい。これは教えられてそうなるのではない。人はみなおのずからそうなるのです。芭蕉の句に「秋風は物言はぬ子も涙にて」とあります。これは「もの悲しい」であつて「悲しい」ではない。悲しいのは私が悲しいのである。しかしもの悲しいのはそうではない。なぜもの悲しいのか。それは心が「もの悲しさ」というメロディを奏するからです。それを聞くと、もの悲しくなる。しかし、どの心がそのメロディを奏するのであろう。第一の心は私を入れなければ動かない心ですから、そんな心が奏するはずはありません。なお詳しく見れば、このもの悲しさというメロディは、秋風が吹けばまるでピアノの同じキイを押したかのように必ず同じ情緒を奏する。そうすると、これを奏でている心は私を入れることの出来ない心、つまり無私の心です。第一の心とは全く違うという説明はこれで十分でしょう。

更に詳しく見ますと、第一の心は五尺の体に閉じこめられてある心です。なぜならば、自分が悲しくても隣に座っている人は悲しくないと。ところが、今問題にしている心は、秋風の吹くところ、家々村々もの悲しくない人はない。こんなに違うのですから、第一の心とは違つた心であるはず。この心を第二の心と云うことにします。第二の心は確かにある。ギリシヤ人

や欧米人はこの心を見落していたために、あんなひどいことになったのではなからうか。そういう疑問のきつかけがつかめたようです。そこでこの第二の心を追求してみたいと思います。

第一の心は大腦前頭葉に宿っている。大腦は五つの部分に分れていますから、第二の心も多分そのどれかの部分に宿っていると思われます。大腦生理学の区分によると次のようになります。一番上を頭頂葉。頭頂葉を少し前に下りて運動領。もつと前に下りて前額の裏のところ、これが前頭葉。頭頂葉を後に下りて後頭葉。後頭葉を横に回って側頭葉、側頭葉は左右二つありますが、連絡がついているから一つとみてよろしい。側頭葉を前に回ると再び前頭葉、このように五つあるわけです。第二の心はこれらのどの部分に宿っているのでしょうか。

○

まず前頭葉ですが、これはすでに第一の心が宿っているところだからここではありません。運動領は全身の運動を司っているところです。ここではありません。側頭葉は知覚、記憶、判断を司るところで、言語中枢もここにある。いわば頭の働きのうちで機械的な部分を悉く取り扱っているようなところです。ここでもありません。残るところは後頭葉と頭頂葉の二つだけです。後頭葉は大腦生理学では資料室といっています。例えば小林秀雄さんは近頃出土品の勾玉に凝っている。えりぬきの勾玉を集める。そしてそれを後頭葉に入れる。資料室とはそういう場所です。ところでそれにじつと見入っていると特殊な感銘が感じられる。その特殊な感銘、

つまりメロディを奏でる心は、だから後頭葉にはあり得ない。同じところに二つあつては困るからです。残るところは頭頂葉です。頭頂葉は大脳生理学では受け入れ態勢のよつて来たるころと言つています。仮に頭頂葉に第二の心があつたとする、折にふれ事にふれてこの心がメロディを奏でる。その調べを聞いて前頭葉が出所進退を決める。そしてそうすべくんば側頭葉に命令して働かす。すなわち思想となる。またそうすべくんば運動領に命令して行為をさせる。すなわち行為となる。その受け入れ態勢が頭頂葉から来る。これでちゃんと話が合います。だから第二の心は頭頂葉にあるのです。

ところで、この心の本性は何であるか。それについてはクラシックを十分見なければいけない。ところが、今の人類、なかならず日本人は自然科学を信じこんでいる。そこでまず自然科学というものについて考えてみようと思います。ところが自然科学者は自然とは何であるかというのを言明しないのです。そんなものは見れば分るであろう、わかり切つたものだと決めてしまつて、それを研究対象にしています。その研究の結果を集めたものが自然科学である。だから自然科学とは本当は思想であつて学問ではない。それで、自然科学という思想において自然科学者が暗々裡に自然と思つているものは何であるか。これを彼等に代つて言明しましう。

初めに時間、空間というものがある。その中に物質というものがある。物質は赤外線写真に撮るとか電子顕微鏡で見るとか、いろいろ工夫を凝らしてもよいが、最後は五体に備った肉眼でわかるものでなければならぬ。この物質が自然を作っている。その一部分が自分の肉体である。時間、空間の中に物質があるということは、空間の中に物質があつて、時間と共に変わるという意味だから、物質が変われば働きが出るから、自分の肉体とその機能とが自分である、自然科学者はこう思っています。しかし、彼らの言う自然は自然の簡単な模型であつて自然そのものではないと私は思う。大体時間というものがあるというのがおかしい。五感でわからないものがないというのがひどすぎる。しかもそれを自明のこととして疑わないのは原始的無知と思う。以上のような自然に名前をつけて物質的自然と呼ぶことにします。彼等は自然そのものを取り扱うのではない。出来るだけ簡単なその模型を考えて、その中を科学するというのです。もしそのことを意識してしているならば、それは確かに一つの研究方法でしょう。簡単なものしかわからないだろうがながながの結果はでる。しかしこういう方法でわかるものは物質現象だけで生命現象はわからないのではなからうかという疑いがまつ先に起ります。それで自然科学に聞いてみる。

人は生きている、だから見ようと思えば見える、なぜであるか。果してこれに対して自然科学はエッセンシャルなことは何一つ答えない。余計な答えはいくらも出て来る。視覚機関とい

うものがあつて、そのどこかを大きく壊せば見えないと言う。それでは壊さなかつたらなぜ見えるかと云うと答えられません。人は立とうと思えば立てる。この時全身四百いくつの筋肉が瞬間に統一的に動く、だから立てるのである。どうしてこういうことが出来るか。自然科学はこれに対してもエッセンシャルなことは一つも答えられない。人の知覚運動というのは生命現象のイロハである。それに関してすら自然科学は何一つ答えることができない。更に突込んで人は学問することが出来る、なぜであるか。人は認識することが出来る、なぜであるか。人は感覚することが出来る、なぜであるか。人は理性することが出来る、何故であるか。彼らはただ呆然とするばかりです。それなら物質現象ならみなわかるか。物質はいろいろな法則を常に守つて決して違反しないということである、なぜであるか。これに対しても自然科学は一言も答えることができない。物質が常に法則を守るなどというのは嘘であります。守ると思つているだけあります。これでは物質現象でさえごく浅い部分しかわからないということになります。物質に法則があるというのは嘘なので、確率が高いということだけです。

○ 自然科学では何もわかりません。それで仏教に聞いてみましょう。

仏教は普通人の心を層に分つて説明します。各々の層を「識」とします。その番号の打ち方ですが、一番心の奥底を第九識という。この第九識は一面唯一つ、他面個々別々なんです。そ

の個々別々である方向から見て、これを個といいます。個が人の中核である。第九識には一面唯一つ、他面一つ一つ個々別々という関係があるだけで、それ以外には何も無い。私は昔、数学でモノゼニアスという術語を調べたことがあります。これはフランス語です。モノゼニアスという字を字引で引いたがないので、この字の周辺を調べました。そうするとモノなんとかという言葉の中に、人類一元説というのがありました。人は元ただ一人の人であった。その証拠に人はみな心が通じ合うというのです。私はそれを読んでびっくりしました。ところが仏教の言うところを聞いてみますと、この人と人との間に心が通じ合うということは如何とも説明のしようがないらしい。心が通じ合うということは一面唯一つ、他面一つ一つ個々別々という関係がなければ説明できないでしょう。そこで第九識を一番始めに持つて来たわけです。これこそ宇宙の大神秘である。だからここから出発して説明しようとしたのだと思います。

こういういき方に比べて、西洋流の学問の観念体系を組み上げてゆくいき方は、実に地べたを這っているようだと思いませんか。以下各個について説明します。第九識に依存して第八識がある。依存してというのはそれを基礎にしてその上ということ。第八識にはすべての「時」がある。しかしほかには何も無い。「時間」ではない「時」なのです。実際人は時の中に住んでいます。時間の中になんか住んではいけません。時には、現在、過去、未来の別がある。未来は分らない。希望も持てるし、不安も抱かざるを得ない。現在はすべてが分っていて、す

べてが動かしがたい、だから厳肅さがある。人生が厳肅だというのは現在があるからです。いつまでも現在に続かれたのでは息もつけない。ところが不思議にもよい按配に、それが突如として過去に変わる。そうすると一切が記憶としか思えない。それもだんだん薄れて遠ざかってゆく。しかもなお仔細に見れば、人は過去については悪い記憶はみな忘れてしまう。よい記憶だけを残して過去はよかつた、あの頃が懐しいと思うのです。私の若くして死んだ友人は、これを時の美化作用と言った。時の美化作用あるが故に人類は向上するのである。私はこれは天才的洞察だと思えます。実際にその通りで、よく出来ているなあと思えます。その過去の一つの属性である時は過ぎゆくということを観念化したものが時間です。第八識の中にあるのはこの時がすべてです。それ以来は何もありません。

第八識に依存して第七識がある。ここに至つて始めて大小遠近彼此の区別が出て来る。彼此は自他といつてもよい。大小遠近とはつまり空間です。かように第九識、第八識、第七識を軸にして、これに云わば肉がついて自然となり、人々の肉体となる。その一つが自分の肉体である。仏教はそう言っている。この第七識と第八識の分け方は私が少し変えました。しかしこれは単に言葉を変えただけで、現在の仏教でいま私が言ったことに反対する宗教はないと思いません。仏教に向うてみます。

人が知覚運動ができるのはなぜであるか。仏教はこう答える。人が普通経験する知力は理性

のよゝな型のものであつて、意識的にしか働かないし、分り方は少しずつ順々にしか分らない。しかし人は稀にはあるが、仏道の修行をしてゐる時など、これと違つた型の知力を経験する。これは無意識裡に働いて、一時にパツと分つてしまふ。かよゝな知力を無作別智といふ。智力と言へば、知情意に働く力という意味です。仏教は無作別智は四種類あると言つてゐる。大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智です。人が見よゝと思へば見えるのは、この四つの無作別智がすべて個に働くからである。人が立よゝと思へば立てるのは妙觀察智が個に働くからである。知覚運動すべて無差別智が個に働くからできるのである。人が学問できるのである。その源は大円鏡智である。大円鏡智は頭頂葉に働く。人が理性できるのである。その源は平等性智である。平等性智は前頭葉に働く。人が認識できるのである。その源は妙觀察智である。妙觀察智は後頭葉に働く。人が感覺できるのは、その源は成所作智である。成所作智は側頭葉に働く。

この無作別智については、講談社から「無辺光」といふ山崎弁榮上人のご著書が出ています。この方は明治の終りか大正の始めに光明主義といふ一宗を始めた。光明主義では第九識を唯一つといふ一面から見て、これを唯一絶対の如来とし無量光寿の如来と申し上げるのです。無作別智はこの如来の光明であり、それを「無辺光」といつております。無作別智のよつて来るところを説明してゐるわけです。

川に大水が出るその時仏教を信仰している人が運よく水の出ないところに住んでいて死をまぬかれたというとき、これを現世利益と説明することもできる。これは迷信です。しかし大乘仏教にはどういうことになるか。「さあ大水が出た」となるとチャンと心ができてくる。自分の生命は犠牲にしても、他人を出来るだけ救おうとする。必ずそうする。その結果他人が救われるか、自分まで救われるか、あるいは他人も自分も死んでしまいか、それは分らない。しかし、そういうやり方しかない。助けられれば助け得る人を捨てておいて、自分が助かるなどという生き方をしない。いくら大水が出て多少しもこわくない。これが本当の信仰心です。

さて第二の心ですが、秋風からもの悲しさだけを残そうとすると、大小遠近彼此の別を抜けばいいでしょう。情緒だけが残ります。えり抜きの出土品の勾玉から、特殊の感銘だけを残そうと思うと、やはり大小遠近彼此の別を抜けばいいのでしょうか。だから第二の心の実体は「時」です。この第二の心が自分である。そうすると時とは自分であるといえます。その人の過去の全体、現在、未来、その人の生き続け生き続ける時がその人のすべてである。自分が時なので、いま時が流れているでしょう。共通の時の上の個の時、それが自分です。共通の時の上を一人一人の時が流れる、それが自分である。そして時の内容を私は情緒と云ったのです。時の奏でるメロディを情緒というのです。この時というものが真の自分だというのは、仏教も云っていないのです。日本民族のみが無言の裡に知っているのです。世界を消したって時は残るの

です。時は第二の心であつて、そこは一切のメロデイのよつて来たる所です。そこに大円鏡智が働いていますからメロデイだけで円融無礙の世界を作ることが出来るのです。

○
それで欧米は間違っています。二つ間違っている。一つは物質さえ分ればすべて分るといふ物質主義です。もう一つは第一の心の描く妄像、すなわち五尺の体とそれに閉じ込められてある心が自分であると思ふこと、これが個人主義です。第二の心が眞の自分であると云ふことに気づいた人を目覚めた人、気づかない人を眠っている人と云います。目覚めた人を仏教では仏菩薩、日本では神、中国では聖人又は神仙と云うのです。

近頃の物理学者が素粒子を電子顕微鏡で見ますと素粒子は生れては消え、生れては消えしてゐる。素粒子といへばそれは物質でしょう。物質はふえたり減つたりしないというのが定説です。ショーペンハウエルはそういうものが物質だと書いています。その長い間の定説が破れたのです。更にもつと不思議なのは空間の全体を考えてゐるのに、素粒子は一体どこから生れて来てどこへ消えて行つてゐるのだろうかと思つて不思議がつてゐるのです。実際はどうかと云うと、素粒子は第二の心の世界から生れて来て、また其処へ消えて行つてゐるのです。

個人主義というのは物質主義に伴つて生れたものです。物質的自然というもので個人を説明するからあつてしまふ。前頭葉の描く妄想が自分ではありませぬ。仏教ではそれを小我

と書いて来ました。頭頂葉の心が本当の自分で、それを真我と言って来ました。それで物質主義が間違いならば個人主義も間違いです。ところが西洋の政治、経済、文学、教育、宗教などすべて物質主義、個人主義でないものではありません。宗教でもキリスト教はそうです。人の始まりは神が物質で作って息を吹き込んだものだとして書いてあります。これは間違いの上に立っている宗教です。こういう思想的な間違いが先にあつて、その上に宗教がある。まず知性であるか宗教であるかという区分があつて、然る後に思想があると考えるのは事実には合わないのです。宗教だつて思想があつて出来るものですから、前提となる思想が間違つておれば間違つた宗教になります。思想があつて宗教がある。宗教があつて然る後に宗教でないものとして知性がある。知性の部分に思想があるのでありません。そんなものは勝手に書いた作文です。

政治も間違っています。共産主義と言ひ、民主主義という。すべてこれ物質主義です。日本国憲法の前文も間違いを出発点としています。妄想を出来るだけ甘やかしています。あたら限りの自由と権利を与えろということをして、作文として、新憲法には書いてある。あんなものは不道徳であるのに決っています。経済も間違っている。大体実業界というのは、人が働こうと思つた時には働けるようにしなければいけない。人が働けばおのずから一億国民が食べてゆけるだけの物質ができる。これは結果です。その結果をはじめに置くのがすでにいけない。まして拡大生産をやらせて世界中の物質をできるだけ日本に集めようとする。大体もうけるために働

かすのでしよう。そんな目標の立て方をしたら、それは餓鬼道です。人道だったら、働くためには働く場所が要る。それで職業を与えていくということになります。

ソニーの厚木工場での話です。女工さんたちがトランジスターの部品を作っている。非常に細かい材料ですが、その作業をする女工さんたちは東北の田舎の中学校を出たばかりの娘さんが大部分です。その働き方を見ていると無心に働いている。そして目にも頬にも生気が溢れている。案内して下さった工場長の小林さんの話を聞きますと、トランジスターの型を変えるのと、古い型に別れを惜んで泣くという。そして無心に働くことに無上の幸福を感じる。無上の幸福とは他に何も要らないと云うことです。この幸福は無心に働いている当人にしか分らない。それで自作自受じざくじじゆというのです。このようにして三年ほどおりますと、顔はおのずからうるわしくなり、立居振舞もうるわしくなります。そして田舎の郷里へ帰ると、お嫁に引っぱりだこだということをお林さんが言っております。私は嬉しくて涙が出ました。働くことに無上の幸福を感じて働いているのだから、もはやその人は労働者ではない。論より証拠、厚木の労働組合は自主的に一人去り二人去り、とうとうコチコチの共産主義者三人だけが残ったということ。だから社会主義が本ものなら、今の主張とは逆に国から労働者階級を消し去ることになる。民主主義は国民の一人一人が生き甲斐を感じて生きるようにすることです。そうすると真の民主主義と真の社会主義と同じことになると思うのです。

ショーパーペンハウエルの世界像は穢いといいましたが、次のヘーゲルは弁証法で歴史を見ようとした。あれは無茶です。そのあとがマルクスです。だからこんなものは知性ではない。共産主義は狂信者の集団です。やり方はいつも左手にコーラン、右手に剣です。迷惑至極です。このためにどんなに日本が迷惑しているか。悪いのは必ず他人が悪いと思うような考え方が一般化している状態では、少し大量に失業者が出れば今の憲法のままでは合法的に共産主義化するに決っています。自由主義貿易も困ったものです。イギリスとフランスが落伍して共産主義化するおそれがあります。そうなると大動乱が起るかもしれない。世界は火の燃えさかるような世相です。これは欧米人が第二の心のあることを知らないからです。

もともと日本人は第二の心のあることを知っているのです。それを真心と言っている。だから感銘を受けるとか、真心がメロデイを奏でるとかいうことを実際に知っています。大てい人は知っていたのです。近頃感受性が大部鈍くなっているから、感銘を受けると真心がメロデイを奏でるといふことを知らない人もいます。これを知らせなければなりません。分っている人も少しはいますし、何とか教えようもあります。日本人なら分ります。今はおかしなものを採り入れたから、そのセンシビリティがひどく悪くなっている。それさえ取り去ればよい、物質主義、個人主義のために頭頂葉のセンシビリティがひどく悪い。真心の奏でるメロ

デイを受信するセンチピリテイがひどく悪いのです。

このごろは真心という言葉をかきかき聞かぬでしょう。感銘という言葉も言わないでしょう。感銘ということとは意識を通さないとわかつてはかきかき聞かぬでしょう。目覚めた人は花を見れば花が笑いかけている。鳥を聞けば鳥が話しかけている。人が喜んでおれば嬉しくなり、人が悲しんでおれば悲しくなる。みんなのために働くことに無上の喜びを感じる。すべてが楽しくなんの疑いも起らない。死ぬなどは思わないのです。(第二の心は不死です。)

第二の心の分りかたは決して意識を通さない。意識を通さないでもわかるものがあります。真心の奏でるメロデイの感じ方は意識を通さない。真とは理に尽きたもの、善とは崇高なもの、美とは悠久なもの、すべて真善美のわかる分り方は意識を通しません。特にいい絵など見るときはそうです。美とは不思議なものです。確かに実在するものですが、それ以上のことは説明のしようがないのです。

ともかく欧米の物質主義、個人主義は間違っています。これは滔々たる濁流です。自分で見ることのできる人だけが濁流であるとわかるのです。日本民族は今起ち上るはかはない。それによつてのみ人類を救うことができる、私はそう思います。

質疑応答

(問) △われわれ日本人がいまからの心のよりどころとして何を求めているたらよいかをお教え下さい▽

(答) △物質主義、個人主義を排除するのです。みずから本当のものを、つまり理に尽きたもの、崇高なものを、悠久なものを求めるべきです。なかならずく崇高さに対する感受性をセンシブルにすることです。日本人は各人頭頂葉を持って、それがよく働いていない。物質主義、個人主義という癩を払って、その受信機がよく聞えるようにすることです。日本人の感受性が鈍つたのは、この二十年間の教育が作ったブランクです。教育には季節があつて、その季節に合わせて教えなければ発育しない。ところが教育の目標から季節がなくなつてしまつた。大学へ来てしまつてからでは季節はとづくに過ぎてしまつています。それで季節のない教育といます。その教育の目標は崇高なものに対してセンシブルにすることです。もともとそれは日本人には備つているのですが、おかしな雰囲気の後頭葉へ詰めたから眠つていゝのです。その雰囲気がある限り、頭頂葉は働きようがないのです。物質主義というのは非真心主義です。真心をこめてしようとしまいと、人が工作すれば同じものができるといふのが物質主義です。歴史上の人の死に方を見れば、目ざめた人、不死の人でなければこんな死に方はできないとい

う人がいくらも目につく。それはみな神です。神とは目ざめた人、人とは眠れる神といえます。日本には「美しいなあ」という死に方をする人が沢山いる。「大日本史」「近世日本国民史」そういうものをお読みになるのが理想的です。人の美しい死に方が一番頭頂葉の養いとなります。眠っているここのセンチピリティを起すことになるのです。〽

(問) 〽先生のご著書によりまして、今お話のございました「美しい死に方」をしたわれわれの先祖を沢山教えて頂いておりますが、今日ここでもう一度そのお話をお聞きしたいと思いますが。〽

(答) 〽平安も末の頃、鳥羽上皇の時に北面の武士に源渡という人がいました。これが宮中に仕えて賤しい仕事をしていた女性をめぐつた、袈裟といひます。袈裟は輝くような美貌で心ばえも優にやさしかつた。それで夫婦仲は非常に睦じかつた。ものの本の中には「人も羨む」と書いてありますが、これはいやな利己的な響をもつたことばなので省きます。ところが同じ北面の武士に遠藤盛遠というのが袈裟を見染めて生命がけで言い寄つた。袈裟は生命を捨て貞操を守る外ないと思つた。そこで主人の留守の日を見計つて「今日これこれの室に主人を早く風呂に入れて寐かせておくから、髪が濡れているのを目印に一刀のもとに首を打ち落してほしい。それからでなければ御心に従えない」と書いた。盛遠はその通りにして月明りで首を見ま

すと、あろうことか袈裟の首だった。この袈裟が生命を捨てて貞操を守ったという話は当時の京の町に流れた。京の町々では貞操をひさいで暮しを立てている女性が非常に多かつた。袈裟の野辺送りの日には、それらの多くの女性たちは葬列に加わつて、遠く町の外まで野辺送りをしたといわれている。にもかかわらず、身分の高い女性たち、恋歌などのやりとりをして貞操を遊びの具と心得ていた女性たちには一人も見送つたものはいなかつたということです。

袈裟はどうして貞操を守ることが大事だということを知つていたかというところ、彼女は宮中に仕えて賤しい仕事をしていたから、貞操を遊びの具と心得ている多くの女性たちの穢さを知つており、またごく稀に貞操を守り通している人の気高さもわかつていた。だからこういう教育を自然に受けていたのである。

当時の世は神々の目から見ればまことに治め易かつた。一人の非常に優れた神を世に送つて人となし、それから自然の教育を受けさせ、自然に死なせる。それだけであつた。しかし、それほどの袈裟になぜ身分の高い淫奔な女性たちは感動しなかつたのか。彼らはすでに人道中の餓鬼であつて、いかなる袈裟の力を持つてしても、すでに餓鬼の業の定まつたものはどうすることもできなかつたのである。この袈裟の死に方は眠っている人には出来ません。きれいでしよう。美しい死に方だなあとと思う。袈裟ははじめから目ざめた人が生れ出たのです。すぐれた行為によつてはじめて目ざめたという例ではありません。▽

(問) △先生が文化勲章をお受けになられた時、天皇にお会いになったと思いますが、その時のお気持ちをお聞かせ下さい▽

(答) △特別な感銘を受けました。これが日本民族というものだろうと思います。一種独特な感銘です。日本民族というのは、一つの大家族だと思えました。自分もその一人だと思えます。非常に早く心が安定する。だからこの民族という集団様式は、人を本当の意味で向上させるにはよい様式です。何十萬年来一緒にいるのだから随分違う。中国は国という集団で大部落ちる。また仏教は個人生活しか説いていない▽

(問) △キリスト教は個人主義、物質主義に立っているといわれました。それではキリスト教は宗教ではなく主義というものと考えておられるのですか▽

(答) △いいえ、私はそうは言いません。宗教と知性に分け、知性に思想があると欧米人は思っている。しかし実際キリスト教を見ると、まず物質主義、個人主義という思想がありその思想の上に宗教があるという順になっている。事実あるものと、彼らが観念的に見ているものとは違う。それを指摘したのです。信仰の自由などと言いますが、キリスト教は日本民族に全然合わない宗教であると言ったのです▽

続いて岡先生と玉川大学の松岡君との間に次のような問答があった。

△さつき先生が、心理学の対象としての心が第一の心であつて——▽

△心理学の対象としている心を第一の心とよぶと言つたんです▽

△私を入れなければならぬ心だとおっしゃいましたね▽

△私を入れなければ動かないと言つたんです▽

△意志を通さなくても出て来る心とか——▽

△意識と言つたんです▽

△意識を通さなくても出て来る心とか——▽

△心と言いやしません。意識を通さないでわかると言つたんです。何が言いたいのですか▽

△いや、第二の心の方は心理学の対象としては扱えないというようにお聞きしたのですが▽

△扱えないものにも、ほかに心はないのだろうかと言つたんです。悉く君の聞き違い。一度

ぼくの本を読んで下さい▽

先生の言葉は気迫がこもつて、息もつけないように鋭かった。満場の参加者は学問というものの厳肅さを眼前に示された気持で、寂として声一つなかつた。この真剣勝負のような一瞬は深く印象に残つた。松岡君が深く感動したことはいうまでもない。なお先生はこの講義を補うものとして講談社発行の「曙」「神々の花園」をあげられた。

宮中見聞談

木
下
道
雄



赤坂離宮の思い出

京都東山御文庫

皇室の御伝統

荒天下の分列式

鹿児島湾上の聖なる夜景

終戦後の陛下

皇居勤労奉仕の発端

国民に対する陛下の御期待

赤坂離宮の思い出

これから一時間半ばかり私が宮中で見聞したところをみなさんに聞いていただきたいと思ひます。私はもう年を取っておりますから、いつお別れするかわかりませんが、みなさんはお若いから、よく私の言うところに気を留めて聞いておいていただきたいと思ひます。

私は明治四十五年、大学を出ましてから岡山県庁で一年間警部をし、それから一年志願兵として京都の伏見の歩兵連隊で一年半の兵営生活。その後ふたたび岡山県にまいりまして、警部や郡長をやったりしましたが、大正六年に内閣書記官に転任、総理大臣官舎で七年間仕事をしておりました。そのあとで、只今の陛下が皇太子殿下として摂政の職務についておいでになった時代に、東宮職に転任を命ぜられまして、それからずっと昭和二十一年まで、宮内庁におつたのであります。

私が東宮侍従を拝命したのは三十七才の時で、当時皇太子殿下のお住いは赤坂離宮で、ちょうどその前年関東の大震災で、いままでお住いの霞ヶ関離宮が破壊されましたので、やむをえず赤坂離宮にお住いになったのであります。当時殿下のお側には、珍田東宮大夫、入江東宮侍従長、奈良東宮武官長、島津東宮女官長等のお年寄は別として若い者が十二、三人おりました。

た。東宮侍従が七名、侍医が四名、それから侍従武官が陸海各二名。侍従武官と申しますのは、陸海軍何万という将校の中から選ばれてきた将校たちでありますから、まことに優れた人々がおりました。

夜になりますと宿直をしなければならぬ。武官が一人侍従が一人、侍医が一人、これが宿直をいたします。すると、時々殿下が雑談の仲間入りをなさることがある。殿下がおいでになったからといって、別段四角張りもしませんでしたが、ただ、人の批評はしないこと、人の悪口は絶対にいわないこと、これは特に申し合わせて慎んでおりました。そのうちに私は、一つの疑問を心中に持つようになったことがある。それはどういふことかと申しますと、或は貴族或は大金持ちの家に生まれた子供で、小さい時からたくさんの召使いに囲まれて世話を受けて育ってきた人たちは、いかに聡明な人でも一つの通弊を持っている。どういふことかと申すと、自分の周囲にいる召使いたちのうち、「この者は自分のお気に入りだ。」「この者はどうもけむたい。この人間はどうもきらいだ。」というところが、顔色には出しませんが、どこなくそれが現われてくる。これはやむをえない人間の弱点と思えますが、殿下はいつも十二、三人の若者たちに囲まれておられながら、決して好き嫌いをなさらない。これはどういふわけだろうかというのが私の疑問であつたのであります。これは皇室のご伝統であらうか、それとも東郷元帥、乃木大将、杉浦重剛というような優れた人々のご教育のたまものであるか、

それが、私の解決のできなかつた問題であつたのであります。

京都東山御文庫

ところが、その秋、京都に殿下がおいでになる機会がありまして、仙洞御所と申す京都御所の中の一つの御殿に一週間お泊りになりました。京都御所の内には普通の民家の蔵と少しも変らない土蔵が数棟あります。そのうち皇室にとつて非常に大切なお蔵が一つある。名前は東山御文庫といい、歴代の天子様がたの、ご自筆のご日誌、お手紙類、その他、お歌をお書きになりました色紙とか短冊とかいうものがぎつしりつまっているお蔵であります。そういうお蔵でありますから、人に見せるわけにはいけません。しかし、内に保存してあるものが紙類でありますから、虫干しはしなければならぬので、毎年秋の非常に気候のいい時に東京から陛下の侍従がまいります、そのお蔵をあけて虫干しいたします。幸い殿下のご滞在がこの虫干しの期間であつたので、ある日のこと殿下は東山御文庫を拝見においでになりました。私も殿下のお供をしてそれを拝見することができましたが、多くの陳列品のうちの一つに、私の胸を非常に打つたお手紙がありました。そのお手紙は、明治天皇より三代前の光格天皇で、御先代の後桃園天皇が二十二才で崩御になりお子様がなかつたため、閑院宮家から僅か九才の兼仁親王が帝位につかせられた。これが光格天皇であります、この幼少の天子を御教育なされたのが御先

々代の女帝後桜町上皇さまであります。このお方がこの幼い天子さまを手塩にかけて、朝な夕なお育てになつたのであります。その光格天皇が二十九才の時に、この上皇様あてにお書きになつたお手紙がただいま東山御文庫に保存してあるわけで、全文を拝見する余裕はありませんでしたけれども、そのうち三行ばかり私の胸を非常に打つたお言葉が載っております。

「仰せの通、身に欲なく、天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候こと、人君たる者の第一の教へ云々」

というお言葉であります。「身に欲があつてはならぬ。ただ国民を大事に思え。」というご教訓を、この天子さまが、おばあさま格の後桜町上皇様から朝な夕なおきかされになつた。その光格天皇が二十九才のお年に「なるほど、おおせの通りでございます。」というお手紙であつたのであります。私はそのお手紙を拝見いたしました時に、本当に電氣にうたれるような気持ちになりました。

当時、大江戸城によつて天下を睥睨する徳川幕府全盛の時代にあつて、三十六峯のみねみねに包まれた静かなこの京洛の地、清くさやけき御所のうちに、人知れず寂かに、天下万民をのみ念とせらるる御精神が、脈々として皇統のうちに流れていた長い年月のあつたことを初めて知り、私はおのずから身の引き締るのを覚えた次第でありました。

その晩、京都市民が、久しぶりにおいでになつた皇太子さま歓迎のために、ちようちん行列

をいたしました。何万という京都市民が「万才」「万才」と唱えて殿下のお泊りの仙洞御所のご門前を通つて行く。殿下はちようちんを片手に、門の所にお立ちになりその「万才」の声に応たえておいでになり、私もお側に立つておりましたが、昼間東山御文庫を拝見して、私の感情が非常に昂ぶつていたのだと思いますが、涙が出て涙が出てしようがない。「お若い殿下がこの万才の声をなんと聞いておいでになるだろうか。」と思うと、涙がとまらない。この万才の声は、結局は歴代の天子様がたに対する京都市民の感謝の声ではないか。お若い殿下がいまこれに酔われてはならぬ、と思うと、私は本当にたまらない気持ちになつたのであります。

ちようちん行列がすんで、殿下はまた御殿にお帰りになりましたが、私は泣きぬれた顔を見られたくないので、明るい部屋にも出られず、薄暗い廊下で、ありあわせの巻紙を引きちぎつて、それに自分の思う所を遠慮なく鉛筆で書いておりました。そうしたら、私の雲隠れを心配して捜していた先輩の西園寺八郎氏が「君、そこで何をしているのか。」と聞きますから私は唯一言「これを殿下に」とその紙片を渡して宿屋に帰つてしまいました。寝ようと思はずけれども眠れない。「自分は奈良に正倉院という皇室の大事なお蔵のあることは知つておつたけれども、世にも稀な皇室の精神を伝えるお蔵がこの京都御所の中にあるとは少しも知らなかつた。従つて明治大帝以前の歴代の天子さまがたに対し、なんら感謝の念も起こさずにおつたことはまことにあいすまんことだつた」という自責の気持ちでよく眠れなかつたのであります。翌

朝また仙洞御所にまいりましたら、西園寺先輩が「君、殿下に鉛筆の走り書きなどを上げるものじゃないよ。」と新米侍従の私に教えてくれました。「だから、ぼくはあれを殿下に読んでさしあげたよ。」とまことにゆきとどいた親切なことをしてくれましたのであります。あとで殿下にお目にかかりましたら、たいそうまじめなお顔で、「昨晩はいいことを言ってくれてありがとう。」というおことばで、別段お叱りもなかつたのでありますが、私はそれ以来、この殿下の、ほかの人と違った御性格は、皇室のご伝統である、それに磨きをかけてさしあげたのが東郷、乃木、杉浦の諸公であるという確信を持つに至った次第であります。

皇室の御伝統

ここで、ひとつ、みなさまにお話したいことは、惜しくも既に物故された小泉信三氏のことです。小泉さんが、ただいまの皇太子殿下のご補導役を言いつけられた時に小泉さんは考えた。自分は慶応義塾の塾長として、青年教育には経験があるけれども、将来天子様におなりになるお方のご教育には全然経験がない。東郷元帥、乃木大将、杉浦重剛といった経験のある人々は、みなもう亡くなられた。たった一人の御経験者即ち今の陛下にお目にかかつてお話を聞かなければならない。まことにおそれ多いことだけれども、自分の職責が大事であるから陛下に伺おうというわけで、ある日のこと陛下に伺われた。

第一質問として、「陛下はものごとをご決定になる時にお一人のお考えでご決定になりますか、それとも、それぞれ担当の者の意見をお聞きになった上でご決定になりますか。」とお尋ねをしたところが、陛下は「決して自分一人では決定しない。必ず係りの者の意見を聞いて、その意見が合致したならば、それを自分の責任において採る」と、おおせになったそうであります。小泉さんはまことに感心して、「しからば、そういう態度を陛下がお採りになるというのは誰かお附きの者からお勧めした結果でありますか、それとも、陛下が昔の聖人君子の伝記等をお読みになった結果、そういうことをお考えつきになったのでありますか。」と言って伺われたところが、陛下はいともやすやすと「いや、そうではない。これは、わが家の伝統である」と簡単に、こう仰せになったそうであります。これを承って小泉さんは、「これなるかな、これなるかな」と感嘆したということです。陛下は決して御自分一人ではお決めにならない。そのかわり、決めたことは今度は自分が責任を負うということが陛下の一貫したご態度であると思います。

荒天下の分列式

荒天下の分列式というのは、昭和三年の十一月に陛下のご即位式が京都で行なわれた後、東京、二重橋前の広場で嵐の中で行われた奉祝行事でした。ご即位式が行なわれる一年位前から

宮内省に限らず、日本全国、このお目出たい奉祝会をどうやったらいいか研究準備にかかったわけでありますが、この頃から、われわれ側近に奉仕しております者たちは、どういうわけか陛下が沈うつになつておしまいになつたことに気がついた。何かものごとを考えておいでになつて、「快々として楽しまず」といったようなご態度が見えてきたのであります。私どもは心配いたしました、いろいろ互いに意見をかわしてみますけれども、どうも理由がわからない、なにかうつうつとしておいでになる。考えてみますと、絶えず陛下のお胸のうちにありますことは、日本民族の将来の運命如何ということでありますが、今、陛下は何を憂えておいでになるのだろうか。これはあとでわかつたことではありますが、第一次世界大戦後、パリの講和会議に於て、日本が主張いたしました「人種平等案」が、残念ながらヨーロッパ諸国の反対をうけまして通過しなかつた。これが陛下にとつては非常な打撃になつた。これに端を發し、大正十三年、アメリカで「排日法案」の実施、それに続いて、中国で「日貨排斥運動」「排日教育の奨励」。ジュネーブでは、日英米の間の海軍軍縮會議が決裂。なお近くは、蔣介石の軍隊と日本の軍隊とが山東省で衝突。更にまた満洲で張作霖將軍の爆死事件。そういうような、まことに面白からぬことが次から次へと起つてきた。陛下は、誰か有能な政治家が出てきて、日本の前途を切り開いてくれないかと待ちに待つておいでになつたのでありますけれども残念ながらそういう政治家が出てこない。そのうちに軍部が「もう政治家は頼むにたらん。自分たちがや

るよりほかしかたがないんだ」と決心をして立ち上がりました。国民はみんな手を叩き喜んでこの軍部のたち上りを迎えたというのが当時の有様でありました。それで、陛下は、「こうなつたからには必ず国難がくる。国難がきたならば自分は国民とともに喜び、ともに苦しもう。」というお考えを固められたのも、この頃と私どもは思っておるのであります。

そのお考えの現われとして、これから「荒天下の分列式」というお話をいたします。京都で即位の大礼が行なわれたあと、いずこも、こども、全国的に奉祝気分にあふれておりましていろいろな行事が行なわれました。そのうちの一つであります。東京府では府下の大学生、高等学校生、中学生並びに青年訓練所の男女学生及び在郷軍人等約五万を集めて、代々木練兵場で陛下をお迎えして分列式並びに女子の奉祝歌奉唱式をやろうという計画があつたのであります。ところがそれを伝え聞きました東京の周りの千葉、埼玉、神奈川、山梨の四県から、熱心な参加希望がありまして、参加人員は結局八万人にふくれあがつてしまいました。八万人の人を参加させて式をするということになると、東京にはさほどの宿屋がありませんので、雨天順延ということはできない。どうしても、雨が降つてもやらなければならぬということになつてしまいました。代々木の練兵場は雨が降るとぬかるみでひどい所でありますので、とうとう二重橋前の広場でやるということになりました。八万人のうち七千名は奉祝歌奉唱の女子の部隊でありました。それで東京府は最後案として両陛下が十一月末東京へ還幸後、十二月十五日

午後二時より三時二十分まで、晴雨に拘らず二重橋前の広場で、東京、千葉、埼玉、山梨、神奈川の各府県の大学、高等学校、中学校及び青年訓練所の男女学生及び在郷軍人合計八万名の分列式及び奉祝歌奉唱式を行うことに決定しこの式に陛下の御臨席をお願いしてきました。東京府からこの申込みがありましたときに、宮内省では会議を開きましたが、相当の反対者があつたのであります。「十二月十五日といえども冬である。陛下に一時間二十分もの間、野外にお立ち願うということはいかかであろうか。特に即位式で疲れておいでになる時にさようなことはやめたほうがいいのではないか。」という意見もあつたのでありますが、一木宮内大臣は事いやしくも陛下の御行動に関することであるから陛下の思召を伺がわなければならぬと考えられ、私が侍従職からこの会議に出席しておつたので、陛下のお考えを承つてくれとの指示がありました。それで、私は陛下のお部屋にまいり、式の次第をご説明して、「いかがいたしましうか。」とお尋ねしましたところ、「十二月十五日」という日をお聞きになつて、陛下はしばらく考えておいでになりました。と申すのは、十二月十五日という日は、夜、宮中の賢所かしこどころで、毎年、み神楽かぐらの儀というお儀式がある日でありまして、陛下のおやすみになりますのはどうしても夜中の十二時を過ぎる日なのであります。陛下はそのことをお考えになりました。「その儀式にさしつかえがおこらないならば、あとは全部それでよろしい。」というお話でありました。その時に陛下が特に私に仰せになつたことは、「もし雨が降つたならば、学生たち

には雨具をつけさせるようにしてくれ。遠慮して雨具をとるといふことのないようにしてくれ。」それから「自分の立つ所には、いかに雨が降っても天幕を張ってはならない。」というお言いつけでありました。「雨が降ったならばご自分も外套を着、学生にも外套を着せて分列式をやらう。」こういうお考えであつたものと私は思います。

右のように陛下のお許しを得ましたので、宮内省から東京府に同意の旨を答え、私は宮内省側の主任を命ぜられ東京府と協力して式の準備にとりかかりました。

そして、いよいよ十二月十四日の夜、私は家に帰つて寝たのでありますが、どうも天気予報がよくない。十五日の朝早く、果然豪雨の音で私は目を覚ましました。近年まれな大雨で、しかも、西北の猛烈に寒い風が吹きつけまして、雨戸も開けられないような嵐になつてしまつたのであります。私は大変だ、と思つてすぐ二重橋前に行つてみました。すると、驚いたことには、陛下のお立ちになる玉座の上には、きれいな菊花ご紋章のついた立派な天幕がひと張り張つてある。「なんたることをしてくれたか。」と腹も立ちましたが、さすがにこの大雨では係りの者も張らずにおけなかつたらうと思いかえして、こごとも申さず、そのまま侍従職へまいりました。あまり雨が降り続きますので心配になり、十時頃、私は楠木正成の銅像付近を見廻つてみました。ここは女子の部隊七千名の集会地点になつていたからです。見ると、昨晚郷里から汽車できた人たちでありましょう、傘を持たない人がたくさんいる。雨宿りする所もなく、

新聞や風呂敷を頭にのせて、立ちながら早昼を食べている有様でした。私は侍従職に帰つて、陛下にこの有様を申し上げたのでありますが、十一時半頃になりました、宮内大臣と宮内次官が珍田侍従長の部屋に来られ、私を呼ばれたので行つてみると、「この大雨に式をやるのか」という大臣からの質問です。晴雨にかかわらずやるということは決つておりますから、「やりません」という答をしましたところが、「陛下のお立ちになる所に天幕は張つてあるだろうね。」と大臣から念を押されたのです。私は、不本意ながら、今朝張つてあるのを見てきておりますから「張つてあります。」と答えましたところが、大臣は重ねて「陛下は天幕の中におはいりになるだろうか。」と心配そうに聞かれる。それで私は「多分おはいりにならないと思います。」と本当のことを答えました。すると、大臣は非常に心配されて「この大雨に陛下がお濡れになるようなことがあつてはならない。これから陛下のお部屋に行つて自分が申し上げてくるから。」といわれ、出ていかれる時に、「防水マントのご用意はしてあるか。」とまた聞かれますから、「防水マントのご用意はしてあります。」と答えました。陛下のお部屋で大臣がどういふ問答をなすつたかは、あとで承わつたのでありますが、大臣は陛下に、「きょうはかような大雨でございますから、どうか天幕の中にお立ちを願います。」と、再三申し上げたのであります。陛下は常になく、「はいらん。」と仰せになる。それで、大臣はしかたがないから、例を軍隊にとりまして、「一軍の司令官と申すものは、部下の兵隊たちが敵の弾のくる所に立つからと

言つて、自身も第一線に立つものではございません。はるか後方で全軍を指揮するのがその大切な任務であります。陛下もおかけがえのないお体で、たとえ青年たちが雨に濡れるからと申して、お濡れになるのは間違つております。どうか、天幕の中にお立ちを願います。」と申し上げたのでありますが、陛下はお聞き入れにならない。「司令官でも時と場合によつては第一線に立つことがあるんだ。きょうはそのつもりでおるから天幕は取れ。」との強いお言葉で、さすがの大臣ももう申し上げる言葉がなく、「しからば防水マントはご着用を願います。」と申し上げたところが、「防水マントは着よう。」ということ、大臣は帰つてこられ、私に「天幕はとるように。」ということでありました。午後一時頃、私は係の者を連れて現場へ来て、天幕をはずしにかかったのでありますが、もうその時には、陛下とご一緒に式を見るために招かれた人々——外国大使を初め総理大臣以下各大臣、元帥、大将、貴衆兩院議長、議員といったような人たちで、もう陪観席は六分どおりうまつておりました。その面前で私どもが天幕を外しにかつたものでありますから、みな驚いたらしく、何故にこの大雨の中で天幕をはずすのか、式が中止になるのか、場所の変更か、いろいろな疑問が起つたとみえ、数々の人が私の立つている所までわざわざ質問に出てこられました。それで私は、「陛下の思し召しによつて天幕を外しております。」と答えていたのでありますが、そのうちに陸軍の仮設の天幕から若い将校が、一人やつてきました。(陸軍省は東京府知事の依頼に応じ今村中佐以下数名の将校

を派遣して式の運行を助けていました。もう朝からの活動でずぶ濡れになっていましたが、「何故に天幕を外すか。」という同じ質問でしたので、私は同じような答をしたわけであり、その将校は非常に感激の顔いろで「ああそうでしたか。」と言って、帰るやいなや、陸軍の本部から数名の伝騎を派遣して、皇居の周辺で式の開始を待っている八万の学生たちに、「ただいま天皇陛下下の思し召しによつて玉座の天幕は取り外されました。」と触れて歩いたのであります。この伝令の言葉を若い人たちが何と聴いたか、当時、約四万の学生の武装部隊が大手門の前から九段下にかけて、あのコンクリートの道路の上に、朝早くから立たされ、雨に打たれ、風に吹かれて、時の来るのをまつていたのであります。眠む気は出る、体は濡れに濡れて、腹はへる、不平だらだらのももたくさんおつたと思いますが、そこに今の伝令の声。これを聴くや、熱血胸にあふれきて、彼らは大雨の中で外套を脱いでしまった。「陛下が天幕をお取りになるなら、われわれは外套を脱ごう。」みんな脱ぐには脱いたが、外套をまた巻いて背囊につける場所の余裕がない。分列式の時に外套を左わきにかかえ、右肩に銃をかついだ異様な姿の青年たちはみんな元氣よく陛下のご前を通過していったのであります。私はあとでその人々の所感文を読ませてもらいましたが、そのうちに、ある高等学校の生徒の書いたものに、「ご前を通過する時、自分の右に誰がいたか、左に誰がいたか、戦友の記憶もない。軍楽隊の軍楽もきこえなかつた。ただ陛下と自分しか意識しなかつた。陛下のお姿はよく拝めただけ

れども、自分の目が涙で、お顔はしかと拝見できなかった。」
本当に感激深い分列式になつてしまつたのであります。

私は二時少し前に、陛下の防水マントを持つた侍従と二人で、二重橋前の玉座のところに先着して、陛下のご到着をお待ちいたしました。陛下は二重橋の正門から自動車で現場までおいでになりました。自動車からお降りになつた時に、侍従がおうしろからマントをおかけした。陛下はそのマントのホックをおかけになりながら、二、三步砂地をふんで四段ばかりの階段をお登りになつて、壇上にお立ちになつたが、なんとお考えになつたか、壇上にお立ちになるやいなや、またそのマントをうしろにパツと脱ぎ捨てておしまいになつた。ちようど壇の下には侍従武官長の奈良大將が立つておられたので、それをうけ止めはいたしましたけれども、重ねてまたマントを陛下にお着せする訳にはいかなかつた。と申しますのは、お立ちになるやいなや、君が代の軍樂、全員捧げ銃で、式場は一瞬にして、厳肅な空気に包まれてしまつたからであります。それから一時間二十分の間、陛下はマントなしでお立ちになつた次第でありました。

私は、式が済んで御殿にお帰りになつた後で陛下に、「なぜあの時マントをお取りになりましたか。」と伺つてみたところ、「みんなが着ておらんから。」と仰せになりました。分列式の話が始まつた夏の頃から陛下は、雨が降つたならば学生たちには外套を着せ、自分もマントを

着るおつもりでおいでになったのでありますが、壇上にお立ちになると、学生たちがみな外套を着ておらぬことをちらつとご覧になったものですから、それならば自分も、といってマントをお捨てになったのだらうと私は思います。私はその時に、「陛下は国民と苦楽をともしするご決心だな。」ということをつくづくと感じた次第であつたのであります。

鹿兒島湾上の聖なる夜景

これは昭和六年のことであります。昭和六年の十一月熊本地方で陸軍の特別大演習が行なわれました。大臣官房総務課長として、私はお伴をしてまいりました。大演習終了後、陛下は鹿兒島においでになり、鹿兒島から軍艦榛名にお乗りになつて、太平洋を横須賀にお帰りになつたのですが、榛名にお乗りになつたのは十一月十九日の午後でありました。陛下の軍艦の中のご生活は、非常に朗らかでご自由であります。陸上では、警衛、警戒が厳重であります。軍艦に一步お乗りになりますと、一切の警衛とか警戒とかいうものはありません。みな信頼すべき若者たちばかりでありますから、陛下はお一人で、群がる水兵の中を割つておはいりになる。肩と肩との触れ合いのうちに「われ国民とともにあり。」というご気分が一番出る時がこの軍艦の上のご生活であります。

日没と同時に駆逐艦四隻を伴なつて榛名は鹿兒島湾を南下してまいりました。ちようど六時

が軍艦の夕食の時刻でありましたので、私どもは士官室で食事に取りかかりました。陛下は艦尾の司令長官室でお一人でお食事をしておいでになりました。私は食事の最中に、ふと昔のことを思い出した。

それは、大正十四年のことですが、まだ皇太子のお時代に、殿下は軍艦長門で樺太においでになったことがある。ある日のこと、樺太の大泊から西海岸の本斗、真岡の方へ回航なさる時に、カイバ島という絶海の孤島にひと晩軍艦が宿りをする事になっておりました。当日は風も強く、波も高かったので、風の当らない波の静かなカイバ島の島陰に宿りをするべく、速力を落として島を廻っておる時のできごとであります。私どもは、殿下を中心に甲板の上でカイバ島の景色を珍しくながめておりましたら、その時になにか波間に泣くような、叫ぶような声を聞きましたので、軍艦の明りに照らされている所を見ますと、一隻の小舟が日の丸の旗を舳先に立てて、六人の男が營々と漕いでおる。とも櫂を握って指揮をしておるのは、六、七十の老人のようでありましたが紋付羽織袴で、山高帽を右手にふりあげて何か叫んでいる。何を叫んでいるか風が強いため聞き取れませんでしたけれども、うれし泣きに泣いていることだけはよくわかりました。このカイバ島は一〇〇人ばかりの日本の漁師が夏場漁業の根拠地にしておる島でありまして、殿下のお船が今夜カイバ島の島陰で宿りをするということはみんなよく知っていたので、おそらく全員船を出してお迎えに来ておったと思うのでありますが、波

風荒れ狂う中で一隻の船がやつと軍艦の姿をみつめて、少しでもお側によろうと營々とこいでおったのであります。軍艦の上からは、われわれハンカチや帽子をふつてあいさつはいたしましたけれども、なにぶん速力が違いますので一瞬の間に別れてしまいました。

そのことをふと私は食事中に想い出して、「ここも波の静かな鹿児島湾であるから、どこから船がこないとも限らない。今は陛下はお食事中であろうし、われわれも全部食堂に降りてきて、後甲板には誰もいないだろう。これではあいすまんことになる。」と思つたものですから私は少し早く食事を終えて、後甲板に駆け登つてみたのであります。後甲板は夜は電灯がたった一つついているだけで、まことに薄暗い所でありましたが、誰もいないとばかり思つていたところが、右舷のところに誰か一人うしろ向きに立つてゐる姿が見える。近づいてよく見るとあにはからんや、陛下がたったお一人で、望遠鏡から手を離して、なにものかに挙手のごあいさつをしておいでになつたのであります。私は「これは船が下に來てゐるな。」と思つて私も右舷の所にかけて寄つて下をのぞいてみました。が、船らしいものはいつこうに見えない。「はてな、何か望遠鏡でご覧になつたのかな。」と思つて、はたの望遠鏡に目をあてて見たのでありますけれども、明るい所から急に暗い所へ出ますと目がなれておりませんので、なかなか見えません。じつと我慢して目を当てておりましたら、そのうちにだんだんと鹿児島半島の山々のアウトラインが見え出しました。そのうちに陸の色と海の色との別がつくようになり、海岸線一

帯に何か赤い紐のようなものが何十キロとなく続いているのが眼にとまりました。「はてな、なんだろうか。」と思つて見ておりましたら、今度はその赤い紐の少し上の小高い所に何百メートルおきかに点々とかがり火が見えてきたのであります。私はその時わかつたのであります。鹿兒島半島の沿岸に住む人々が、「今頃は陛下のお船が自分たちの村の沖合いを通過する時刻だ。」と思ひ、老いも若きも、ちようちんか、たいまつを持って海岸に立ち並び、また、若者たちは山々に登つてかがり火をたいて、はるかに陛下をお見送りしたのであります。陛下はその有様を望遠鏡で発見なさいまして、たつたお一人、誰もおらぬ暗い甲板の上から手をあげてそのあかりに対してごあいさつをしておいになつた。そのおうしろ姿を私が偶然発見した次第であつたのであります。私は本当に、「これが日本の姿だな。」と思ひました。

その時、私は一つ思い出したことがあります。私がかつて読みました本で、大審院（今の最高裁判所）の判事をしておつた三宅正太郎君が書いた本に、「宮城前」という一篇があります。どういふことが書いてあるかと申しますと、三宅君が若い時ドイツに留学しておりました時に、懇意になつたドイツの判事が、東洋見物の途中日本に来て三宅君を訪ねた。一日、三宅君は彼を案内して東京見物に出かけた。まず第一に二重橋前に行つたところが、ちようど日支事変勃発の時でありましたので、動員令をうけた若者たちが自分の連隊に馳せ参ずるに先立ち、三々五々二重橋前にきて陛下に蔭ながらお別れを申し上げておる風景にぶつかつたのでありま

す。ある群れは楽隊を伴ない、ある群れはのぼりを立て、二重橋前はにぎわつておる。二人は飽かず珍しいこの景色をながめておつたのでありますが、その時に東京駅の方から親子三人連れの人があるのが目にとまつた。年老いた父親と応召の兵士とその妹らしい三人、彼らは、東京駅にいま降りて、またどこかに旅立つていくのでありましょう。旅の荷物をもつたままでやつてきた。そして、遠慮がちに二重橋の所に近づき、荷物ははたに置いて、心からお祈りをしておる。その時に、ドイツの判事が、二重橋の上にある伏見やぐら（倉庫）をみあげながら、「カイゼルはいま、あのお城の窓からこちらを見ておいでになるのか」と三宅君に耳打ちした。その時、三宅君の頭にひらめいたのは、民衆を前にして獅子吼する、かの国の独裁者の姿であつた。ああしなければ国民の心をとらえることのできない国柄と、この日本の国柄とは違ふんだということをお三宅君は言おうと思つて、ただ「サイン」と言つただけで、ほかに何も言はずに、感極まつて、その場を立ち去りかねたという話であります。陛下のお姿が見えようが見えまいが、いまごろは自分たちの村の沖合いをご通過になる時だと思つて、みな総出でちよちんやたいまつを持つて海岸に立ち並んで、はるかに陛下をお見送りしているその灯火の景色をはるかに、みました時に、私は本当になんとも言われぬ気持ちになりました。

私は陛下のそのお姿を拝見した時に、「これはとても、あそこの山の上で火をたいている人たちにはなんにもわからないだろう。なんとか知らせてあげる工面はないだろうか。」と考え

無線電信を打とうかとも思ったのでありますけれども、打つてみたところで、あの人たちの耳にとどくのは、あしたの朝になってしまふ。まことに残念だと悶えたのであります。その時に一つの知恵が生まれて、私は艦長室へ走つて行つた。艦長にこの話をして「探照灯を全部つけて下さい。」と頼んだのであります。艦長も感激して、「すぐつけましよう。」と言うので、私は「お願いします。」といつたまますぐ後甲板に引き返してみましたところ、その時にはもうすでに六個の探照灯が左は大隅半島、右は薩摩半島の山や海岸一帯をなでまわしておりました。私は「あの陸地にいる人たちも喜んだことだろう。」と思つた次第でありました。

先年、私は鹿児島半島の温泉地指宿にまいつたことがある。指宿には九州大学の植物園がありますが、その園長さんが長いこと指宿においでの方と聞いたので、園長さんをお訪ねして、「あなたは昭和六年に指宿においででしたか。」と聞きましたら、「おりました。」とのことでした。「然らば、十一月十九日の夜、ちようちんを持って海岸にお立ちになりましたか」と聞きましたら、「立ちました。鹿児島県庁から予め注意があつて、当夜は月がないから、軍艦の姿は見えないだろうが、夜になると軍艦には灯火が一つずつつく。お召し艦の灯火が一つ、護衛の四隻の駆逐艦の灯火が四つ、合計五つの灯火が見えるはずだ。第一の灯火は先導の駆逐艦、第二の灯火がお召し艦のものと思へ、とだけ聞かされておつたので、第二の灯火に心をこめてお見送りをしていたところ、突然第二のあかりのところから探照灯が照らし出されて、み

んな歓声をあげ、光の中で手を取り合つてよろこんだ。」という話を聞きまして、私も心中非常にうれしかった次第であります。

終戦後の陛下

それから、私は十数年お側を離れておりましたが、昭和二十年の十月に再びお側にまいるようになりました。その当時、民間ではあらゆる統制が解除されたために、言論の自由が無鉄砲に行われ、「天皇責任論」ということに対してもまことに深刻な意見が発表された時代でありました。陛下は新聞をよくご覧になりますが、何故か、この「天皇責任論」についてはひとこともお触れにならない。話題がそちらに近づいてくると、話題をかえておしまいになる。どういうわけで陛下がその問題だけをお避けになるのか、私にはその理由がわからなかつたのです。と申すのは、私は昭和の初めに非常に深刻な一つの例にぶつかつておるのであります。それは、人の名譽に關しますから姓名は申しませんが、昭和の初めのある秋、私が侍従室に、少し遅くまで居残つておりましたら、内閣書記官が上奏箱をもつて、大急ぎでまいりまして、「この中には一刻を争う至急の総理大臣の上奏書がはいっているから、速やかに陛下のご裁可を仰ぐように取り計らつてもらいたい。」ということでした。私はすぐその箱をもらつて陛下のお部屋へまいり、陛下のお机の上の鍵を拝借してその箱を開けた。中から出てきたのは

ただ一通の書類でありましたが、「何某起訴処分事件、右謹で裁可を仰ぐ、年月日、内閣総理大臣何某印」という上奏紙の裏に、当時の司法（現在の法務）大臣の起訴理由書が数枚ついておりました。その当時、正三位勲一等というような身分の人が起訴をされます時には、陛下のお許しをなければ起訴ができなかつた時代でありますから、大至急そのお許しを得るための上奏書であつたのです。このことは当時新聞で既にやかましく言つておつた、ある有力なる政治家の汚職事件でありましたが、その政治家が非常に権力のある人でありましたので、はたして総理大臣が決心をして、その人を縛り上げる勇氣があるかということが、世の人の興味的であつたのであります。

それで私は少し痛快な気持ちになりました、「いよいよ総理大臣も決心されたか。」と思つて、それを陛下のお机の上へ上げました。汚職は陛下の最もお嫌いな問題であります。私は陛下がすぐ判をお押しになるだろうと思つて、それを陛下のお机の上へ上げたのであります。陛下はその書類を一見なさるやいなや、非常に「困つたなあ。」というようなご態度をお示しになりました。私はちよつと不審な気持ちでお側に立つてお待ちをしておりましたが、陛下は司法大臣の起訴理由書をくり返しくり返しくご覧になつて、なかなか判をおつきにならない。そのうちにだんだんと私も考え直してきました。自分は陛下より年が十才以上も上だ。上の男がいささかなりとも痛快味を覚えたということはなんと浅ましいはずかしかことか。陛下は人とお会いにな

つても、対立観というものを一切お持ちにならないお方であるから、汚職は最もお嫌いなことだけれども、汚職をした人を憎いとはお考えにならないらしい。ただ、汚職の行なわれる世の中をいとも悲しとごらんになっておいでなのではなからうか。私が只今いささかなりとも痛快味を覚えたということはなんとほずかしいことか、とだんだん考え直してまいりました。しばらくして、とうとう陛下は、裁可の判をお押しになった。これで起訴が決定したわけでありませぬ。私は、内閣書記官に早く渡そうと思ひまして、それをお呼びいただきました、また箱に入れ、鍵をかけて一歩お部屋を出ようといたしましたら、私をお呼び止めになりましたから、何か別のご用かと思つてお側にまいりましたところ、「結局、私が悪いんだよ。」と仰せになつて考えておいでになる。この時私は、本当になんとも言えない気持ちになりました。われわれの仲間の犯したあやまちが、どれくらい陛下にご心配をかけるのかと思つておりましたら、つと立つて縁側にお出になりましたから、私もだまつて縁側に出ました。この縁側はもう焼けてありませんが、明治神宮の絵画館の「教育勅語下賜の図」という大きな油絵に出てくる二階建てのご学問所という所の二階の縁側であります。ちょうど、秋の非常に晴れた日で、夕日がお庭の松に照り添つておりましたが、天を仰いで、「結局、私が悪いんだよ。どうすれば政治家の墮落が防げるであらうか。結局私の徳が足りないからこういうことになるのだ。どうすればいいと思うか。」とお尋ねになる。「どうすればいいか。」とお尋ねをうけましても、つい先刻、いささかなりとも

痛快味を覚えた私ごとき者になんと申し上げられましようか。本当に私はもう無言で、泣かばかりにして御前を退いてきたことがあるのであります。

そういう経験を持った私でありますから、戦後再び陛下のお側にいて、陛下がどのくらい思いを黙っておいでになるのか、よくわかるのであります。話題が「天皇責任論」に近づいてくると話題をかえておしまいになる。これはどうも私には疑問だったのであります。在職中はとうとう解決がつかないまままで退職したのであります。それから私は、昭和二十五年以来十数年、皇居外苑の整備にかかつておる者であります。昭和三十年の九月十四日、なげなく外苑の事務所で読売新聞をひらいてみた。すると、その第二面に大きな見出しで、「天皇陛下を讃えるマッカーサー元帥」という重光外務大臣の寄稿文が載っております。それを読んだ時に、私は本當にうれしくて、うれしくて堪らなかつたのであります。何が書いてあつたかと申しますと、重光さんが八月に、用務を帯びて米國に赴くことになり、出発に先立ち、陛下にお暇乞いに那須のご用邸にあがつた。陛下が重光さんに仰せになるには、「あなたがアメリカに行くならば、マッカーサー元帥に会う機会もあるだろう。もしも会つたならば、自分は元帥の好意に対しては非常に感謝をしておるし、常に健康を祈っているから、よろしく伝えてもらいたい」との御伝言があつたのであります。そこで重光さんは、九月二日、ニューヨークで加瀬国連大使を伴つて、ホテル・アストリアにマッカーサー元帥を訪問し、陛下のご伝言を

伝えた。すると、マッカーサーは非常に喜んで、「自分は日本の天皇陛下のご伝言を何よりもうれしく思います。」といつて次のような話をしてくれた。

昭和二十年九月二十七日、陛下ははじめてマッカーサーをアメリカ大使館に訪ねられた。これが陛下とマッカーサーとの第一回のご会見であります。このご会見に先立ち、日本政府とアメリカ政府との間に嚴重な約束ができて、会話の内容は、絶対に秘密という約束のもとに行なわれたのであります。そういうわけで、マッカーサーは自分の部屋に幕僚一人おかない。たった一人で、陛下をお待ちした。陛下も、通訳一人のみを連れて、マッカーサーの部屋におはいりになつたわけです。マッカーサーは、初めに日本の天皇が自分を訪問に来られるということ聞いた時に、「これは命乞いに来るんだな」と思ったらしく、ご到着の当日、服装もかえず、お出迎えもしない。ところが、お帰りにはいともていねいに玄関先までお見送りをしておる。これは一体何を物語るのでありましょうか。マ元帥が重光さんに語つたところによりますとその時、陛下はマッカーサーに対して次のようにおっしゃつたのであります。

「このたびの戦役で日本の陸海軍司令官、その他の軍人および政治家が日本の名に於てなしたすべてのことは自分が全責任を負います。自分の運命について、あなたがいかようなる判断をなさろうともいっそうさしつかえないから、遠慮なくやつてもらいたい。全責任を自分が負うから」、こう陛下が仰せになつた時に、マッカーサーは本当におどろいたらしい。「数千年の

世界歴史の上で、民族の興亡はいくたびかあったけれども、いまだかつて、敗戦国の君主が国民をかばって生命を捨てるといふ人があったか。私は、ほんとうに驚いて興奮のあまり陛下に抱きついて、キスしようと思った。」と重光さんに話しておるのであります。重光さんもこの話は初めて聞いた。「自分はいやしくも日本の外務大臣でありながら、こういうことを知らなかった。それを敵の大将本人の口から聞くとはまことに驚いたことだ。これはぜひ日本人にも話さなければならぬ。」という気持から、当日、傍らで二人の会話の速記をしておりましたスクリップ・ハワード通信社の社長ロイ・ハワード氏の速記録をもらい、これを日本に持ち帰り、自分の記録と合わせて日本語に訳して、昭和三十年九月十四日の読売の朝刊に寄稿した。これが日本人向けの第一報となったのであります。何故にマッカーサーが固い約束を破つて、重光さんにこの話をしたかということは問題であります。マッカーサーとしては、自分の世界情勢判断と陛下に対する限らない思慕の情と親愛の念からこれを話したことと私は思います。すでにマッカーサー亡きいま、陛下は絶対に口を緘してひとこともお話しにならないであります。重光さんもまた他界した今日、このお話は日本歴史、否、世界歴史の上でまことに貴重な話になると思っております。

皇居勤勞奉仕の発端

今度は別のお話を一ついたしますが、戦に敗れて、日本人がもうほとんど全体として呆然自失した、昭和二十年十二月のある日のこと、仙台のもつと奥のほうの栗原郡という所から六十名ばかりの青年が皇居の坂下門外にまいりまして、二重橋附近の広場が大変荒れているから、掃除をさせてくれ、と言ってきたのです。その当時、東京の人は今日食べるお米があるかないかが一番心配な時代に、仙台のもつと奥の北の方から六十名もの青年が来てくれるということはないなとまあ珍しいことか。私はその人たちの顔が見たいと思ったものでありますから、総務課長の箕さんと二人で坂下門外に出てその人たちに会いました。その人々の年令は大体二十才から三十才ぐらいで、中に十七、八の娘さんが七、八人おりました。東京には炭も米もないということを聞いたからと言って、みんな炭・米を持ち、草刈り鎌を一丁ずつ持って「二重橋前の広場を掃除させてくれ。」と言うのです。私はその人々の話を聞いているうちにこちらこそ襟を正さざるをえなかつたのです。それで、私どもは申しました。「二重橋前を掃除して下さることもいいけれども、実は、外からは見えないが、皇居の中は宮殿も焼けてしまったが人手不足で片付けがまだできていないのです。どうか皇居の中へ入って、宮殿の焼あとを整理して下さらんか。」と申しましたところ、みんな大喜びで、三日間、宮殿の焼あとをきれいに整理

してくれたのであります。この青年たちの来ておることはすでに、兩陛下のお耳にも達しておりましたが、青年たちが仕事を始める十二月八日の朝、陛下から私に、「仕事にとりかかる前に、一同に会いたい。」との御言葉がありました。私も大喜びで、みんなに、「きょう十一時半頃、陛下がおいでになるから、そのつもりでいて下さい。」と申しておきました。お昼まえ僅か数人の者が陛下のお伴をして現場に向かったのでありますが、六十人の人たちは陛下のお姿を見たものですから、みんな集まってまいりました。そして、代表者が御前に進んで御挨拶を申上げた。陛下からは、「遠くから手助けに来てくれて、まことにありがとう。農作の具合はどうか、地下足袋は満足に手に入るか、肥料の配給は順当にいつているか、何が一番困っておるか。」など、かれこれ十分ばかりお話がありました。 「どうか国家再建のために働いてもらいたい。」というお言葉を最後としてお別れになったわけですが、約三十歩ばかり陛下がお歩きになった時に、思わず六十人の列の間からわき起つたのが、君が代であったのであります。六十人の人たちは、君が代を歌ってお見送り申し上げようと考えたのでありましたが、意外にも陛下は君が代の声をお聞きになって、お歩きにならない。じつと立って聞いておいでになる。六十人の人たちは、陛下のおみ足をお止めしてはあい濟まん、早く歌い終つてお帰りを願おうと思つたのでありますが、もう涙が先きで歌が続かない。ある人は手ぬぐいを出して顔を覆うものがある。本当に、誰もかれも悲しいひとときでありました。今から思えば、この悲

しさが何かしら力のこもった悲しみで、これが日本復興の原動力となつたのではないかと思う位であります。陛下はよほどお感じになつたものらしくて、お部屋にお帰りになるや、皇后様に「午後会いに行くように」というお話で、皇后様は午後、その青年たちに会いにおいでになりました。これが皇居の奉仕隊の始まりのお話であります。これから二十数年の間、いまでもこの奉仕隊は続いておりましてその数はすでに数十万に達しておると思ひます。

国民に対する陛下の御期待

時間がまいりましたので、急いでもう一つ、陛下のみなさまへのご希望だけはお伝えしておきたいと思ひます。

陛下のお話は、なにゆえに戦が始まつたかというところから始まるのでありますが、陛下は世論というものについていろいろお考えになつたらしく、いまの日本の世論というものはどうも力強くない。これを力強くするためには、どうしても国民の教養をもつと高めなければならぬ。それから信仰心を深めなければならぬ。陛下が仰せになる信仰心と申すのは、なにも仏教、キリスト教、神道等に限つたことではないのであります。ただ、そういう絶対のものを心に持つか持たないかというところに、人の力というものがわかるのだ。世論が弱いというのは、教養が足りなくて、信仰心が薄いからであらう。教養が高くなれば、物事を判断する力

が出てくるから、流言蜚語にまどわされるといふようなこともなくなるであらうし、それに、信仰心が強くなれば、一度信じたことは翻さないで貫くだけの力が出て、脅迫あるいは誘惑に打ち勝つだけの国民になつてくれるであらう。自分は自分の余生をこの二つの問題に注いでいきたいと思う、ということ仰せになつたことがありますから、それをみなさまにお伝えして、私のお話を終えたいと思います。

どうかお達者で、いつまでも日本をひきうけていつて下さいませ。お願いいたします。

（元侍従次長、財団法人皇居外苑保存協会理事長）

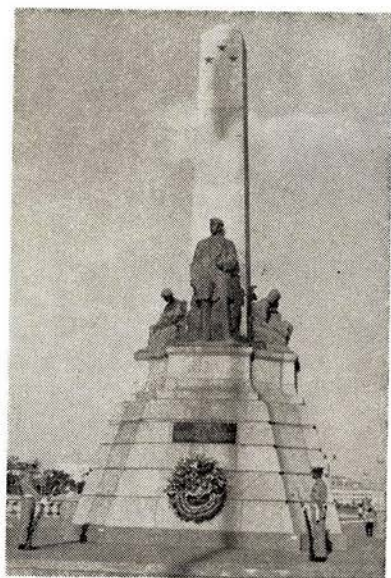
年
間
活
動
報
告

一年の歩み

——霧島合宿から阿蘇合宿まで——

東京大学経済学部三年

石村善悟



ホセ・リサル像
(マニラ・ルネタ公園)

全体生活への目覚め

輪読会・地区別小合宿

学園正常化への努力

東南アジア研修旅行

春季地区別合宿

第二次春季合宿から大合宿へ

全体生活への目覚め

霧島の大合宿から阿蘇大合宿へ、この一年間というもの、諸々の社会情勢は大きく激動した。このような中であつて大合宿に参加した我々の仲間はどこのように考え、どのように行動したであらうか。

昭和四十三年八月に行われた霧島大合宿、それは全学連各派の武装闘争が過激化の一途を辿り、東大、日大をはじめとする全国の大学では、過激派学生の手による不法な学園封鎖が連鎖反応の如く起こりつつある中で開催された。

彼らの所謂ゲバルトによる学問の場の破壊が大きな社会問題になるにつれて、様々な批判と攻撃が彼らに対してなされるようになったが、それにも拘らず彼らの行動がなお少なからぬ学生青年の共感を呼び、その渦が高校生の間にも広がらんとしているのは一体なに故であろうか。現在の教育全体が、生の意義と自己の生き方とを真剣に問う青年達に、全く答えてくれないということもあろう。或いは、青年らしい純粋なる正義感への共感ということもあろう。がしかし、何にもまして問題なのは、彼ら学生運動家のみならずほとんど全ての青年の心に宿る虚無感と孤独感とである。学生運動家の一人は言う。「私は死ねないから生きていただけだ。私が真の実存を感じるのはデモのスクラムを組み機動隊にぶつかっていく時だけだ。」と。又

或者は言う。「人間は決して他者を理解し得ることなどありはしない。あるのは欺瞞的な人間関係だけだ。」と。

我々の合宿とはまさにこのようなニヒリズムを克服し、他と共に生きているのだという日本人としての暖かな同胞感を実感し、その上に立って自己の生き方を学んでいこうとするものである。

「他と共に生きる」ということは単に言葉の問題ではない。それは実際の体験から感じとられるものである。国旗掲揚に始まる合宿の一日一日の日程は、団体生活を通じて我々にこの貴重な体験を与えてくれた。自分の思想生活の悩み苦しみを真剣にぶつける時、それに真摯な態度で応えてくれる友がいた、先輩がいた、先生がいた。そしてそれらの人達と語り合ううちにいつしか自分が孤立した個ではなく、より大きなものの中に包まれた存在であるということを実感していたのである。

それは学生運動家達の求めるイデオロギーによる連帯などという浅薄なものではない。イデオロギーを紐帯とする結びつきは、その成員が一旦イデオロギーの体系に疑問を抱くや、もろくもついえ去ってしまう。しかも様々なイデオロギー的党派が自己に固執して、血で血を洗うが如き相剋を繰り返している現状は、彼らのいう連帯というものが、それ自体国民的普遍的な連帯にまでは決してなり得ぬことを顕著に示すものであらう。

だが我々の実感し得た同胞感、連帯感というものは、同じ日本人として共に有する心と心の触れ合い、即ちお互いの真心を真剣に理解し合おうとする「付き合い」の中にあつたのである。「私はこれまで自分の考えと違ふ意見を聞くとすぐ反撥して、発言している相手の心を汲んでやろうとする心づかいが出来なかつた。今ではこのような自分がつまらなかつたと思われなければならない。これからは自分の信念や思想が正で、相手は悪であるというような考え方は改め、共に語り合つてゆきたいと思う。」という西南学院大学、久保山俊郎君の感想には、個我にとらわれた自己中心の世界を脱し、自分の心を尽くして相手の真心を汲みとろうとする同胞協力の世界へ踏み入らんとする一人の友の姿が如実にあらわされている。そしてこの思いはひとり久保山君のみならず、多くの参加者が一様に抱いたものであつた。

来年も又会おう——わずか五日間の付き合いであつたが、既に十年の知己の如くなり得た友と友。互いに声を掛けつつ我々は緑濃き山々に囲まれた合宿地と別れを告げたのである。

輪読会・地区別小合宿

我々は合宿で古典を読むことを学んだ。それは古人と我々との生の付き合なまいであるとともに古人が全身全霊を傾けて踏み行なつてきた道を、我々も又身を以つて辿らうとする努力でもあつた。

小賢しい批判や懷疑を断ち切つて、謙虚にしかも真剣に古人の心に取り組もうと心を整えた時、古人の心が我々の心に蘇ることを実感した。そして、この謙虚に人の心に取り組もうとする姿勢こそ、学問の基礎になければならぬとの痛感、それが以後の我々の学問の出発点となつたのである。

合宿終了後各大学に散つて行つた友等はそれぞれの地区で集い合い、古典の輪読を中心とする相互研鑽の場を持つに至つた。東京地区では在京学生の集まりである八日会（六年前発足）が吉田松陰先生の「講孟余話」を新しいテキストとして再スタートした。岡山大学、バルカノンの会では「日本思想の系譜（上）」、「代表的日本人（内村鑑三）」等の輪読会が進められ、会誌「バルカノン」が各地の友に送られた。又九州大学では「講孟余話」、鹿児島大学では「日本思想の系譜（上）」長崎大学信和会では「古事記のいのち」「日本思想の系譜」等、各大学各地毎の輪読会は、合宿参加の友を中心に新たな友を加えつつ地道に、しかし確実に展開されていつたのである。

このような輪読会と学内活動、それらを総括して、秋から春にかけてそれぞれの地区別大学別の合宿が持たれ、活動は更に新たな進展を示した。左にその一覧表をあげておく。

岡山バルカノンの会	十一月十六日～十七日	岡山市 児童会館
東京 八日会	十二月七日～八日	川崎市 自協学舎
富山 大信和会	十二月十四日～十六日	富山市 熊野神社
九大 信和会	S44年 三月三日～五日	太宰府 戒壇院
長崎 大信和会	四月十二日～十三日	長崎市 大音寺
早大 信和会	四月二十六日～二十七日	葉山朝日ビール寮
上智 大信和会	五月二十四日～二十六日	葉山朝日ビール寮
東大 信和会	六月十二日～十四日	葉山朝日ビール寮

紙数の関係でこれら全ての合宿の模様を伝えることはできないが、例えば鹿兒島大学社会科
 学研究会の合宿では、ともすれば理論の分析によつてのみ物事を考えていこうとしがちな学園
 にあつて、理論ではなく人の心に迫る学問姿勢の確立が如何に大切であるか、それを肌で感じ
 ることが合宿の主要テーマであつた。鹿兒島大学からの報告には次のようにある。「松木君は
 その『戦歿学生の手記に念ふ』と題する研究発表の中で『戦歿学生の手記は読むものにあらず
 して偲ぶものである。様々な想いのあつた戦歿学生の心をイデオロギー的取捨選択でもつて浮

かびあがらせようとする編纂者の立場には憤りを感じる』と述べた。歴史を観るといふことは自己を離れたところに何かを描くのではないのであつて、その時代時代を真摯に生き抜いた先人の心を偲ぶことであると深く考えさせられた。「忙しい間をさいてわざわざ参加して下さつた鹿児島大学教授川井修治先生は、我々の国防に対する態度が理論的アプローチの一点張りであることを指摘され『理論的方法とともに情緒的実践的方法が非常に大切であり、且つ又国防が無視され反動とされる時代にあつては、国防を論じ、考え、発言するには沈痛な心の響きが必要である』と述べられた。」

この合宿の成果は送られてきた和歌詠草に生き生きと感じとられる。紙数の都合で全てを載せることができぬのは残念であるが、ここに幾つかを拾つて記しておきたい。

不参加の福寿さんを思ひて

東 中 野 修

いかならんこと起りてか合宿に姿を見せぬ友しのぼるる

「戦歿学生の手記に思ふ」の研究発表を聞きて

父母を残して散りし先人のきびしき思ひに心打たるる

いつしらず心こもりて高まりゆく友らの声に鞭打たるる心地す

金 津 洋 雄

まっすぐにそそり立ちたる杉のごと直なる心を我ももちなむ
岩多き山道の辺につつましくうすむらさきのあざみ咲きたる

松木 昭

松木君の発表を思ひ出でつつ

川井修治先生

戦ひの場にはにたはれし先人の思ひをただに汲めと友言ふ

ことごとしきイデオロギーをからませて直き心をけがすなと言ふ
父母を故郷に残して立ち征でし二十年前のうつつに迫りく
ますらをのみ心つぎて日の本を護りて立たむ若き友らよ

学園正常化への努力

先にも述べた通り、前年からの学生運動の激化はこの年に入り学園紛争の形をとつて更に度を増していった。

学園紛争に巻き込まれた時、合宿教室において自己の人生観を探求してきた我々は、実際に具体的な生活の場で自己の生き方を問われることになったのである。それは単に「彼らのゲバルト」暴力は間違っているから反対である」といった類の結論でお茶をにごせる問いかけではない。それは、更に深く彼らの暴力の根底にある思想そのものに思いを馳せ、それに対し我々

の生き方考え方を直截にぶっつけていくことよつてのみ解決されるべき問題なのである、各地の大学に戻つて行つた多くの友らが、学園紛争が起こるやすぐにそれに対処すべく、それぞれの場合で実践活動に没入していつたのは、その自己の生き方を自らが真剣に問わんとするあらわれであつた。以下にそのいくつかを紹介しておきたい。

九ヶ月の長きにわたつて学園封鎖が続き全国の学園問題の発火点となつた東大では、私も含めこの合宿に参加した者達を中心として、合宿後直ちに学園正常化を目指すグループが結成された。(その活動の足跡については、「国民同胞」昭和四十三年十一月号、石村の文を参照していただきたい)我々は「学友諸君に告ぐ」というピラの中で、暴力はいけないという点のみにこだわつた皮相な全共闘批判しかなされぬ風潮にかんがみ、次の如く学友に訴えたのである。「彼らの理論の帰結として全学封鎖その他の暴力的行為は必然的に出てくるように思える。論理と行動とがわかち難く一致している以上、ただ単に『暴力が悪い』という批判は的はずれになるであらう。一時的にはそれでも意味があるかも知れぬが、根本的に彼らを批判する為にはもつと根源的に彼らの思想までさかのぼつて批判しなければならぬ。その為には彼らの思想を論理的に批判するだけでなく、自己の思想態度を徹しく確立していこうとする努力がなくてはならないだらう。この思想態度という点から見ると、全学共闘会議のみならず民青系の諸君にも共通して言えることだが、ある矛盾が存在するとそれをすべて社会の体制、制度機構

等のせいにしてしまい、自己の内部の問題として顧みようとしないという欠陥が指摘できる。」様々の矛盾の原因を自分の外部環境に帰し、自分の内部に厳しく問いかけようとしない劣弱な思想態度を彼ら学生運動家の中に読みとつた時、「社会を良くするにしても何にしても、まず自己の生き方に対する厳しい内省から出発しなければならぬ」とする合宿での学問姿勢が如何に大切であるかということが、我々にとつて真の実感となりえたのであつた。

一方、岡山大学でも一学生の逮捕問題をきっかけとして全学がバリケード封鎖されるという事態が持ち上がった。

合宿に参加した岡山大学の友等は、以前から讀書会を中心として活動してきたバルカノンを会を更に発展させ、紛争の早期解決を願う学友数名を加えて「ア・モンテ・ヴォックス」というパンフレットを発刊した。このパンフレットは第一集から第四集まで発行され更にタイプ印刷によるこれらの合冊版も出されるに至つた。

このパンフレットの中で彼ら岡山大学の諸君は「大学の自治とは何か」という、学園問題を考える上での根本問題の考察からまずスタートする。彼らは「自由主義であれ社会主義であれそれがドグマに墮落し絶対化されようとする時、その現われとして学問の自由は犯される危険にさらされる。大学はいかなる時もその内外よりのドグマ主義の圧力から守られ、そしてさらにすべてのドグマを破壊する為にこそ真理の探究に専念せねばならない。これこそが学問の自

由が必要とされねばならぬ根拠にほかならぬのである。大学の自治とは学問の自由をドグマから守るものであり、学問の自由は社会をドグマから守ろうとするものなのである。」そして、大学の自治は国家権力からの治外法権、というそれ自身ドグマに陥いつた左翼学生運動家の図式に真向から反論する。そしてその上に立つて「思想について」「学生の地位について」「大学改革について」「学問の根本問題について」、の独自の考察を総合的に行ない、全学の学友にその賛否を問うているのである。

しかも彼らの活動は単にこれらの諸考察のみに終始してはいない。新入生のオリエンテーションでは新入生一人一人にこのパンフレットを手渡し岡山大学の実情と紛争解決の為の努力を訴え、大学当局に対しては九項目からなる質問状を提示してその紛争に対する姿勢を問いただしました学生大会に於ては全共闘派学生の徹底的なつるし上げに遭いながらもスト解除の対案を提出したりしたのである。

彼らの努力がどれだけの効果をあげたか、それはあえて問われるべき問題ではない。大切なことは彼らが自分の身近に起こった異常な事態に対し、自己の全てを投げ出して取り組んでいったということである。自分に投げかけられた問題から逃避した所には真の生はない。彼らの努力は自己の人生に対する切実さを強く我々に感じさせてくれる。

同様の活動はそのほかの各大学で展開していった。大学がストに突入するや、自分の親しい

友からクラスの友へ、更に全学へとスト反対の署名運動を忍耐強く続けていった熊本大の友、学生大会に繰り返しスト反対の対案を提出してたたかってきた九州大の友、実際に自治会の委員長ポストを勝ち取った長崎大、大分大の友、更の上智大、鹿児島大、西南大、富山大等の紛争正常化への努力等、形の違いこそあれ、思想と思想の対立の中で様々な困難に遭いつつも、友らは自己の生き方をくりかえし問い返しながら戦いを進めて行ったのである。

東南アジア研修旅行

昭和四十一年、二年の兩年度に、国民文化研究会によつて、日韓学生交流の目的によつて、学生が韓国に派遣されたのに続き、昭和四十三年度は、国文研理事田中敬一氏の御援助により、同氏の所有される貨客船春光丸（船長は国文研理事加藤敏治氏の御令弟加藤友三郎氏）にて、東南アジア研修旅行が実施された。

将来の日本の発展方向たる東南アジアの実状を見聞し、日本の将来に思いをはせ、また長期間船中にて起居を共にするのを利用して、言わば、合宿研修旅行であつた。

積荷の關係で二度三度と出発が延期され、全員が出港地神戸に集合したのは、年の瀬も押し迫つた十二月二十七日であつた。大倉山海員會館で、後述の学生リーダーの合宿と、海外へ旅立つ者の準備合宿が並行して行なわれた。十二月三十日、神戸港兵庫埠頭を一路香港へと、春

光丸は出港した。一行は次の十名である。

団長 川井修治（国文研副理事長・鹿大教授） 副団長 行武潔（九大農学部大学院） 学生団員 永井幸男（熊大・教四） 松木昭（鹿大・法三） 佐藤健治（長大・経四） 小野吉宣（西南大・文三） 広瀬清治（早大・文三） 豊島典雄（明大・商三） 田中輝和（岡大・医二） 北川文雄（一橋大・商二）

日程は次の通りであつた。

一月一日 沖繩本島南方沖にて大東亞戦争にて、沖繩の海に陸に散華された英霊に対する追悼式を挙行

一月四日 香港着、香港島見学

一月五日 九竜、新界、及び勸馬州の中共国境見学、中文大日本人留學生と懇談

一月九日 マニラ湾周辺にて散華された英霊に対する追悼式。マニラ港着。上陸、日本文化情報センターにて黒田瑞夫駐比公使と面会。フィリピン事情を聞く。マニラ市内見学

一月十日 フィリピン大学の學生と懇談会。

一月十一日 アテネオ大青沼教授、熊田外交官を囲んで懇談。

一月十三日 スリガオ海峡にて追悼式挙行。ミンダナオ島ブアン着。

一月十四日 ブアン上陸、市内見学。

一月十九日 ミンダナオ島ダグリ着。上陸後、ダバオ市内に宿泊す。

一月二十日 ミンダナオ大学にて学生と懇談。市内見学。

一月二十三日 ミンダナオ島マナイ着。上陸後、村落を見学。

一月二十四日 マナイ出港一路日本へ。

一月二十九日 岩国港着。

一月三十日 岩国上陸後、開散式。

一ヶ月の長期に亘る旅行であったが、右に記した日程は、その概略である。なお、国民文化研究会より、この研修旅行の詳細なレポートが「青年、学生研修旅行団レポート―香港、マニラ、ミンダナオ巡訪と船内研修合宿―」として出版されているので、ここでは特に旅行中、印象に残ったことを書き記すにとどめる。

我々が航海したあたりは、大東亜戦争における激戦海域であったので、特に日程にもあるように三度にわたる、戦歿慰霊の追悼式を行った。直接に戦争を知らぬ我々であったが、海中に清酒を注ぐ時「我ら今なをここを守る」というような声を聞く思いがし、身が引き締るのを感じた。

せつせつと思ひこめたる師の御声聞く我が胸に熱き思ひ湧く



中 共 国 境 ・ 勒 馬 州 (ロクマオチュー)

この海に御国守らむとたふれたる先人の思ひ
継ぎ行かむ我ら

豊 島 団 員

我々の最初の訪問地は香港であった。街は賑やかで、日本の繁華街とそう変わらぬ様子であったが、ビルの屋上の「中国共産党万歳」「毛沢東主席万歳」と赤く大書された看板やショウウィンドウの毛一家の写真に、中共の無気味な圧力を感じた。しかし、英国国王の直轄植民地であり、中国大陸で唯一の自由世界へ開かれた窓という歴史的地理的な蔽しい現実に、住民はまるで目を塞いだごとく無関心である。我々には、日々の生活に追われてあくせくと立ち働く姿しか目に映らなかつた。

小野団員は「支那人は、古今王朝が代わるたびに乱世となり国民は塗炭の苦しみをなめさせられ

もう誰が支配しようがかまわずに、自分の生活だけを守ろうとする不幸から生まれた智恵を持つている。日本のように国民が敬慕の共感を寄せることのできる皇室を中心の一つにまとまつているのは非常に幸せである。しかし、戦後日本もアメリカの占領政策で大半の者がマイホーム生活に耽り、国家を忘れ民族の中核たる天皇と国民とが分断された不幸な事態に無頓着になつてゐる。このままでは香港のように不幸を味わうことになるに違いない。」と、その感想を記しているが、これは我々団員皆同じ思いであつた。

フィリピンで我々が驚いたのは、彼ら国民の内に国家という觀念が非常に薄いことである。無数の島々から成り立ち、また八十余もある人種、言語のせいだとも言えるが、最大の問題は彼らが民族の確たる歴史を有しないことではないかと思う。言い過ぎかもしれぬが、存在する歴史はスペイン征服以後の植民地の歴史であり、それ以前の民族固有の歴史は征服者に抹殺されたのである。フィリピン大学やYMCAで同世代の若者と話す機会を持ちえたが、我々の質問に対して、彼らの口から民族の確信、誇りたるべきものについて何ら明確な答を聞き出しえなかつた。いたる所で、「独立の英雄ホセ・リサル」の銅像を見かけたが、彼とても国民の内に広く信奉されているふうでもなかつた。新しい国にもかかわらず、さほど建設の息吹も感じられず、恵まれた自然の中で、一日を楽しく過してさえいけばいいと願つてゐるとしか思われなかつた。

我々は毎朝、明治天皇の御製を拝誦し、徳富蘇峯翁の「国史より観たる皇室」を輪読してきた。その中に「皇室は日本の一大求心力である。皇室を我々は親と思い、皇室は国民を子と思ひ、上と下とが互いに相手を思いやりながらやってきた。」とあるが、真に国に中心と仰ぐべきものを有する日本のありがたさを異国の地でしみじみと味わった。歴史とは史実の記述ではなく、その国のまた国民の生き方ではないかと思う。我々は二千有余年、皇室を中心に仰いで連綿と続いてきた日本の歴史がある。我々は日本語でしか考えることが出来ず、その考えを正確に他人に伝えることが出来ないと同様、連綿として続いてきた歴史の流れの内では日本人の生きてゆくべき道はないと、この旅行で実感した。

日の本の国の命はいにしへゆ絶ゆることなく続きをるなり
いにしへゆ続きたりし日の本に生を享けしを貴しと思ふ
益良夫の守り固めし日の本を力合わせて守りて行かむ

松木 団員

(この項―一ツ橋大・北川文雄記)

春季地区別合宿

十二月に入り、我々はいよいよ昭和四十四年度の大合宿に向けてその歩を踏み出した。その第一歩として、各地のリーダー松木昭(鹿児島大学)志賀健一郎(九州大学)田中輝和(岡山

大学）石村善悟（東京大学）の四名、及びそれを補佐する東京正大寮の三名（上智大・津下有道、早大・斉藤実、広瀬清治）は、十二月二十五日と二十七日の三日間前項に述べた東南アジア派遣団の見送りを兼ねて、神戸大倉山海員会館に参集し、以後の活動計画を具体的に検討した。

この検討の結果、全国を三つのブロック（関東地区、関西地区、九州地区）に分け、それぞれのブロックで三月中旬までに幹部合宿を行ない、その後、この検討に加わったリーダー四名補佐三名及び東南アジア派遣団員を加えた第二次春季合宿を東京で行なう旨が決定された。

まず年が明けて昭和四十四年二月初めに春季合宿参加を訴える全国統一檄文及び各地区毎の檄文が、日頃各大学各地区の中心となつて活動している全国の友約九十名に発送された。それに応じて参加の意を表してきた者は、関東地区十五名、関西地区十三名、九州地区二十二名、計五十名であった。以下それぞれの合宿の模様を記すことにする。

△関東地区▽

期 日 三月十一日～三月十五日

場 所 善行会青年の家、銚子屏風ヶ浦センター

参加学生の所属大学は玉川大、東大、法政大、明治大、一橋大、早稲田大、上智大、亜細亜大、ほかに国民文化研究会国武忠彦先生。

太平洋を眼下に望む銚子屏風ヶ浦、海から吹きつける寒風の中を集いきた友は十五名であ

る。十一日午後二時、開会式に引き続きただちに日程に入った。

この合宿五日間の主旋律となつたのは、国民文化研究会の先生方そして先輩方が常に座右に置き、自己の生きる指針として熟読玩味してこられた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読、及び荒れ狂う学園紛争の中で我々は如何に自己の学問姿勢を整えていったら良いのかという問題への取り組みであつた。

太子の御本の輪読は四日目を除き都合四回行なわれた。第一日目冒頭の輪読ではまだ一人一人のこの書物に取り組む姿勢に切実さが欠けている感がなきにしもあらずであつたが、二日目朝の爽やかな気分の中でこの書に向かうと「国家重大の転機に国民生活の運命を荷はせ給ひ」「時代の痛苦濁乱を啗に客観視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ全体生活の開導教化を念じて求道精進し給ふた」太子の御心と、そしてその御心を自らのものとして憶念されようとする著者黒上先生の熱烈真摯なる御心持とが、次第に我々の心に切実なものとして響いてくるようになつた。そして三日目の夜、我々の合宿の為にわざわざ東京から駆けつけて下さつた小田村先生がこの書を読むに際し「釈尊はこの世の中に生きてゐる最後の一人が救われるまで自分は成仏しないとされた。それ故釈尊の人生は痛苦に満ちており、それを聖徳太子が仰ぎ奉られたのである。太子の仏典解釈が大陸諸師の観念的解釈にあらずして体験的であつた所以である。黒上先生の太子に取り組まれた態度もまたしかりである。以上をよく考えてこの本に取

り組む姿勢を定める様に。」とお示しになられ、それによってこの書は一段と我々の身近なものとなり得たのであった、最終日の輪読で「制度政策の一切は之を統御する『人』に帰着することを明かし給ひ」とあるに対し「大学問題を言う場合、制度機構の改革が問題にされがちであるが、それ以前に、学問するということが、如何に生きるかということ、我々一人一人が自分自身に問い返してみる必要があるのではないか」という意見が出されるようになったのもその現われと言えよう。

学園紛争と自己の学問姿勢の問題は、石村の研究発表「東大確認書の諸問題」によってなされた。「大学の教官が教えるものとしての自信と信念を失ってしまった一方、学生は自分が学問することの意味を真剣に問うてみようと思わず、いたずらに権利と制度機構の革新のみを主張するようになってしまった所に、学園問題の大きな原因があるのでないか。」という指摘からスタートした。大学で学ぶテクノロジーと自己の生き方の分裂に悩む者、合宿での感激が学園生活の中にまで生きて来ないと訴える者等、前後四回にわたる全体討論は、話される内容が各人のもつとも身近な問題だけに、真剣な、時には苦しいまでの意見交換の場となった。

そのほか、二度の和歌相互批評、岡潔先生の御本の輪読、東南アジア旅行報告、北崎、北川両君の研究発表等を織り込んだ日程は、最終日が近づくにつれ次第に盛り上りを見せ、最後の夜の、夏季合宿を目指しての具体的な活動討議に至って、皆の心は積極的に大合宿へ向けられた

のである。

△関西地区▽

期 日 三月十四日～三月十八日

場 所 岡山県笠岡青年の家

参加学生の所属大学Ⅱ富山大、皇学館大、神戸大、岡山大、

総勢十三名、他の地区に較べ数こそ少いがそれだけに互いに身近に接し合えるまとまりのある合宿だったと言える。しかもそのまとまりは決してなれ合いではなく、各人納得の行かない点は徹底的に討論し追求していくという態度に立ったものであった。

この合宿でも「学園問題」は一つの大きなテーマであった。岡山大、富山大の友による研究発表は直接に紛争を経験しその解決に努力して来ただけに、力強さと、同時にその努力の過程における苦難とが切実に響いてくる。学園ではラグビー部のキャプテンをもつとめる富山大の山田滋君は言う。「ラグビーというスポーツの性格を考へてもらえば理解していただけると思います。この競技では互いの心の中に信頼感がなければパス一つできないのです。そこには生きた信頼感、体で感じとる信頼感、自己を犠牲にしても仲間を生かそうとする姿勢の上に立脚した信頼感があるのです。この信頼感を単にグラウンドの上だけのものとしてしまうのではなく、学内に押し拡げ大学人相互の信頼関係を回復して行くことがなによりも必要であると思

ます。」また岡山大の田中君は、学園紛争における一般学生の主体性のなさ、つまり自ら考え自ら判断し、自ら行動することの、一切の欠如を鋭く指摘し、そこから抜け出し各人が真に主体性ある人間とならない限り本来の大学における学問は行ない得ないことを訴えた。

そのほか学生の研究発表を主体としたこの合宿では、岡山大の菅君の「言葉の意味構造における蒸発現象」、皇学館大山脇君の「日本人の生活規範としての神道」等の研究発表が行なわれたが、この間、国民文化研究会名越二荒之助先生、三宅将之先生にも講義をお願いし、合宿は一段と盛り上っていった。

名越先生の講義は「三つの戦争とその意義」と題するもので、幕末の薩英戦争と馬関戦争、日露戦争、そして大東亜戦争をとりあげられ、これらは日本が発展し近代化していく上で非常に大切な役割りを果たしたのであり、帝国主義的侵略として位置づける現代の一般的な見方は歴史を一面からしか見ぬものである、と鋭く喝破された。そして「逆上した民族主義、独断主義を良い側面と区別しなければなりません。この日本の良い側面こそ、私の傾倒して止まぬところのものなのです。」と結ばれた。

又三宅先生のは「我々の直面する問題」と題するもので、現代社会の内包している問題と学生運動の心理的誘因との関連性の分析、大学の理念の歴史の変遷と現代日本の大学問題等、深い分析と洞察に基づいて興味ある様々の問題を話された。

この合宿でも、聖徳太子の御本の輪読が行われ、更に和歌創作及びその相互批評も行なわれた。最後の夜の集いでは、皆が本当にうち融けて、激論を戦わす者もあり、心ゆくまで互いに語り合えた合宿であった。

△九州 地区▽

期 日 三月十四日～三月十六日

場 所 福岡県太宰府飛梅会館

参加学生の所属大学は鹿児島大、長崎大、九州大、山口大、熊本大、福岡大、西南大、大分大、九州歯科大、福岡教育大、早稲田大、

三地区では最も多い二十二名が参集した。この合宿でも他の二地区と同様「学園問題」が大きな課題として取り上げられたが、特に今回は実際の自治会選挙を戦い抜いてきた長崎大、大分大の友等の参加があり、彼らの体験的研究発表は生々しい学園の実状を伝えてくれ貴重なものであった。

しかしここで一つの問題が出てきた。古典を読み、古典の心を受けて自己の生き方を定めていこうとしてきた者にとつては、組織を作り、力を行使して左翼の学生と戦う活動が、ともすればその根底に「思想」を欠如しているのではないかと感じ、一方実際の運動の中にいる者は古典の輪読等の学問が単なる机上の学問に墮してしまふのではないだろうかという焦りを感じ



(九州地区合宿)

ずにはおれない。このような違和感にどう対すればいいのか。もともとこの二者は決して相対立するものではない。古典を学ぶということは、頭の中に思想を組み立てることではない。古人の生き方が即ち自己の生き方となつて体内に消化されているのでなければ真に古典を読んだことにはならないはずだ。又実際の学生運動にしても、それが自己の生命的反撥つまり、古代から幾多の先人が辿ってきた、人としての生きる道に基盤を置いた反撥でなければ、底の浅い、浅薄なイデオロギーの相剋に陥ってしまう。友らはこの点を、五日間懸命に語り合った。この間国民文化研究会の田村潔先輩は「方法論よりも、自分が命をかけて守ろうとするものは何か。それをはっきり見定めることが肝要であり、それこそが学問の意義である」と訴えられた。いよいよ合宿最後の夜である

問題をこのままうやむやにしては帰れないという切実なおもいは、そのまま友に対する厳しい質問と、自分の日頃の心情の告白となつてあらわれた。この合宿で、この問題点が片付いたといえば嘘にならう。何故なら、それは自分の人生における根本姿勢を問うものだったからだ。しかし最後の夜のはげしい討論は、お互いの心の中に強い友情を生み出した。そしてこの友情こそが、今後の人生の原動力となるに違いないと確信せしめられたのである。

これらの討論を通じ、又聖徳太子の御本の輪読、和歌相互批評、或いは長崎大白石君の「古事記のいのち」熊本大永井君の「言霊」等の研究発表を通じて、参加者全員が言葉とそれによるも真心の大切さを痛感したことが、この合宿の大きな成果であつた。

第二次春季合宿から大合宿へ

例年一ヶ所で行なわれてきた幹部合宿が、今年は三ブロックに分れて行なわれた為、各地の情報を交換し全体の成果をまとめ上げる為の合宿がどうしても必要であつた。この観点から第二次春季合宿が、三月二十日、各地区合宿を終えて東京正大寮に集まつてきた全国の友らによつてもたれた。参加者は次の通りである。

松木昭（鹿児島大）、小野吉宣（西南大）、志賀健一郎（九州大）、白石肇（長崎大）、田中輝和（岡山大）、浜岸悦生（富山大）、足立哲郎（神戸大）、山脇敏夫（皇学館大）、豊島典雄

(明治大)、広瀬清治(早稲田大)、北崎伸一(上智大)、津下有道(上智大)、北川文雄(一橋大)、斎藤実(早稲田大)、石村善悟(東京大)、

いずれも各地の活動の中心に立つ者ばかりであり、来たる大合宿でもその中核として活躍することが期待されていた。

この合宿では、各地区合宿報告、全体討論(大合宿に向けての心構えについて)に続き国民文化研究会の小田村理事長、浜田副理事長、及び、若い会員の方々を交じえて、夏季大合宿の内容検討を行なった。特に今回は研修テーマの一つとして「学園紛争の究明」が新たに加わっており、このテーマを如何に大合宿の中でこなしていくかに議論が集中した。この為一泊二日の予定で組まれた日程では話しが尽きず、一日を延長して更に白熱した討論が行なわれた。

この第二次春季合宿の結果、全国のリーダー達のコンセンサスは更に強靱さを加えた。四月からは各地のリーダーを中心に、大合宿への勧誘活動がはじまった。

六月には再び各地区の小合宿がもたれて、阿蘇の大合宿へ向けての精力的な努力はいよいよ最終段階に入ったが、どの大学も統廃する紛争のため活動は難渋をきわめた。しかしそのような時こそ全国のいたるところで同じような苦しいたたかひをつづける友らの励ましの便りが大きな力となってくれた。

単なる理論の整備のためではなく、情意の結集のために——学問と人生を結びつけ、形骸化しつつある学問に生氣を蘇らせるために——全国の友らが阿蘇に集う日は間近に迫ったのである。

第十四回「合宿教室」のあらまし

九州大学医学部三年

小柳左門



講義

和歌創作・相互批評

班別討論・班別輪読

慰靈祭

全共闘の狂えるごとき闘争にあけくれた一年、頽廃しきつた学内にあって、我々は人生と学問にどう取りくめばよいのか、そしてその問題と学園正常化の道をどのようになすべきか、いいののか。我々はそれをただひたすらに求めつたたかい続けてきた。緊張した精神も時にはゆるみもした。闘いに疲れた心に動揺もおこった。だが、全国の各大学で、自己の無力にむちうって闘かっている友らのことを思い、それに支えられて再び立ちあがったことも度々であった。こうして一昨年の霧島合宿以来一年、全国のさまざまの友らのおもいを一つに集めて、「第十四回学生青年合宿教室」は開催されたのである。

期間は昭和四十四年八月七日より十一日までの四泊五日間、合宿地は熊本県阿蘇火山のカルデラ内にある内牧温泉「ホテル大観」、研修テーマとしては、次の三つがとりあげられた。

A、世界の動向と日本の進路

B、基本的な人生観の探求

C、学園紛争の究明

会場は阿蘇外輪の一角にそそりたつ大観峯の麓にあり、南に連なる阿蘇五岳の雄々しい姿は、毎日の討論や講義に疲れた心を癒しました励ましてくれたのである。合宿の班運営にあたった幹部学生三十余名は、四日前から合宿地に集合し、合宿に臨む姿勢を正しお互いの意思を確認すべく二泊三日にわたる事前合宿を経て、大合宿の綿密な計画と種々の準備に忙殺された。

八月七日、いよいよ合宿開始の日、阿蘇高原の空は青々と澄みわたっている。全国各地より四百名にのぼる参加者がバスで続々と到着する。再会を喜び合う学生達、初めての参加に不安げな学生、早速見知らぬ友に話しかける学生など様々である。会場の正面には、「心ひとつに語りあおう、学問と人生と祖国を」と大書された垂幕が高く掲げられている。参加者の内訳は次の通りであった。

◇参加学生（男子） 〓 鹿児島大、鹿児島経大、熊本大、熊本商大、大分大、長崎大、佐賀大、九州大、九州工大、九州歯大、福岡大、西南大、福岡教育大、北九州大、九州産業大、岡山大、山口大、香川大、皇学館大、神戸大、京都大、名工大、花園大、玉川大、専修大、上智大、東京大、明星大、法大、拓殖大、一橋大、早大、亜細亜大、防衛大、日大、神奈川大、東海大、明治大、中央大、埼玉大、青山学院大、慶大、工学院大、富山大、東北大（計二二四名）
（女子） 〓 鹿児島大、熊本短大、長崎大、福岡教育大、岡山大、大阪外大、奈良女大、京大女大、玉川大、青山学院女短大、桜美林大、福岡県筑紫女高（計十九名）

◇社会人 〓 吉川工業、小野田セメント、高千穂相互銀行、鹿児島興業信用組合、中球磨林産開発、西武青果総合食品、高田工業所、鹿児島音楽文化協会、林兼造船、明星大理工学部助手、早稲田大大学院（計十七名）

◇教職員 〓 福岡県小中高校教諭、熊本県小中校教諭、熊本県教育委員会（計六十一名）

◇ 招聘講師三名。来賓三名。

◇ 大学教官有志協議会四名。国民文化研究会六十一名。事務局十一名。総合計四百三名。

参加男子学生は、大学、学年および合宿申込書にあつたアンケートをもとに七名から十一名を単位として全部で二十三班を編成、各班には事前合宿に参加した学生および大合宿経験者から班長として一名配属された。今年も、連絡事項の伝達、朝の起床、集合の指示等にたずさわる学生指揮班が構成され、東京大学二年石村善悟君を中心に四名がこの任務につき、並々ならぬ努力を払った。また、オブザーバー参加の女子学生は九名及び十名の二班に、社会人参加者はこれを二班に、また教員班は八班にそれぞれ編成され、総計三十五個班には、それぞれ国文研会員が助言者としてついた。さらに特筆すべきは、この合宿教室を経験して、社会人となった若い先輩達八名によつて運営委員会が構成され、夜の班長会議終了後も深夜まで日程表の検討などの合宿運営に、全力を注いだことである。これらの人々の影の努力によつて、合宿は力強く、かつスムーズに進行して行つたのである。なお就寝時間後、各班長ならびに班付の助言者が集合し、六つのブロックに分れて、その日の各班の問題点を検討し、また励ましあつて翌日の班運営をより良きものに行しようという努力が払われた。

合宿地に到着した参加者は、一度各班室に集合し自己紹介を終えた後、午後二時四十五分より一同講堂に会して開会式。一橋大学商学部三年北川文雄君が開会宣言を行ない、続いて国歌

8月9日(土) 第三日	8月10日(日) 第四日	8月11日(月) 第五日
同 左	同 左	同 左
(挨拶) 亜細亜大学長 太田耕造先生		
(講 義) 奈良女子大学名誉教授 岡 潔先生	(講 話) 元侍従次長 木下道雄先生	全体意見発表
(質疑応答)	休 憩	班別討論
班 別 討 論	(講 義) 夜久正雄先生	合宿四日間を かえりみて (講義) 小田村 寅二郎先生
記念写真撮影		感想文執筆 第二回和歌創作 閉 会 式
中 食	中 食	
和歌創作導入 (講義)山田輝彦先生	(講義) 奥田克巳先生	
阿 蘇 登 山	(古典講義) 小柳陽太郎先生	中 食 解 散
	班 別 輪 読	
	地 区 別 懇 談	
夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	
和 歌 提 出		
班 別 輪 読	和歌全体批評 (講義) 山田輝彦先生	
慰 靈 祭	班別和歌相互批評	
班 別 懇 談	最後の夜の集い	
就 床	就 床	
(消 燈)	(消 燈)	

第十四回 「合宿教室」日程表

	8月7日(木) 第一日	8月8日(金) 第二日
7.00		起 床 (洗面, 清掃)
8.00		朝の集い (国旗掲揚, 体操)
9.00		朝 食
10.00		(講 義) 川井修治先生
11.00		(質疑応答)
12.00		班 別 討 論
1.00		リクレーション (歌唱指導)
2.00		中 食
3.00	(班 別) 自 己 紹 介 開 会 式	(講 義) 小田村寅二郎先生
4.00	参加者自由発言	(質疑応答)
5.00		班 別 討 論
6.00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 入 散 食 浴 歩
7.00		(講 義) 世界経済調査会 理事長
8.00	主 催 者 側 会 員 自 由 発 言	木内信胤先生
9.00	班 別 討 論	(質疑応答)
10.00		班 別 討 論
10.30	就 床 (消 燈)	就 床 (消 燈)

斉唱。その後、われらの祖国を守るために命を捧げられたすべての祖先のみたまに対して一分間の黙禱を捧げた。開会の挨拶は、大学教官有志協議会の明星大学教授奥田克巳先生、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生、地元学生を代表して熊本大学工学部三年松田信一郎君によって行なわれた。それぞれの要旨は次のとおりである。

△まず、講義を無心に聞いてほしい。自分の考えに固執して他を受けつけないという気持ちからは、何ひとつ得るものはない。班別討論でも、他の人がどう思っているかを大切にしてほしい。△奥田先生がこう述べられたあと小田村先生は次のように訴えられた。△今日の日本の教育界は重大な危機に直面している。その根本の一つは「教える者」と「教えられる者」との間に教育の場が実在していないということではないか。この五日間、合宿に参加した人達が、同じ日本人同志として平等であるという心をもって、教育とは何かを肌でお互いに感じあってみよう。そしてこの四百人が心をわって話しあい、本当の教育の場を少しでも実現しようではないか。△最後に熊本大松田君は△去年の合宿で、学問と人生のあるべき姿を教わり、日本が本物の人間になろうとするきびしい努力をした人によって支えられて来たことを知り深く感動した。この感動を忘れずに、この五日間を心から語り合おうと述べた。

次いで、合宿運営委員を代表して日商岩井株式会社勤務の沢部寿孫先輩から、合宿の構成や運営についての説明があり、指揮班より生活規律及び講義資料等についての説明があつた。緊

張した雰囲気の中で開会式は済み、早速第一のスケジュール、参加者自由発言へと合宿は進んで行く。

今までの合宿では、開会式の後、直ちに「我々が合宿で目ざすもの」という主旨で、主催者側から講義が行われていたのだが、今度の合宿においては、新しい試みとして先ず最初に、この合宿に参加した者が参加の動機なり、日頃思っていることなり、また皆に訴えたいことなりを思い思いに、率直に述べてもらう時間が設けられた。

司会を担当した東京大学二年石村善悟君が、まず「現在学園紛争が全国で問題になっているが、我々はこの混乱の中で色々と考え悩んでいると思う。その気持をありのままに語ってほしい」と述べ、それに続いて十数名の学生諸君が登壇した。最初は発言もとぎれがちであったが、次第に種々の発言が出された。人生の姿勢を正す合宿にしたいという者、今の学生運動を手きびしく批判するもの、教育のあり方に疑問を訴えるもの、また現憲法を批判するものもあった。中でも、ある学友が「僕は大学に入って、今の有様を黙って見ておれず学生大会で意見を述べたがそれが皆に通じなかった。くじけようとした時もあった。しかし勇気をもって言うべき時は言わねばと思つて心を励ましたから今日までたたかつてきた」と体験を交えて語った言葉が皆の心をうった。こうして僅かの時間ではあつたが、偽りのない言葉の数々が参加者の心をうって、友と真剣にぶつかりあおうとする意志が会場全体に感じられ始めた。

参加者自由発言後、合宿の準備に携つてきた学生の代表として、岡山大学医学部二年田中輝和君が意見を發表した。田中君は岡山大学で去年來起つてゐる紛争の経過を説明しつつ、その中で経験し感じたことを述べていった。そして最後に「僕達は全共闘の暴挙と大学当局の無責任さに生命的な憤りを感じながら、大学での学問のあり方、人生への取り組み方を現実の紛争解決の中で求めてきた。そして日々の努力の中から真の友を得た喜びが、大きな力となつて湧きあがるのを感じた。その友情や喜びこそ学問の出発点だと思ふ」と述べて、このことを基本として合宿の中で共に考えようと熱のこもつた声で訴えた。

夜は主催者である大学教官有志協議会および国民文化研究会の方々、自由発言があつた。十数人の方々、次々と登壇されたが、去年大学を卒業したばかりの人々の意見が多かつた。古事記の一節を感動をこめて朗読し、このような瑞々しい神話をもつた国に生まれた喜びを語つた方、学園の異常な状態を友達と力を合わせて正していこうと訴える方、実際の教育の場にあつて生徒が一体何を望んでいるか、その心情をとらえて教育をおすすめていった体験を話す方など、それぞれの職場や過去の合宿での体験をもつた様々の熱のこもつた発言が続く。中でも電源開発に勤めておられる長内俊平先生は「今の大学人は学生も教授も、自分たちが国を支えていると思つてゐるようだが、国を支えているのは大学人ではない、名も無き民である。大学がつぶれば、日本が崩壊する」といふようにならぬほれば捨てよ」と喝破された。先生の御

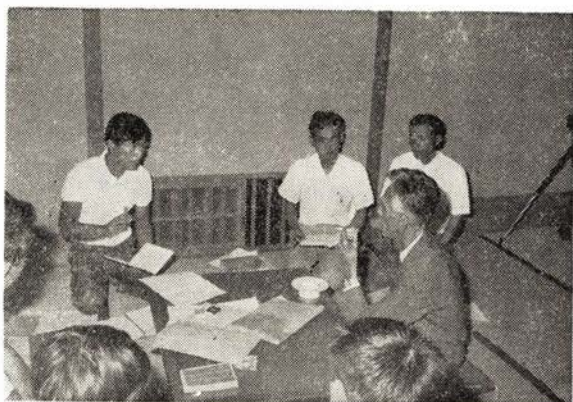
発言は直截で、しかも大学問題の急所をついたものであった。こうして主催者側自由発言の一時間半はまたたく間に過ぎてしまった。

講 義

今回の合宿での招聘の講師は、世界経済調査会理事長木内信胤先生、数学の御研究で文化勲章を受賞され、現在奈良女子大名誉教授の岡潔先生、および元侍従次長をなさっていた木下道雄先生であった。先生方は御講義のほか、班別討論や休憩時間までも我々と膝を交えて話して下さった。日本の国の行く末を憂え、全国の人々にその思いを日頃訴えておられる先生方に接し、その御人格に直接触れ得た経験は、とても得がたいものだった。

合宿中における講義の内容については、本文の方に収録されているので、詳しくはそれをお読み頂きたい。ここでは要旨を簡略に記すことにする。

第二日目、冒頭の講義として、国文研副理事長、鹿児島大学教授の川井修治先生が演壇に立たれた。先生は大学紛争の問題は、それが大学を革命運動の砦にしようとする所にある。大学問題は祖国日本の運命との関連において考えるべきだ」と話され、「大学は国家の自由な批判者だ」という通念の陥っている所を厳しく指摘された。さらに今後の日本、大学の進むべき方向は革命勢力の歪んだニヒリズムを排し、「共に是れ凡夫のみ」という人間としての痛感を



(学生と話される岡潔先生)

たしかめる以外に道がないことを訴えられた。午後は、国文研理事長小田村寅二郎先生の講義、先生は「学問と教育をそれぞれの正しい軌道に載せる為に」と題して話しを進められた。先生は△集団に紛れこむことによつて、自分自身で反省することから逃避するような劣弱な生き方が蔓延して了っている。また討論における概念整理の濫用によつて、話している人の心魂が見失われている。これでは人間性は次第に失われるばかりだ。戦後の教育の間違いに○×式思考法がある。動乱きわまりない人生の姿、現実の矛盾が○×式思考法で理解納得されるはずがない。古代の防人は、父母や妻子と別れて国の為に遠く旅立つという矛盾を内的に見事に統一させて和歌に詠んでいる。我々がなさねばならぬことは矛盾を○×で整理することではなく、その矛盾を統一する訓練である▽と

述べられた。更に、種々の言語魔術からの脱皮を説かれ、特に「大学は真理探求の場である」という言葉に対して、 \wedge 自然科学はともかく、人間の心をその対象に入れなくてはならぬ人文科学において「真理を探求している」などと自認してきたことはとんでもないことだ。むしろ大学とは、究極的に全ての学問が無視できない『人間の凡夫性』、真心を探求すべき場と呼ぶのが正しいと思う \vee と示された言葉は実に適確だった。先生の激しい語調は聞く者の心をゆさぶらずにはおかなかつた。

二日目の夜、招聘の講師として最初に木内信胤先生が、「これからの国造り―物心両面の理想は何か―」と題して話された。先生は \wedge 米ソ両国のリーダーシップは今や失われつつあり、日本はその実力を評価されつつあるが、このことは現在の世界に進行している二つの超重要な事件である。だが、日本国の特徴は、その実力が素晴らしく大きい反面、抜けている点はバカに抜けているところがある。沖縄、安保、大学問題など一歩誤まれば一気に穴に陥る危険も孕んでいる \vee と述べられ \wedge 本当の日本の誕生の道を開くのがこの再評価の意味であり、その内容としては、眼に見える所では、人口分散、公害排除、経済的に最高の能率が出るよう考えること一方眼に見えないものでは、物質にとらわれた世界や西欧文明の上に出て、心情の満足を追求するような日本、個性が充分に發揮できる日本になることだ \vee と、日本の全体像をとらえながら、一方細かい所に目を注がれて、淡々と話された。

三日目、午前中の岡潔先生の御講義に先だつて、終戦時文部大臣を歴任され、現在亜細亞大
学学長の太田耕造先生の御挨拶があつた。△国民が理想を持たず、ばらばらに好き勝手な生活
を送れば、精神は下落し国家は没落する。低劣な利己心によつて、国家も先人の残したのものも
軽視され、ただ外国崇拜に走る。我々は、先人の魂を受け継ぎ、さらに我々の学んだものによ
つてそれを進歩させねばならぬ▽と簡潔に述べられた。

つづいて岡潔先生のお話である。岡先生は昭和四十年の合宿にも御講演されて、非常な感銘
を与えて下さつた。その記録は、「日本への回帰」第一集にある。先生は最近御病気がちでい
らつしやつたが、この合宿の為に他の講演を断われ、体を整えて来られたという。全員が緊
張して待つなかを、先生は登壇された。演題は「欧米は間違つてゐる」である。先生は、ある
時は静かに、またある時は激しく語つて行かれたが、人の心を凝視された味わい深い言葉が美
しくも鋭い言葉となつて胸にひびいてくる。△西洋人は五官に感じるものだけを自然だと
思つてゐるが、それは自然の一部でしかない。だから自然科学は物質現象の一部を説明できる
だけで、生命現象については何も語つてくれない。この自然観から出てきた物質主義や個人主
義が間違ひの根本だ。人々は今この物質主義によつて真心が分らなくなつてゐる▽と先生は確
たる信念をもつて語られ、仏教がどう人の心を説明しているか述べられたあと、△この真心の
かなでるメロディを感ずることのできるのは日本民族だけだ。人類を救うために日本民族はい

ま立上る時だ」と訴えられた。さらに講義のあと、一人の学生が先生に質問をしたが、先生はその質問の言葉が不正確きわまりないと厳しく叱られた。言葉を正確に受けとめるという学問の根本姿勢を、先生の恐ろしい程の答えられ方の中にまのあたりに示された感じであった。

第四日目は木下道雄先生の御講義から始まった。先生は八十二というお年にもかかわらず、この合宿のために単身九州の地においで下さった。演壇に立たれた先生のお顔は柔和な中にも謹厳なものが感じられる。先生は、今上天皇がまだ皇太子でいらつしやった大正十二年から昭和二十一年まで御側近として仕えておられた時の御体験を、切々と語っていかれた。陛下が大演習の帰途、戦艦の上から遠くの岸辺に見送る人々の振る灯に向つて、闇の中で敬礼なさつていたという鹿兒島沖の話、はげしい雨中での分列式における陛下、終戦後の宮中の草取り奉仕のお話など陛下のおおらかな優しいお心づかいをまのあたりに見るようなお話は参加者ひとりひとりの心をひきつけずにはおかぬものであった。先生の一語一語をかみしめるようにして必死に聞きながら、皆の中からはいつかすすり泣きの声ももれていた。先生もじつと涙をこらえていらつしやるのか、小さな静かなお声で話される。先生は最後に、「どうかいつまでも日本を引受けていって下さい。お願いします」と頭を下げられた。木下先生のお話は、今度の合宿中でも皆の心を最も強く打ったものであった。僕達は先生のお姿とお話を一生の思い出として、また自分の生きる糧として大事に守っておきたい、また人々にも伝えていきたいと思つた

のである。木下先生の御講義のあと沢山の和歌が作られた。そのうち数首をここに掲げる。

富山大 浜岸悦夫

すめらぎの国民思はるる御心を偲びて涙おさへかねつも

わが胸にこみあげてくるよろこびは明日より我の力とならむ

防衛大 太田文雄

艦上にただお一人で手を振らるる陛下の御姿まぶたに浮びぬ

大君と民との心のふれあひに感きはまりて涙あふれぬ

ふと見ればとなりにはりし友ども涙おさへてむせびをるなり

つづいて亜細亜大学教授夜久正雄先生の講義「和歌は日本文化の精髓である」があった。先生は小林秀雄氏の文章を引用されながら、美しいと感ずる心は育てなければ衰えてしまう。今の学問は、物を分析して理解することは教えるが、物を感じずる心を育てることを怠っている。むしろそれを破壊する方向に向わせてきている。和歌を作ることは、自分の感じたことをありのままに言葉に現わす努力をすることによってこの感ずる心を育てるものだ。日本人が有史以来和歌を作り続けてきたというのは、この心を深める努力をしてきたということだ。今日の我々が歌を通じて千何百年も昔の祖先と心を通わすことができること、また国民が天皇の御心をその御歌によってお偲びしてきたこと、その感動を和歌によってお答えしてきたこと、このよ

うな厳肅な事実を見る時、和歌は日本文化の精髓であると確信できる」と話され、明治天皇の御歌などを紹介された。

午後は、現在、明星大学で理工学部の教授をなさっている奥田克巳先生のお話があった。先生は「目に見える現実の世界」と題し、我々が人間として考えなければならぬ問題は煎ずれば二つあると思う。一つは、いかに人生を生きるべきかであり、もう一つは目に見える現実の社会を知ることである」と述べられ、現在の社会では、第一次産業革命たるエネルギー革命につづいて、第二次革命たる頭脳の革命、即ちコンピュータによる技術革新が今いかに早いスピードで行なわれているのかをお示しになった。

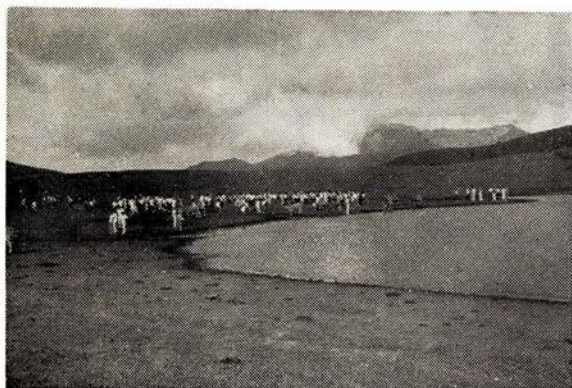
つづいて修猷館高校教諭小柳陽太郎先生の古典講義「文字の学者日用を知らず」があった。先生は山鹿素行の「謫居童問」の言葉にふれながら講義をすすめて行かれた。山鹿素行は「文字の学者日用を知らず」と言っているが、これは実生活の体験をもとにせず、観念に頼って学問するものは、決して生きた思想をもち得ぬということだ。今の学者には、戦争と平和の論議にも見られるとおり、抽象化された観念で現実を割り切つてゆこうとしている人がいかに多いことか。生きた思想とは、感ずべきことを感ずべき時に感ずる、という知的判断以前のものを基本として、自分自身の目で現実を直視していく所から生まれる。その心の自由な働きによつて物事を知る知り方を素行は「実知」と呼んだ」と述べられ、「頼るべきものは理論ではな

い。観念の杖を取り去つてみよ」と強く戒められた。古典がこうも現代の思想問題の根底に通ずる深いものを持つて驚き、自分の心を研くものとして古典が不可欠だと感じ得たことも、この講義での大きな収穫だった。

和歌創作・相互批評

合宿教室における和歌創作は八年前より始められ、今では合宿で決して欠かすことの出来ないものとなっている。第三日目、福岡県立若松高校教諭山田輝彦先生によって和歌創作にあつての導入講義が行なわれた。先生は、現代の青年の間には深い虚無感がある。この虚無感を形作つたものは、民族の歴史、即ち我々の精神的根源の喪失ではなかつたか。この空虚感を埋めるものは、先人の言葉を本当に味わつてみることにしよう、と述べられ、日本語のエッセンスとしての短歌の勉強の必要を説かれた。以上のようなお話に基づいて先生は、歌は言葉を飾つたり、誇張したりするのでなく、実感を正確な言葉で詠みあげべきこと、歌は一首一文であるべきことなど和歌創作上の指導をされた後、具体例として正岡子規の和歌を示された。

山田先生のご講義のあと、和歌創作の時間をかねて阿蘇登山が行なわれた。全員バスに分乗して阿蘇中岳へと向う。バスが山頂に近づくにしたがつて雄大な外輪山や阿蘇の平原がひらけてくる。素晴らしい眺めである。白煙を吹く中岳火口をめぐつた後、草千里で休憩、バスが宿に



(阿蘇・草千里浜)

ついた時は、もう日が暮れかかっていた。緊張した日程の中、なごやかな一時であった。夜の日程の前までに全員の和歌が提出されたが、提出時間まぎわまで指を折って数を合わせつつ、一生懸命和歌を作っている姿があちこちで見られた。和歌は国民文化研究会の先生方によって一人一首以上が選択され、約五百首がプリントされた。

第四日目の夜、山田先生によって、和歌全体批評が行なわれた。間違った言葉の使い方、また自分の体験や感情の不正確な表現が多くみられたが先生はその代表的なもの数首をとり上げて作者の気持をくみとりながら批評されていく。先生の適切な批評に、自分達が日ごろいかにいい加減な言葉使いをしているかを深く反省させられたことであつた。

先生の講評の後、各班毎に相互批評会がもたれ

た。相互批評はその歌を味わいながら、作者の心を偲びつつ、お互いに、より正確な思想表現を訓練する場であった。言葉を大切にすること、人の心を大切にすること、それがどんなに困難なことか、たのしい語らいの中にしみじみと思い知らされたのである。

班別討論・班別輪読

班別討論は、主に講義のあとなど一時間から二時間の時間をとって、全期間中あわせて九回もたれた。班別討論では、講義によってひらかれた感想のみならず、日ごろ自分が悩んでいること、また皆に訴えたいことなど様々の問題が提起された。しかし合宿前半までは、まだうわべだけの論争、知識のやりとりに終始しがちであった。しかし合宿が進むにつれて、この合宿の目ざそうとしているものが、正しくそのような論理や知識のみをふりまわすことが学問であり、思想であるかの如く思いこんでいる社会風潮との対決であり、そのような観念的な思考によって人間本来の生き生きとした情感を失いつつある自分自身を見直すことであると気づき始めた時、班の中の雰囲気は次第に変化して行った。そして自分の体験を正確にふり返り、そこからものを考えていく姿勢、相手の言葉を相手の身になって考え、受けとめようとする姿勢があらわれて来たのである。そうなると討論の場は、自分の甘さとの対決の場となり、真剣勝負の場となる。しかしそれこそが我々の求める同信生活の第一歩となるのだ。

苦しげにうつむきながら語る友の一語一語に心こもれり

東京大 広瀬 豊

あらはせぬ胸の思ひに絶句する友の瞳に涙光れり

熊本大 加藤 和彦

第三日目、慰霊祭の前に班別輪読の時間がとられた。テキストは、去年の霧島合宿レポート「日本への回帰」第四集、輪読箇所は山田輝彦先生の「短歌入門」という講義録より「留魂ということ」の一節である。幕末という日本歴史の未曾有の時期に活躍した人々のひたむきな生き方に、その人々の和歌を通して触れる喜びを味わい、「歴史とは人間が人間の意志を継承することだ」との山田先生の言葉をかみしめたのであった。

第四日目、黒上正一郎先生の御遺著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」より第四編序説の班別輪読が行なわれた。この部分はこの本の中でも、最も格調の高い文章のひとつであり、著者の思いがすばらしい言葉の調べとなって波打つように現われている。各班の部屋からは、この文章をくりかえし読む声が聞こえてくる。動かし難い文章の姿というようなのは、文章を何度も声に出して読むうちに体得できるものだと思う。そのあと言葉のひとつひとつについて厳密な検討がなされ、著者の心に迫る努力がなされた。読みすぎしがちな言葉に、大切な

意味がこめられているのを度々見出し、それを友達と語り合ううちにそれが深められていく。本を読むことの難しさと同時に、その難しさをのり超えていく中で著者の心に触れる深い喜びを感じたのである。

慰 霊 祭

慰霊祭は、岡潔先生御夫妻や木下先生、木内先生にも御出席いただいて、三日目の夜、会場広庭で国文研の関正臣先生の司会のもとに厳粛にとり行なわれた。折しも阿蘇の夜空は澄みわたり、星が美しく輝いている。全員が整列している前には簡素な祭壇が設けられ、電灯の消された中にかがり火があかあかと燃えている。ここに祭られる祭神は、「平時戦時を問わず日本の国を守るために尊い命を捧げられたすべての祖先のみ霊」である。おごそかな雰囲気のうちには式が始まった。お祓いに代えて故三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌が国文研の長内俊平先生によつて二度朗詠される。先生のお声が静寂な式場に響きわたると、おのづから心が統一されてゆく。全員黙禱の後、降神の儀を行ない祭壇に神饌をささげる。ついで夜久正雄先生による明治天皇御製拝誦。明治天皇が国を治めるにあたって、どれほど祖先の心を、また国民の心を大切に思われていたかがその御製にひしひしと感ぜられた。小田村国文研理事長による祭文奏上、続いて献詠に代えての全



員による「海征かば」斉唱。「君が代」にも似たその荘重な楽曲は、日本民族の心の底を流れている永遠の調べを奏でるがごとく胸に迫ってくるのだった。そのあと、全員一斉に、二拍二拍子一拝の古来の作法に従って祈りを捧げる。全員黙禱による昇神の儀を最後に、ほぼ一時間を要した慰霊祭は滞りなく終わった。清々しい感銘が一人一人の胸の中にあふれていた。

殆んどの人にとって慰霊祭の経験は、この合宿がはじめてであった。日本では、現在このような儀式は殆んど省みられていないが、日本民族の永久を念じつつ、そのかけがえのない生命を捧げられた多くの祖先を祭ることは、後世の人々の自然の心ではなかるうか。祖先に対する感謝の念の中に、我々の真実の生は目覚まされるのである。

次に慰霊祭において拝誦された明治天皇御製、

および奏上の祭文を記しておく。

△明治天皇御製拝誦▽

身

心からそなふことのなくもがな親のかたみと思ふべき身を

往 事

しる人に問ひてをおかむをさなくもおぼえざりつるむかしがたりを
おもはずも夜をふかしけり国のためたふれし人のものがたりして

神 祇

わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ

夜 木 枯

大空の星のはやしも動くかと思ふばかりにこがらしの吹く

衣

いそのかみふるきすがたの衣ころもきてわが皇神すめかみをまつりけるかな

夢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覚めにけるかな

をりにふれたる

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも
まごころをこめてならひしわざのみは年を経れどもわすれざりけり

花

あかず見し山べのさくら春の日のくれてのちもおもかげにみゆ

△祭 文▽

暮れゆく夏のみ空をかぎりて、雄々しく立てる阿蘇の山々、今日ともに登りし折の頂のさまも
偲ばれて、ここ阿蘇外輪山に囲まれし、ま広きカルデラのほとり、緑さやけきこれの丘のべを
祭の庭と定めて、喚び奉れるみ祖たちのみたまのみ前に、第十四回学生青年合宿教室参加者
四百二名に代りて 小田村寅二郎 謹み畏み敬ひ申さく

今日のこの時を撰び、種々の品をみ前に献げまつり、みたまなごめのみ祭り仕へまつりて告げ
まつらくは、祖国日本の遠き古へより今に至るまでの、平時戦時をわかつた、み国のために尊
きそのいのちを捧げましたける数限りなきみ祖たちのみたまを、これの祭りの庭に魂よばひまつ
り、をろがみまつりてみたまを慰めまつる。ここに集ひし我らは、われらの心を傾け尽し、学
びの庭、教への道の乱れを正さむとはげみ合ひつつ、遠きいにしへに聖徳太子の、自らを省み
させ給ひてのたまはせられし人みな「共に是れ凡夫のみ」「共に是れ凡夫のみ」との、悲痛極

りなきみ言葉を偲びまつり、また、それゆえにこそ「まごころ」に生き貫かむとする友らとの協力の世界を打ち立てむと、心に定め、われらはわれらのともしき身と心とを相寄せ相通はせ積りなす世のまがごとのことごとを、力の限り打ち払ひ正し行かむとす。天がけりますみ祖たちのみたまよ、われらの足らはぬ心のうちを、うつしくみそなはし給ひ、み祖たちのみ心を、つがの木のいやつぎつぎに受けつぎ、語りつぎ履みゆきつがむとするわれらが願ひを、みちびき給へ守らせ給へ、「み民われらもろともにもまめやかにわが大君に仕へまつらむ」「み民われらもろともにもまめやかにわが大君に仕へまつらむ」と誓ひまつる心をみそなはし給へと、かしくみかしこみも申す。

○

合宿の最終日は、まず全体意見発表より始まつた。四日間の合宿を振り返り、様々の感想を皆に伝えようと登壇者が絶えない。時間は予定より二十分延長された。

ある友は、木下先生の御話を和歌に詠んだ。ある友は、合宿で得た感激を学園の中にも生かしたいと決意を述べた。女子学生の一人は「何を言つてよいか分らないが、ただうれしくて壇上に上りました。本当に有難う御座居ました」と顔を紅潮させて語つた。中には「真心ということばかり言いあつても駄目だ」とか「マルクシズムに心情的に反撥して、簡単に片づけるのはおかしい」という意見もあつたが、これに対してはある学友から「君にはこの合

宿に本当に心を傾け、学ぼうとする姿勢があつたのですか」と厳しい指摘も出て、熱気のこもる意見発表が展開されたのである。このあと最後の班別討論がもたれた。

各班では、一人一人が合宿の感想を述べて最後の語らいをした。中には涙で声にならない人もあつたが、この涙が不思議にも人と人との心を結ぶものともなるのだった。僕はこの時の気持を次の歌に詠んだ。

この四日を共に語りし友どちと別れ行くべき時は迫りぬ

わかれゆく最後の語らひと思ふ時胸こみあげて涙あふれつ

思ふこと言ひおほせぬまま合宿を去るが口をしと友は述べたまふ

思ふことうちつけに言ふ勇気をば持ちて生きたしと友は述べたまふ

言の葉は少なけれどもうれしさに目を輝かせつつ友語りゆく

ただ四日の語らひにしてかくのごとたふとき友を得たるうれしき

閉会式を前に、小田村理事長より「合宿四日間をかえりみて」と題して最終の講義が行なわれた。先生はその中で全体意見発表での学生発言に対して次のような感想を述べられた。△ひとつのテーマやスローガンを立てて運動を展開することは、人間性を安直にするおそれがある。肝心の中味のない、固定した概念がスローガンとなって現われるのだ。そのようなものに

安住せずに、流転している自然の中に生活している人間の喜びを感じ、その喜びを人間同志で語り合いながら、素晴らしい社会を構築しようという所に日本民族の歩みがあったのだ。そして最後に公私が講義でのべた「真心」という言葉がもしもスローガンのように扱われるとすればそれは恐ろしいことだ。真心というのは、自分がやろうとすることが、人生で最も価値のあることかどうかを常に追求しようとする心であって、「真心で何々をやる」と言ってもそれは嘘になるのだ。真心がいくらあっても、本当に振返ってみればいつまで経っても真心が貫かれなという所に、人間の深刻な悲しみがある。その悲しみが積重なっていくところに文化が息づきはじめるのだ。真心を概念にしようとする時には、その人の心はすでに真心から遠ざかってゐる」と厳しくも優しい心づかいの偲ばれる御感想が述べられた。

その後、三十分の時間をとって感想文執筆および第二回和歌創作が行なわれた。これらの内容は四十四年十月に国民文化研究会より「第十四回合宿教室感想文集」として発行されているのでお読み頂きたい。感想文執筆を終えて閉会式に移る。いよいよ合宿も最後となった。国歌斉唱につづいて、先ず大学教官有志協議会を代表して鹿児島大学教授の上田通夫先生から挨拶があった。公私は大学に入学する頃ひとつの大きな疑問にぶつかった。今日までその迷いと格闘して生きぬいてきたが、いま思えばその疑問とは、西洋文明に対する根本的な疑問であった。今もその迷いは心の中にあるが、ただ一つ皇室の伝統には何の迷いも感じない。それを木

下先生のお言葉に感じた▽と述べられ、続いて、国民文化研究会を代表して副理事長の浜田収二郎先生は△合宿期間中に耳に残った言葉をかみしながら、それを心に定めて一人一人が進んでいく所に、本当の解決の道が開かれると確信する。我々もこれから皆さんと一緒に進む覚悟である▽と力強く結ばれた。

参加学生を代表して九州大学医学部三年の小柳左門は、岡先生や木下先生の御講義、また慰霊祭での感動を述べた後、△今の学生運動に対抗してゆくというのは、この合宿で確かめあった真心の通いあいを遮ぎるものがあれば、それと戦うことだと思う。聖徳太子の「一人出家すれば魔宮皆動ず」という言葉を心に定めて生きていこう▽と挨拶した。

早稲田大学二年の山口秀範君の力のこもった閉会宣言を最後に、第十四回学生青年合宿教室は、その全ての行事を終了した。

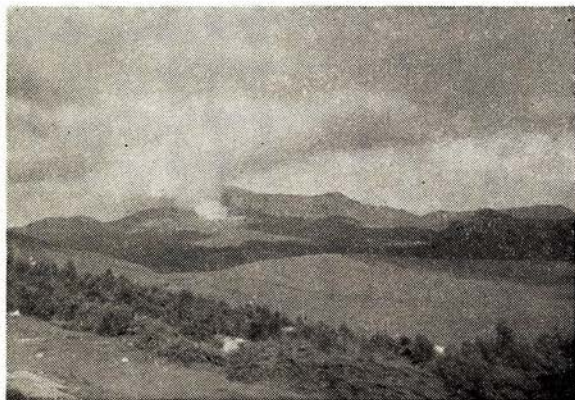
○
会場の玄関前では故郷に帰ってゆく者と、あとの整理に残る者とがかたく手を握り交しながら、その別れを惜しんでいた。

開会日と同様、この日も空は晴れ渡っている。阿蘇高原はもう秋が訪れたのだろうか、遠くの森から、つくつくぼうしの鳴く声がしきりに聞こえていた。

歌

集

——学生、青年の作品より——



△岡山合宿▽

青空を天翔りゆく白鳩の双の翼は輝きにけり

大空を飛びかふ白き鳩のごと友よ進まむ広き心に

孝明天皇の御製を読みて

大君の民思はせし御心を語り伝へむ後の世までも

外つ国は開国せよと迫れども大御心は屈したまはず

岡山大 田中輝和
岡山大 井上雅茂
岡山大 三宅教子

紅に色変はりたる桜葉の少なくなりて風に揺らるる
白雲の浮べる空を鳩の群れの翼朝陽に光りて過ぎゆく

△富山合宿▽

岸本先輩のお話を聞きて

ふたとせ二歳の誠の歩み絶やすなかれと声たかぶらせ語りたまへる

ともすれば苦しくなりぬいたらざる己が姿を責めらるるおもひに

富山大 山田 滋

広瀬先生の御講義を聞きて

いつの世もふるさと思ふまごころに変わりはなしと語り給へる
涙うかべ声をふるはせかほども有難きこと聞かせたまふか
有難き師の御言葉を聞くうちにいつしか我れも涙しにけり

広瀬先生の「日本武尊」の御講義を聞きて

富山大 浜岸悦生

故郷思ふ日本武の御心をしのびてめがしら熱くなりぬる
くにくに ヤマトタケル
ひたぶるの古人の生き方のうちに流るる命悲しも

中田先輩の発表を聞きて

先輩は今も変らぬ厳しさにはげしく責めたまふ我のあまきを
一年をむだに過せし我は今先輩の顔ますますに見えず

いたたまれずわびし我的手とりたまふみ心思へば涙とどまらず

中田先輩の発表を聞きて

富山大 望月保宏

我が身から厳しくあれと毎日を自己とたたかひ励みたまふか
体験の中より生まれし真実のその言の葉のわが胸をうつ

△春季関東地区合宿 — 銚子—V

早稲田大 齊藤 実

友どちと岸边へ出むと砂山を競ひあひつつ上りきたりぬ

幾重にも列をなしつつ打ち寄する波の動きをしばしながめつ

岸边へと波打ち寄せて砕け散り泡立ちながらひかむとすなり

早稲田大 広瀬 清治

何時よりか屏風ヶ浦と名づけられしきり立つ崖の眺めのすごし

はるかにも水平線を望み見て誘はるるとき思ひわきいづ

いま一度船に乗りこみ遠き国へ友らとともに行きたしと思ふ

遠ち方より連なり来たる白浪の寄せて砕けつこの絶壁に

明治大 豊島 典雄

見おろせば真白き波はごうごうとうなりをあげて岩肌をうつ

はてもなくよせては返す白波に赤々と夕陽のはえて輝く

石村君の研究発表で東大の確認書の内容を知らされて

上智大 津下 有道

友の述ぶる説明聞きて驚きぬ乱れし師の道いふにすべなし

学生におもねりみせて署名せしといふ教授の心はかりがたしも
改革を口にするとも浅ましき心捨てずば何か成るべき

東京大 広瀬 豊

花もなく葉も萌えねども桜木はきびしきまでに美しきかな
自然のもつ真実の美を信ぜよといひしロダンの言葉胸にしむ

春休みで閑散とした大学に登校して
法政大 小川 洋司

久々に足を運べば立看もスピーカーもなく静かなりけり
いまさらに木々の姿のすがくしきに学び舎に立つおもひ湧きくる
をちこちにおぞましき封鎖を排除すべく身を砕く友ら多かり
迫りくる狂気の中に学び舎のこのけだかさをいかに護らん

タマエおばあさんの死

—ありし日伯母とともにおばあさんを訪問せし時を回想しつ—

東京大 青山 直幸

ほんとうに大きくなりぬとほろほろと涙流して喜びましき

しわの手で吾が手を握りてただじつと吾を見し人の今はいまさず
帰りゆく伯母と我とを窓辺より手を振り止めず送りたまひき

○

やすらかに目をとぢたまふみほとけの胸元近く菊を置きけり
暮れゆける澄みしみ空のいづくにかゆきたまふらむあはれみたまは

△春季関西地区合宿 — 笠岡—▽

高島より瀬戸内海をながむ

岡山大 田中輝和

瀬戸の海に雲低く垂れ沖の島の島影淡くかすみて見ゆる
雲をうつし静まりはてし瀬戸の海を船は静かに進みゆくなり

岡山大 伊藤三樹夫

雨けぶる瀬戸の海原波たてて小島めざして船のゆくなり

皇学館大 白江恒夫

高島の行宮跡に登り来て立ちつくしたり海の静けさに
神武様住まはれしはこの地よと土器を示して老い人は語る

十六の頃より集めし土器並べ生き生き語る白髪の人よ

神戸大 足立哲朗

高島の宮跡に登り見渡せば静まりてあり瀬戸内の海
縄文の土器を手にする老人の眼輝きいにしへ見つむる

富山大 浜岸悦生

高島の浜辺に立ちし老松の年月経たる姿雄々しも

名越先生の御講義を聞きて

富山大 山田 滋

ますらをの雄々しき姿目の前にはせ来る如く語りたまへり

△春季九州地区合宿 — 太宰府 — ▽

鹿児島大 松木 昭

み友らのこの合宿に臨みたる覚悟を聞けば力湧きくる
われもまた友らと信につながりて過してゆかむこの合宿を

九州大 小柳 左門

うちとけて語りたけれどはじめての友なればうちつけに語りがたかりき

口とちて語らざりし友のうちつけに語りかくれば嬉しく語りつ

九州大 志賀建一郎

風やめばふるへし木影もなめらかに姿みせたり池の面に

太陽の光鋭くさざなみにゆるる水面は点々ときらめく

長崎大 熊本 司

天拝の岡にのぼりて菅公は都をいかにしのびましけむ

長崎大 白石 肇

緑なす筑紫平野を見おろせば水城の跡に木々の茂れる

外敵をふせがんとしてみ祖らの水城きづきし昔しのぼゆ

大分大 江畑守男

静かなる武蔵寺の池のほとりなる苔むす楠に心ひかれぬ

△阿蘇大合宿▽

岡先生への質問の折に

東北大 河合忠雄

歌

集

語気強き師の御言葉に驚きてゆるみし心ひきしまりけり

友どちに思ひのたけを語らむと力をこめて胸に誓ひし
集ひ来て再び別るる友どちと人の誠を語りあかさむ

九州大 吉田 哲太郎

深夜まで語り明かせし友どちと別るることにさびしさ覚ゆ
今日を限りに別れゆく友と手を握りまた来年と心に誓ふ

九州歯科大 小田 展生

木下先生の御講話を聞きて

上智大 北崎 伸一

祈るごとき思ひをこめて先生は声をつまらせ話したまふか
民草の一葉一葉の身の上に思ひはせらるるみ心かしこし

九州歯科大 深 水 康 寛

わがなやみ言はむと思へど思ふごと言葉にならずもどかしきかな

木下先生の御講話を聞きて

一橋大 黒 岩 良 樹

こみ上ぐる涙こらへて聞き入れば語りたまふ師の声ぞつまれる

班別討論にて

法政大 猪 股 文 彦

わがおもひのぶる言葉のたりなさに汗のたまりし手をにぎりしむ

京都大 財津 順一

旧道を籠を背にして登りゆく荷や重からむ老いし村人

参加者自由発言の折に
岡山大 田中 輝和

如何にして思ひのたけを述べむかと思へど言葉はつきはてにけり

吉田松陰先生の和歌を友と詠じて
長崎大 熊本 司

先生の親思はれし御言葉にわがふるさとの父母をしのびぬ

東京大 加来 至誠

地を鳴らし煙ふき上ぐる大阿蘇の火口の縁に我は今立つ

小田村先生の御言葉を聞きて
上智大 飯白 誠一

壇上に立ちし我師の言の葉に胸のつまりてじつと見入れる

木下先生の御講話をお聞きして
法政大 小川 洋司

民思ふ大君の御話うかがひつ涙こらへて胸のつまりぬ

高校時代共に学びたる石村君が、心をつくして働ける様を見て

壇上に立ちて指揮せる我が友の強き姿に心打たれぬ

早稲田大 古川 忠

早稲田大 片山 裕

今こそは二度と得られぬ時なりと師の声聞きゐる友の姿きびし

西南学院大 小野 吉宣

ひたむきに語れどいよ我言葉うつろにひびくか友の心に
時として友の心ふるるとき救はれしごとうれしかりけり

小林至君の発言を聞きて

一橋大 北川 文雄

乱れたる学園の様をたださむと力尽ししと友は語りぬ
大学に入りしばかりの友どちの雄々しき姿に心うたれぬ

皇学館大 白江 恒夫

時をりは言ひ放つごとく述べ給ふ師の言の葉は胸に迫り来ぬ

防衛大 矢野 進

中岳の噴き上ぐる風に挑むごと噴煙の中に若人は立つ

福岡教育大 広 修治

ひたすらにそのかみしのぶ慰霊祭静けさの中に夜はふけゆく

長崎大 佐藤健治

ともすればくじけがちなる己をば正しゆかむと友の語らふ
学舎での苦しきことのくさぐさをのぶる姿に胸を打たるる

慰霊祭にて 東京大 伊藤哲朗

祭壇の前にみうたをよみたまふ師のみ姿のかがり火にはゆ
読みあぐるみうたの言葉たどりつつ一声一声耳澄まし聞きぬ

木下道雄先生の御講話をお聞きして 熊本大 松田信一郎

こころこもる師の言の葉のうるはしく時のたつのも気づかさざりけり
まごころのあふるるばかりの御言葉に心うたれて胸あつくなりぬ

長崎大 白石 肇

歌 つまりたる胸の思ひをのべゆけば友皆われをじつとみつむる

就寝前庭に出でて

東京大 広瀬 豊

一日の日程を経へ友どちと庭に降り立ち星を眺むる

東京の空には見えぬ天の川を澄みたる阿蘇の夜空に見出す

天の川はさみて白く輝ける七夕の星ひときは明し

伝説をおのづと思ひ起したり頭上に並ぶ七夕の星

福岡教育大 小林 至

話されるその言の葉に先生の命こもりて心ゆらぎぬ

日本大 岸本 常男

合宿にのぞめる姿勢の誤まりを叱り給ひし言葉忘れじ

木下先生のお話を伺つて 九州大 稲永 隆

声つまらせて天皇のこころ語らるる師の言の葉に胸のつまりぬ

九州大 前田 秀一郎

とどろきて吹き上りたる噴煙のするどきにはひわが鼻をつく

巨大なる火口の底ゆわき出でし噴煙やがて雲と連なる

慰靈祭にて

星空にかがり火さえてしめやかに慰靈の祭は行はれゆく
日の本のためにたふれし御霊にて我守らるるを知りてうれしき
けふよりは留めをかれし御魂をば我うけつぎて強く生きたし

九州大 小柳左門

霊祭ると庭におり立ち見あぐればすみたる空に星は輝く
星満つる阿蘇高原にみおやらの霊をまつらむ時とはなりぬ
霧島の山に集ひし友どちと霊祭りしゆ一年は経ぬ
雷のとどろく中に霊祭るわざはせしかも去年の夏は
みおやらのみ霊は来ませみ友らと祭をせむと定めし野辺に
ますらをのかなしきいのちと歌ひたまふみ声は庭にひびきわたりぬ
かがり火に照らし出されたる祭壇に向ひて歌ひたまふみ声清しき
祭文を読みあげたまふ師の君の言の葉強く胸に迫り来

東京大 石村善悟

歌

溶岩の石をふみしめ登る背に涼しき風の吹き上げてきぬ

登り来て頂きに立てば友どちの手をふりながら登り来る見ゆ

岡山大 菅 志朗

すかさずに質問の言葉正しゆく師のみことばのひびきするどし

長内先生の意見発表をお聞きして 上智大 津 下 有 道

大学はつぶれてよしとくり返しうつたへられし言葉強しも

長崎大 浜 田 敏 和

参加者自由発言のときの福教大小林君の発言を聞きて

孤立するをおそれず起ちて学園を正しくせむとの御言葉ひびきぬ

小田村先生の御講義をお聞きして 東京大 青 山 直 幸

一点を見つめたまひて述べらるる師のみ姿のせまりくるかも

九州大 安 藤 文 英

木下先生がつまさき立ったままお話しになったと聞いて

師の君はつまさき立ちて語れりと知りし時また胸のこみ上ぐ

小田村先生の最後のお話を聞いて

日本大 岡野滋樹

浅薄な意見を述べし我が胸に師のいましめのつきささりけり
言の葉をだいにせよといましめらるる師の御話の心にせまる
かみしめていひさとすと述べ給ふ師の顔みられずじつとうつむく

木下先生のお話を聞いて

早稲田大 山口秀範

これのみは若人達に伝へむと声震はしつゝ語りたまひぬ
すめらぎ
天皇の御心語る師の言葉いつまでも居て聞きたしと思ふ
天皇の御心偲び師と友と力をあはせ日の本守らむ

早稲田大 山本之聞

合宿の最後の日なり朝日受けて朝礼に立てば身のひきしまる

木下先生のお話を聞いて

長崎大 岩永道雄

天皇を涙ながらに話さるる師を見て涙あふれいでたり
終戦の大御心を今知りて想はず吾れは涙おとしぬ

山口大 中島敏昭

歌 わだかまり残りしところをさらけだし語りしときよ忘ることなし

鹿児島大 東中野 修

ことば足りずたづねし我に心こめ答へし友はありがたきかな

最後の班別討論にて 九州大 久々宮 章

ほんとうにきてよかつたと語りたる友のまなこに涙あふるる

早稲田大 斉藤 実

力強き筆の運びを偲ばするポスターのあり道の角々に

友どちの書き給ひたるポスターは色うすれたれど蔽と立ちをり

木下先生の御講話を聞きて 埼玉大 高橋 勝男

日の本の^{すめらみこと}天皇のみすがたを涙ながらに語りたまへり

大分大 衛藤 晟一

大君の吾れらを思はるる御心をはじめて知りて涙あふれけり

慰霊祭で「海ゆかば」を歌ふ 早稲田大 阿曾 義男

闇深き祭りの庭に歌ひゆくますらをの歌天にとどけよ

勇氣ある友の言葉をききて

明治大 豊島典雄

学び舎の命護れと訴ふる君の言の葉強くひびけり
思ひ述べ演壇下る後姿に湧きあがりけり強き拍手は

木下先生の御講義をお聞きしながら 慶応大 小泉明子

日の本はかくありけりと語らるる師の言の葉に心ふるへたり

玉川大 今滝須美子

大演習の帰途、戦艦榛名艦上にて遠く沿岸に見送る民に敬礼されしと
いふ天皇の御話を聞きて

暗闇の中にお一人立ちたまふ民のかかげし火は見えねども
暗闇に敬礼なされし天皇の民おもはるる御心あつし

全体意見発表の折に 長崎大 加治木かおる

何かしら心に迫るものありておもはず挙げし我手なりけり
我が心整理つかぬままに昇りたりただ何事か言はまほしくて

人吉市立第二中学校 小松正

歌 火口壁這ひのぼりくる噴煙のたちまちにわが視野を閉ざせり

生命たぎつ音と聞きをり太古より鳴る大阿蘇の火口に立ちて

久留米市立荒木中学校

緒方 舂

講演を聞いたたびごとにわが心みつめるきびしさ深くなりぬる

人吉市立第一中学校

黒川 淳二

今日よりは学びしことを心してわが教え子に向はむと思ふ

阿蘇町立内牧小学校

吉良 公紀

雲間よりもれいづるたゞ一すじの光の中にうかぶ日の丸

八代市立八代小学校

加世田 和馬

赤々と燃ゆるかゞり火見つめつつ靖国の兄に想ひをはせぬ

熊本市立池田小学校

伊藤 トキ

女子もまたともに歩みて語りあひ悔なき国を後に伝へむ

八代市立松高小学校

成田 行次

研修に出立つ我を見送りし病臥の妻のことば悲しも

熊本市立健軍小学校

田中 広

合宿に発つわが背に病む母の言ひし言葉の耳に残れり

木下先生のお話をききて

熊本市立託麻原小学校

萩原康司

天皇の民しのぼるゝ御心のあたたかくして涙こぼるゝ

熊本市立中島小学校

田中準一

床につき師の言の葉をかみしめて心たかまりねむさわするゝ

熊本県深田村立深田小学校

福島清爾

合宿で学びし事の数日をいかさんと思ふこの子らのため

熊本市立花園小学校

東正知

憂きことも楽しきことも今日よりは歌にのこして忘れじと思ふ

熊本市立高平台小学校

川上久雄

まなかひに気高き大君の御姿を拝するごとし情せきあへず

高千穂相互銀行

小松弘明

知らざりし友と親しく語らふも今日で別れと思へばさびしき

小野田セメント(株)

木佐木靖男

東京の空にくらべて星くづのきらめくさまの不思議なるかな

あ　と　が　き

「大学運営に関する臨時措置法」が成立したのは昨年八月三日、丁度阿蘇での合宿教室開始の直前だった。それから半年、いま合宿レポートの編集を終える段階では、紛争は急速に収拾に向っているようである。だがまことに奇怪なことは、その収拾の過程において、学生側にも教官側にも少くとも公の場所では、学問ないし教育に対するまともな反省も再出発の決意の表明も全く行われなかつたことである。あのはげしかった紛争が、他ならぬ学問と教育の頽廢が生んだ当のものである以上、その紛争の収拾が、この学問と教育に対する本質的な反省から出発すべきはあまりにも当然ではないか。だが学生たちは昨日まで悪罵の限りをつくした教授達の講義に、何の心の痛みもない表情で出席するし、一方教授たちはやれやれと重荷を下したように再び教壇に立つて、紛争の前と全く同じ講義を開始する——この常識では考えられない紛争「収拾」の姿ほど、現代日本における学問と教育の空洞化をまざまざと見せつけるものはあるまい。

「薬瞑眩せずんば、その病癒えず」とは孟子の言葉だが、あのめくるめくがごとき争乱をもつてしても、ついに日本人の心の病は癒やすべきがないのか。紛争収拾に安堵し、万博ムードに酔いしれる祖国の姿にはまさに亡国の兆があるというも過言ではない。

いま編集の筆をおくに際して、大阿蘇の雄大な外輪山に包まれた合宿教室の五日間が、昨日のことのように蘇える。学問と人生とが一つのものとして心に迫るとはこのようなことなのか、真実の教育の場とはこのようなものなのか、——講師の話に耳を傾け、友のまなざしを喰い入るようになつてみながらたしかめ得た、

そのおもいは決してかりそめのことではなかった。

ささやかなレポートではあるが、真実の学問と教育のあり方を求めて歩んできた私たちのねがいを行間にくみとつていただけば幸である。

（なお今年の夏季合宿教室は昨年と同じく八月七日から十一日まで、雲仙Ⅱにおいて開催されることに決定している）

昭和四十五年二月十一日

編集委員

(北九州)	山田輝彦
(福岡)	小林国男
(福岡)	小柳陽太郎

■ 国民文化研究会
出版図書目録

A 6 版 88頁 定価 150円 40円



青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

われわれ—国民文化研究会—は、諸君に深い関心と大きな期待を寄せている。

なぜならば、諸君は国民各層の中でもっとも活力に富み、真理と正義に対して、もっとも敏感な年令の人たちであるから。次代を背負うものは諸君である。混迷に沈淪しつつある祖国の命運を開く鍵を托されたものは、諸君を置いて他にはないからである。

このレポートに収録された内容についての価値批判は読まれる方々のお心のままにおまかせすべきですが、こうした事業が自発的に生まれだしたこと、三十才台の人々が、直接に二十才台の人々の啓蒙にのりだしたなどとは、味あうべき問題をもっていると思う。

—「はしがき」から—

講義

経済学の考え方と日本経済への

適用および政策の方向：石村暢五郎

平和革命論の検討：川井修治

世界史の発展：広田洋二

日米開戦の真相：渡辺 明

ソビエト第二十回大会における

「スターリン批判」を中心に：日下藤吾

マルクス資本主義崩壊必然論

について：吉田靖彦

共産治下国民生活の実態：名越二荒之助

昭和史をめぐって：森 裕三

社会主義文学理論の検討：山田輝彦

民族的抒情の回復を阻むもの小柳陽太郎

抒情詩論：夜久正雄

日本政治の再建のために—特に天皇制の

問題について—：小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等—写真

A6版 定価 50円 ㊦20円

民族自立のために

—ぼくらはかく祈り かく意志する—

—戦死した友と未だ見ぬ子孫に

この書を捧げる—

国民文化研究会

目次

- 民族復興の根底をつちかうもの
- 合宿にいたる経過
- 合宿人員の構成
- 経過報告
- 班別編成
- 班別討論
- 全体討論
- 講師別討論

合宿感想集

- 参加者からの手紙
- 参加学生、青年に訴う
- 写真—

講義

- 現代日本の盲点……………名越二荒之助
- 現代思想の根本課題……………川井修治
- 歴史観の諸問題……………浅野晃
- 世界経済の基本的動向……………伊部政一
- 日本経済の特質と
- 経済計画の方向……………石村暢五郎
- 日本文化の位置……………竹山道雄
- 現代哲学の窮極の問題……………高山岩男
- 日本文化の源流—聖徳太子の
- 信仰思想を中心として……………高木尚一
- 日本文化の血脈……………南波恕一
- 学生生活と国民生活……………小田村寅二郎



新書版 113頁 定価 100円 下30円

民族復興の根柢を培うもの



…わたしたちの念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興である。まことの「独立と平和」を念しながらこの書を刊行した。

―写 真―

- 班別討論会
- 感想発表会

○パネル式座談会「共産社会に住んでみて」

―在ソ11年児玉氏・杉本氏・同8年池田氏
同5年名越氏・同4年富岡氏・同2年川井氏
参加者全員に和歌創作の手ほどきをなし、
全員創作を行なう。

講 義

- 合宿教室の意図するもの…川井 修治
- 現代日本の盲点…名越二荒之助
- 所謂、資本主義社会と
- 社会主義社会について…石坂 豊明
- 共産主義対策への私見…木下 彪
- 経済学の日本的思考…石村 暢五郎
- 古典のいのち…南波 恕一
- 聖徳太子研究と現代…高木 尚一
- 日教組は現状から
- 脱却すべし…浜田 収二郎
- 人間性に立脚する政治…小田村寅二郎
- 分裂を統一に導くもの…南波 恕一

新書版 250頁 定価 200円 40円

民族の明日を求めて



民族の明日を求めて

「はしがき」から

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまう
っていたり、「あたりまえのこと」が、かえってもの
めずらしげに見られたりしている。

国を愛することも、民族の道統を求めるとも、なに
か、かたくなな人たちだけのものにされてしまって、現
代—終戦後—の日本に生きる人にとっては、それらは、
はれものにさわるような、こわいしろものにされたまま
になってしまった。

目次

- 第一日 友らの邂逅(かいこう)
 - 第二日 民族の意志回復のために
 - 第三日 思想の流れをみつめて
 - 第四日 よろこびと前進のために
- 附 合宿感想集、外
— 写真 —

講義

- 共通の広場の形成するもの…瀬上安正
人間性 解放 の道
国民共同体の現実—基盤 小田村寅二郎
天皇制の本質…森 三十郎
日中関係の過去・
現在・将来…木下 彪
道徳の周囲…山田輝彦
バイブルを統綜する
日本文化の遺法…名越二荒之助
生理学・医学の流れ…小川 幸男
階級史観と民族の問題…川井修治
日本における社会主義の運命
—革新陣営の発生と
現状および将来…菊池 紳隆
戦後意識の論理
—現代教育刷新の基本課題…勝部真長
詩的精神興隆に
期待するもの…小田村寅二郎

B 6 版 365頁 定価 500円 790円

(三部作その一) 理想社 刊行

国民同胞感の探求



目次

はしがき

合宿教室の誕生の背景

一、現代の国民思想について

二、全学連の動きについて

三、全学連にどう対処すべきか

四、時代の断層と取り組んで

合宿教室の運営のあらまし

一、講義と班別討論の関連性

二、チューターシップ

三、人生観に裏づけされた諸講義

阿蘇合宿教室の記録

一、未知の者ここに集う(第一日)

二、緊張する心を講義と討論に(第二日)

三、心の揺らぎと青春の歓喜と(第三日)

四、時代の断層をふみ越えて(第四日)

五、国民同胞感の生成へ(第五日)

はしがきの感想文から

あながき

一写 真一

講義

人生・学問・祖国……………川井 修治

学生生活に対する要望……………宝辺 正久

現代と心理戦……………今立 鉄雄

学生運動への疑問点……………植木 九州男

社会思想の構造と

マルクス主義……………長野 敏一

学問論……………戸川 尚

陶淵明の詩における

東洋的人間像……………津下 正章

わが国固有の人間観の特徴……………野口 恒樹

日本人のころ……………花田 大五郎

マルクス経済学の生成と

近代経済学……………石村 暢五郎

畏と敬と恥……………水野 武夫

第二次大戦論……………中山 優

歴史なき現代に思う……………木下 彪

マッカーサー憲法と
国民主権……………森 三十郎

平和国家建設の

基本的課題……………小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等

B 6 版 433頁 定価 560円 千 100円

(三部作その二) 一理想社 刊行一

続 国民同胞の探求



目次

はしがき

現代の問題点

一、初の宇宙人・ガガーリン少佐

二、ソ連の教育と日本の教育

三、全学連と大学自治会

付、自治会活動への所感

「雲仙合宿教室」の目ざしたもの

「雲仙合宿教室」の記録

一、学生による全体討議(第一日)

二、講義から班別討論へ(第二日)

三、唯物史観の横行を許さず(第三日)

四、経済の諸問題とその研究方法論(第四日)

五、「開かれた日本人」へ(第五日)

はしがきの感想文から

十日後に書かれた感想文から

あとがき

—写 真—

講義

体験と思想………夜久 正雄

現代の思想的課題………齊藤 知正

新中国建設の原動力………佐藤 慎一郎

日本文化の伝統と

現代的意義………黒岩 一郎

現代政治の批判と

新しい指標………羽田 重房

世界の経済と

日本経済(一)………木内 信胤

良識について………花田 大五郎

五日間の生活を

ともにして………小田村寅二郎

思いのままに訴う………

木下 彪・野口恒樹

水野 武夫・峯 辰次

植木九州男・津下正章

班別討論・意見発表会・検討会等

B 6 版 325頁 定価 500円 780円

(三部作その三) 一理想社 刊行一

続々 国民同胞感の探求

国民同胞感の探求

目次

はしがき

国民同胞感……………小泉 信三

— 毎日新聞より転載 —

学問の興隆のために

正しい研究方法を求めて

……………小田村寅二郎

第二次雲仙「合宿教室」のあらまし

「合宿教室」における講義(下記)

「合宿教室」運営の焦点

一、「班別討論」と「夜の検討会」

二、大教協・国文研会員の所見発表

三、合宿教室の総括的所見

はしがきの感想文から(77通)

あとがき

— 写真 —

講義

国民同胞感の育成への

努力と指向……………小田村寅二郎

学問と人生……………津下 正章

E E C をめぐる世界の経済と

日本の経済……………木内 信胤

学生時代を回顧しつつ

現代の学生諸君に……………花田 大五郎

吉田松陰を中心とした

幕末日本の文化精神……………川井 修治

小林秀雄先生のご講義

「現代の思想」……………国武 忠彦記

(所見発表)

大学教官有志協議会……………

水野武夫・黒岩一郎・末吉 哲

植木九州男・吉田靖彦

国民文化研究会……………

小柳陽太郎・山田輝彦・岡本弘之

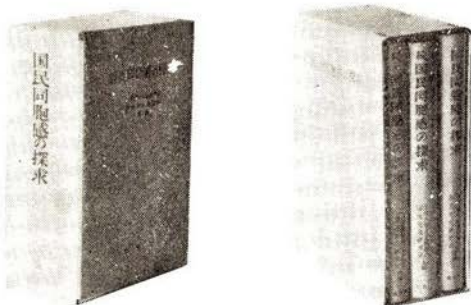
宝辺正久・加藤善之・徳永正己

坪井保国・加藤敏治・関根康弘

瀬上安正

“合宿教室” レポート { No. 5 国民同胞感の探求
 No. 6 続国民同胞感の探求
 No. 7 続々国民同胞感の探求
 大学教官有志協議会 } 共編
 国民文化研究会 }
 一理想社 刊行一

国民同胞感の探求 三部作セット



定価 1,560円 円 270円

若き青年・学生の勉強の友として、この三部セットは、疲れた心をいつも休めてもくれるし、また無限の発展の可能性をたたえる祖国日本の学道の息吹きとその生命のほとばしりとを、身近かにしのばせてくれる。

“合宿教室” レポートは、これからも毎年一冊ずつ出版されていくであろうが、本書はぜひとも書架に一組お備えください。

……お申込みは国民文化研究会へ……

新書版 248頁 定価 200円 50円

新しい学風を興すために

第一集

(附) 合宿教室における短歌創作の記録



「いまここに第七回目の合宿教室を迎えるにあたって、私たち主催者は今回からは「国民同胞感」を「探求」するという心境を脱して、いままでの六回にわたる合宿とはやや心組みを変えております。すなわちこれからは「国民同胞感」を日本国中に拡大していこう、樹立していこう、健全に拡がらせよう、ということを目ざして四泊五日の合宿を踏み出したいと考えているのです。」

「この合宿教室のめざすもの」から

―巻末には参加者全員の短歌作品の総数九百余首の中より一人一首以上をとり、二五八首の短歌を収録した―

目次

- 一、国民同胞感樹立のために
第七回「合宿教室のあらまし」
この合宿教室のめざすもの
- 二、合宿教室における講義
現代の思想的課題……福田 恆存
世界の見方……木内 信胤
- 三、合宿教室における短歌創作
短歌の哲学と技術……夜久 正雄
第一回短歌創作と批評
第二回短歌創作の記録

新書版 298頁 定価 300円 50円



新しい学風を興すために

第二集

合宿教室は、学生諸君が個我の殻を破って、友情の世界に開眼する場でなければならぬ。国の運命と人生の課題に、真正面から真剣にとり組む体験を共にすることによって、失われつつある連帯感が回復されねばならない。権力やイデオロギーによって、人為的に作り出された連帯感ではなく、青年の内発的な意志によって魂がたぎ合わされてゆくならば、それは国の根底を培う大きな力となるであろう。

—「はしがき」から—

目次

一、合宿教室の意義

「戦後」二十年の日本とわれら同人の祈り

第八回「合宿教室」のあらまし

二、合宿教室における講義

物の考え方……竹山 道雄

最近の世界と日本……木内 信胤

(附：パネル・ディスカッション)

現代の政治的危機……木下 広居

三、合宿教室における論説と短歌創作

「聖徳太子の信仰思想と日本文化

創業」の論説……小田村寅二郎

短歌創作について……山田 輝彦

夜久 正雄

雲仙合宿歌集

新書版 299頁 定価 300円 50円

新しい学風を興すために

第三集



“この合宿ではお互いに思想を鍛えて行くわけですが、こゝで注意しておきたいのは、思想とは生活の根本を支える心の姿勢そのものだということです。普通、思想というと、思想大系と殆んど同義語とみなされておりますが、本来思想とは体系化された複雑なものではなく、単純素朴なものでなければならぬと思います。他人の思想体系にすがってしか、ものの言えない人が多い今日の風潮において、特にこの点を強調しておきたいと思えます”

——「思想の形成」から——

目次

一、新しい学生運動の展開
雲仙合宿から桜島合宿へ

第九回「合宿教室」のあらまし

思想の形成……………夜久 正雄

二、合宿教室における講義(その一)

日本の政治と外交……………広田 洋二

日本の政治と経済……………木内 信胤

(附：パネル・ディスカッション)

常識について……………小林 秀雄

三、合宿教室における講義(その二)

歴史と人生観……………川井 修治

現代日本の二つの問題点……………

小田村寅二郎

歌集——この一年の学生短歌作品より

新書版 295頁 定価 300円 50円



日本への回帰

第一集

日本青年の心に魂と魂が響き合うよろこびが実感された時、思想の低迷は必ず打ち破られるであろう。意志は指標を見出し、視野は世界へ開かれるであろう。人の心が正確に働かねば一切の組織や制度は空しい。

雄々しい意志と、みずみずしい情感をもって果敢に現実に向かえる青年、そういう一人の「人物」の養成にわれわれの希いはかけられている。このメカニカルな時代に、野暮とも愚直ともいわれながら一人から一人への「志」の伝達に心血をそそいできた。この冊子は、そういうわれわれの苦闘のささやかな記録である。

—「はしがき」から—

目次

- 一、学問・人生・祖国
私達の学生運動
第十回「合宿教室」のあらまし
- 二、合宿教室における講義
私の構想する世界の新秩序
日本の情緒について
……木内信胤
- 日本政治の憂うべき動向
……岡 潔
- パネル・ディスカッション
……花見達二
- 三、古典入門
吉田松陰「士規七則」
……致村敏雄
- 山鹿素行について
……筒井清彦
- 聖徳太子「勝鬘經義疏」
……夜久正雄
- 天皇と天皇のみ歌……山田輝彦
- 吉田松陰「講孟餘話」
……小柳陽太郎

合宿歌集

新書版 320頁 定価 300円 予50円

日本への回帰

第二集



戦後思想の最大の盲点は、われわれの視野から「国家」と「死」の觀念がすっぱりと脱落していたことであつた。国家とはわれわれにとって、選択の対象ではなく運命であり、「存在」ではなくして「価値」である。遠い祖先と遙かな子孫を包含する「国」は血脈の集団であり、われわれの生命がそこから来、そこへ帰る母胎である。人間がその生命のうつろいやすきを知り、その依拠を求める時、最も身近にあるものは国のいのちである。われわれにとって、それは「祖国日本」である。

——「はしがき」から——

目次

一、思想と人生

マルクス主義の超克……………川井修治
われわれ人間は自分ひとりで生きて
いるのではない……………小田村寅一郎

二、合宿教室における諸義

近代化の意味とその克服……………福田恒存
私の経済哲学……………木内信胤
パネル・ディスカッション

三、日本のこころ

聖徳太子のお言葉と……………夜久正雄
古事記のいのち……………戸川 尚
自己克服……………小柳陽太郎
明治の精神……………山田 輝彦
短歌入門……………山田 輝彦

年間活動報告



日本への回帰

第三集

歴史の参加ということは、必ずしも直接的な政治行動を意味しない。醒めた心で、明日の日本を凝視する努力は「エンブラ反対」のシュプレッヒ・コールに自己陶醉するよりも遥かに困難な行為である。松陰先生が言われたように「一朝の憤激」ではなく、「積誠」によって国を支えるという決意が今日程要請されることはい。雄々しい意志と、美しい心情をもつた一個の人物を育てるといわれわれの運動が、かりそめならぬものであることを改めて反省せしめられるのである。

——「はしがき」から——

目次

一、学問、人生、祖国	「国」について考える……………小田村寅二郎
今上天皇の御歌について……………夜久正雄	
二、合宿教室における講義	
指導者の教養……………太田耕造	
世界の転機と日本……………木内信胤	
日本民族の核性格……………林房雄	
ベトナム問題について……………山本勝市	
パネル・ディスカッション	
三、日本のこころ	
日本の世界像の系譜……………名越二荒之助	
聖徳太子「十七条憲法」……………小柳陽太郎	
短歌創作の意味……………山田輝彦	
年間活動報告	
歌集——学生、青年の作品より	

新書版 324頁 定価 300円 50円

日本への回帰

第四集



大学、沖縄、安保、この三つは相互に関連しつゝ、「安保」へ向って結集されてゆく。革命勢力は、その力と論理のすべを傾けて安保破棄、社会主義革命への道をつっぱしるであろう。政権奪取の構想は、コミュニニストたちの具体的なスケジュールに組みこまれるほどに熟してきた。権謀術策を尽して、彼らは挑んで来るであろう。祖国の歴史と伝統の中に生じる依拠を見出そうとする者と、それらの徹底的な抹殺によつて全く新しい社会を造ろうと欲する者と、思想の戦いは今年から来年にかけて勝敗を決するやまばを迎えるであろう。学問をする者たちが、否応なしにその姿勢を問われる時代が来ているのだ。

—「はしがき」から—

目次

- 一、「国」のいのち
 - 国家の役割……………川井修治
 - 「法そのもの」と「法を生む背後にあつた精神」と……………小田村寅二郎
 - 今上天皇と孝明天皇の御歌……………夜久正雄
- 二、合宿教室における講義
 - これからの国造り……………木内信胤
 - ロシア革命とソ連の現実……………高谷覚藏
 - 西洋文化との対照における日本文化の問題……………竹山道雄
- 三、学問と人生
 - 講孟余話……………小柳陽太郎
 - 歴史における客観的評価とは何か……………国武忠彦
 - 短歌入門……………山田輝彦

年間活動報告

新書版 246頁 定価 280円 円 50円

<国文研叢書 1>

古事記のいのち

夜久正雄 著



古事記のいのち

夜久正雄 著

遠い古代の異った生活の表現の中にも、遠い異国の見知らぬ生活の表現の中にも、現代のわれわれ自身のすがたと変らぬ姿を見るとき、われわれは、そこに永遠の中の自己を見るのです。いま皆さんとこれから「古事記」を読まうとするのも結局は、かういふ心持からであります。世間でいふやうな意味での学術的研究作業としてはありません。「古事記」というものから、自分の心の支へ、自分の心の、生きてゆく上の力を得ようといふ態度で読まうとします。

—本書三〇頁—

目次

- 一、古事記への道
- 二、古事記の魅力
- 三、因作りの叙事詩
- 四、古事記の主題
- 五、愛の歌
- 六、古事記のあらすぢ

(附)

日本古代史略年表

新書版 279頁 非売品

〈国文研叢書 2〉

日本精神史鈔

—親鸞と実朝の系譜—

桑原 暁 一 著



この小著は親鸞と実朝とが前面に出てはいるが、いずれも聖徳太子とのかかわりを心に止めてとらえられているのである。その太子の精神とは何か。一言にして云えばそれは「和」である。仏教語で、忍辱であり慈悲である。云いかえれば目に角を立てぬことであり、思いやりあることである。さらに云いかえれば、是非・善悪の名によって、にわか人間を裁断せぬことであり、自他をわかつた慈喜を共にすることである。

—「はしがき」より—

目次

第一編

親鸞とその系譜

第二編

源実朝覚書

第三編

塔と橋と

新書版 241頁 非売品

〈国文研叢書 3〉

弁証法批判の歴史

高木尚一著

人生の学、人生のロジックというものがいかに大切であるか。たとえば今の世には進歩派と保守派の二つしかなく、前者は善で、後者は悪であるとの、簡単な色分けの上に立って考えたりするのは人生のロジックとしての厳密さを全く欠いているからに外ならない。

本書はヘーゲル・マルクスの弁証法がベルグソン、ヴント等によって批判され地についた論となる過程を説明し、日本の思想の開展すべき方向を明らかにしようとするのが第一の目標である。

― 第一章より ―

目次

- 一、弁証法とは何か
 - 二、弁証法批判の歴史
 - ギリシヤ弁証法とアリストテレス
 - カントよりヘーゲルへ
 - ヴァインデルバントのヘーゲル批判
 - ゲーテとヘーゲル
 - マルクスのヘーゲル批判
 - ショーペンハウエルのヘーゲル酷評
 - ニーチェの超人思想と弁証法
 - キェルケゴールのヘーゲル批判
 - ベルグソンの弁証法批判
 - ヴントの思想と弁証法批判
 - 三、日本思想と弁証法
 - 日本思想の動向
 - 道元と山鹿素行
- (以下略)

新書版 309頁 頒価 320円 下50円

〈国文研叢書4〉

日本思想の系譜

—文献資料集(上)—

小田村寅二郎 編

日本思想の系譜
小田村寅二郎 編

われわれ日本人は、二千有余年ものあいだ「一言語・一族」であり得た。そのおかげで、古典の作者が、現代に生き返って来て私たちに語りかけてくれ、私たちは、それに耳を傾けることができる。何という有難いことだろうか。

私たちが自身の勉学の姿勢如何によって、私たちは、過去とつながり、未来へ進む道を求められる。それもこれも、日本という祖国が、多くの先人たちの、いのちをかけた郷土愛、祖国愛によって、長いあいだ独立を保ち得ていたからである。本書を編集しながら、一つ一つの古典を読みかえして、私はいくたびかそのことを心に思った。

—「はしがき」から—

目次

はしがき

日本思想と和歌との関係について

一、古代

聖徳太子—古事記—日本書紀—万葉集—最澄・空海—祝詞—菅原道真—紫式部—古代における天皇の御歌

二、中世

平家物語—慈円—法然—親鸞—実朝—後鳥羽院—道元—日蓮—北畠親房—太平記—宗良親王—世阿弥—蓮如—中世における天皇の御歌

附録

新書版 317頁 頒価 320円 円50円

〈国文研叢書 5〉

日本思想の系譜

—文献資料集(中・その一)—

小田村寅二郎 編

日本の「近世」は、政治的には個人が非自由に見えるが、われわれの祖先たちはその環境の中でも、決して心の底まで卑屈になってしまったようなことはなかった。社会的な身分の差別に束縛されながらも、精神的には、その差別にとられずに、心の中では、人間としての平等な人生価値を追求しようとしており、お互いにその人生価値を追求する姿勢を敬仰し合う心情が、身分の差異を越えて交流し合っていた。現代思潮の中にいるわれわれ日本人は、つい、この点を見落しがちであることを反省したいと思う。

——「はしがき」から——

目次

はしがき

三、近世(その一)

戦国武将の和歌—千利休—ザビエル

—フロイス—信長公記—太閤記—宮

本武藏—佐倉惣五郎—山鹿素行—契

沖—坂田藤十郎—近松—芭蕉—荻生

徂徠—葉隠—蕪村—田安宗武—賀茂

真淵—山県大武—杉田玄白—林子平

—本居宣長—伴信友—会沢正志斎—

頼山陽—広瀬淡窓—渡辺華山—近世

における天皇の御歌

附録

新書版 409頁 頒価 420円 70円

〈国文研叢書 6〉

日本思想の系譜

— 文献資料集 (中・その二) —

日本思想の系譜 上巻の目録



本書の編集に当たっては、「幕末志士の和歌」および幕末の中心人物「吉田松陰の文献」に編集配分の一つの重点をおいた。また巻末への掲載とはなつたが、明治天皇の御父上であられる「孝明天皇の御心中」をうかがう資料としてその「御尊頼ならびに御歌」にかなりの紙面をさくことになつた。この二つの編集は明治以降の日本の躍進の原動力を、いま記してきたような、日本的思惟と情操とくに「この時期における天皇と国民との心のつらなり」に求めようとしたものである。

——「はしがき」から——

目次

はしがき

四、近世(その二)

- 幕末志士の和歌—鹿持雅澄—平田篤胤—二宮尊徳—大塩中齋—藤田東湖—伊達宗弘—村垣淡路守—横井小楠—佐久間象山—佐久間東雄—伴林光平—吉田松陰—橋本左内—高杉晋作—久坂玄瑞—孝明天皇 御述懐一帖
- 近世における歴代天皇の御歌

(その二)

- 附録Ⅰ 近世全期を通じての諸参考資料
- 附録Ⅱ 日本思想の系譜「参考年表」

新書版 403頁 頒価 420円 770円

〈国文研叢書 7〉

日本思想の系譜

—文献資料集(下・その一)—

小田村寅二郎 編

明治百年を記念して、多数の出版社から続々出されている明治物全集に対比して、本書は、その人物の取捨選択においても、しばしば読者各位に奇異の念をいだかせるような部分があるかも知れない。しかし、明治という時代の日本は、時に多少の例外があつたにしても、全体的には、国民すべてが、明治天皇の御心に心が心の糧のごとくに仰ぎ、大御心に感謝しつつ、大御心に帰し奉ろうと努力しつづけた時代であつた。

この歴史的事実を中心的な視点にしなれば、明治時代の日本思想は、決して解き明かすことができない。

—「はしがし」から—

目次

はしがき

五、近代(その一)

明治初期の詔勅—三 条実美—副島
蒼海—岩倉具視—西郷隆盛—勝海
舟—大隈重信—岩崎弥太郎—福沢
諭吉—千家尊福—田口卯吉—馬場
辰猪—軍人勅諭—菅沼貞風—二葉
亭四迷—新島襄—元田永孚—井上
毅—大日本帝國憲法における「前
文」—教育勅語—伊藤博文—児島
惟謙—内村鑑三—

(以下略)

あとがき



新書版 381頁 頒価 400円 70円

〈国文研叢書 8〉

日本思想の系譜

—文献資料集(下・その二)—

小田村寅二郎 編



いま最終なる編集を終えるに当たって
僭越ながら、編者としての私から、特に
若い世代の読者各位に、心からお願ひ申
し上げたいことは、本書各巻が収録した
歴代天皇の御歌を、いまひとたび精説採
誦せられて、歴代の天皇がたのお心その
ものを、各自の心の中にしみじみとお慰
び申し上げてみていただきたい、それを
怠つての天皇論議は慎しむべきことでは
なからうか、と訴えたい。また、天皇の
大御心に応え奉ろうと生きつづけた日本
国民の「誠」のこもつた生き方に対して
も、どうか日本の歴史伝統の具体的内容
として自分の心の中に味わっていただき
たいものと切望する次第です。

—「はしがき」から—

目次

はしがき

六、近代(その二)

- 夏目漱石—小泉八雲—モラエス—
岡倉天心—中江兆民—田中正造—
清沢瀧之—澁原太郎—青木繁—黒
岩涙香—日露戦争に関する詔勅—
橘中佐—広瀬中佐—山桜集—乃木
希典—東郷平八郎—野口英世—河
原操子—山田孝雄—山川健次郎—
戊申詔書—国民同胞和歌集・明治
篇—明治天皇御歌

附録、参考資料

- 国歌「君が代」と国旗「日の丸」
—聖書・讃美歌の和訳について—
明治天皇の御巡幸について

(以下略)

新書版 283頁 頒価 300円 円50円

〈国文研叢書 9〉

歴史と人生観

—マルクス主義の超克—

川井修治 著

共産圏動揺の兆はようやくやくにしてマルクス主義超克のための時節の到来を告げるものようである。マルクス主義の唯物史観を克服するためには、単にマルクス理論の論理的不備をついたり或はマルクス理論を反証する歴史事実を挙げるだけでは不十分である。

唯物史観を真に超克するためには、その人間観の奥底にまで立ち到って歴史と人間とのつながりそのものを問題にしなればならない。

(本書一九頁)

目次

- 一、歪められた戦後の歴史感覚
- 二、歴史の見方
歴史とは何か——歴史的時間の構造
——歴史的理解について——歴史観の種々相
- 三、唯物史観の概要
唯物論の内容——唯物弁証法の内容
——唯物史観の内容
- 四、唯物史観批判
マルクス主義成立の時代的背景——
唯物弁証法批判——唯物史観批判
- 五、マルクス主義と現代世界

聖徳太子の信仰思想 と日本文化創業

黒上正一部 著



著者

原著は昭和十年七月二十一日、第一高等学校附信会によって世に出たものであるが、昭和四十一年に至って原著を完全に復元し、更に憲法拾七条をはじめ太子関係の資料をそえて出版されたものである。

著者黒上氏は昭和五年、三十才の若さで死去した。明治三十三年、徳島市の素封家に生まれ、商業学校をでて、阿波銀行に勤めた。聡明な宗教家の素質は、少年時代から芽生え、独学で親らん、日蓮の経文から、聖徳太子の研究に進み、特に本書の述作には、一語一句に心血を注いだ。昭和三年三・一五事件のあと、一高に昭信会、高師に信和会という研究グループが生まれたが、共産主義運動の渦巻くなかで、著者は毅然たる態度で学生を指導し、太子のご精神を若い次代の青年に伝えたのである。

目次

—復刊のことば—

序 説

序 説 附 聖徳太子の体験過程

序 説 附 二 聖徳太子御著

「三経義疏」の内容

第一編 聖徳太子の人生観と政治生活

第二編 聖徳太子の信仰思想と国民精神

第三編 聖徳太子の大乗仏教批判

第四編 総合と国民教化

聖徳太子の御思想表現法

と法華義疏の独創的な内容

参考資料

聖徳太子の憲法拾七条

聖徳太子を中心とする系図、年譜、

聖徳太子の時代についての解説

その他

歌よみに与ふる書

(他四編)

子規の文章は難解だが、まさかこれを現代語訳して読ませるわけにもゆくまい。それでは子規の語調が消えてしまうからである。

語調が消えるというのは、筆者の情意がなくなってしまうことである。

この情意をともしない灰色の理屈、実行意志のない観念—つまりイデオロギーを排したのが子規の歌論だ。その歌論から情意を抜きにするわけにはゆくまい。

子規のものは、どうしても原文のまま読むよりほかに方法はない。

—「あとがき」から—

目次

歌よみに与ふる書

..... 明治三十一年

あきまろに答ふ

..... 明治三十一年

人々に答ふ

..... 明治三十一年

「歌話」

..... 明治三十二年

「墨汁一滴」抄

..... 明治三十四年

あとがき・解説

..... 夜久 正雄

新書版 157頁 頒価 230円 千 45円

今上天皇御歌解説

附・万葉集論

三井 甲之著 斑鳩会発行



三井甲之氏は正岡子規の遺業、根岸短歌会を継承し、雑誌「アカネ」を編集、その後「人生と表現」「原理日本」を発刊、大正、昭和の思想界に独自の地位を築いた。

「天皇御歌解説」は昭和二十七年二月、同氏が病床において一切の不自由に耐えつつ「永訣の書」として執筆、自費をもって謄写印刷の上頒布されたものである。

附載の「万葉集論」は明治四十一年から二年にわたって根岸短歌会発行の「アカネ」誌上に発表された論文を集めたもの、六十二年の長い月日をへだてて、ここにはじめて復刻された記念すべき論集である。

目次

天皇御歌解説

万葉集論

万葉集の研究に就て

詩歌製作の衝動と其表現法を論ず
和歌俳句の形式比較論及現代歌俳
墮落の原因

万葉集の女詩人・額田王

柿本人麿の生活と作歌

大伴旅人の生活と作歌

山上憶良

沙弥満誓の歌

山部赤人の歌を論ず

大伴家持

万葉集中の民謡

万葉集中第十六巻に就て

解題……………夜久正雄

刊行のことば……………亀井孝之

新書版 85頁 頒価 230円 千35円

謹選 詔勅集

—明治・大正・昭和—

発行所 斑鳩会

私たちが、自分らの民族の長い歩みを正確に学びたいと思へば、どうしても、過去の日本の文献を、先人觀念なしに素直に読んでみなければならぬこととなります。そうだとすれば、詔勅は、その時代時代の全国民の指標となったものですから、詔勅を読み直してみることは、日本人すべてにとって、欠くことの出来ない重要な事柄の一つとなりましょう。かりに、日本の過去を批判したいと思ふならば、そのことは、さらに一層重要性を増してくると思ひます。

——「あとかぎ」から——

目次

明治天皇

五箇条の御誓文

億兆安撫国威宣布の御親翰

陸海軍軍人に賜はりたる勅諭

教育に関する勅語（その他）

大正天皇

帝都復興に関する詔書

国民精神作興に関する詔書

（その他）

今上天皇

米英両国に対する宣戦の詔書

終戦の詔書（その他）

B5版(8頁) 毎月1回発行
昭和36年11月創刊
発行所 国民文化研究会



— 月 刊 —

国 民 同 胞

定価 1部 20円 年間 360円(送料共)

われわれ国民文化研究会は、現代の学生生活の中に何をねがい、何を求めているか。それはイデオロギーの相剋を越えたゆたかな国民的心情をあまねくくりひろげる以外にはない。これはまことにさきやかな機関紙であるが、この中にこめられたわれわれのねがいに、是非とも耳をかたむけていただきたいと思う。

申込先

下関市南部町3 宝辺正久方

月刊「国民同胞」編集部 (振替 下関 1100)

東京都中央区銀座7丁目3 柳瀬ビル

国民文化研究会 (振替 東京 60507)

— 日本への回帰 —

(第五集)

昭和四十五年二月十日発行

定価

三〇〇円

〒70円

編

者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

発

行

所
社団法人

国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替 東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えます

